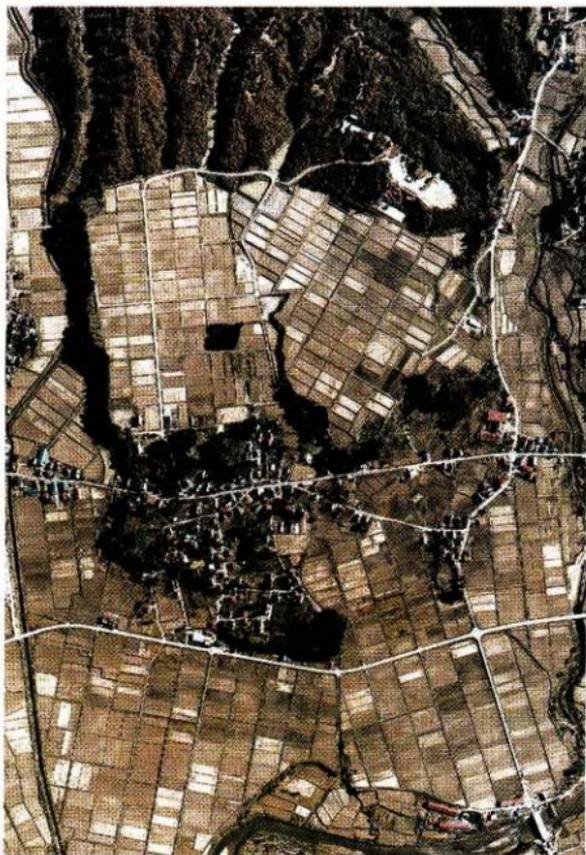


うら た い せき はっ くつ ちょう さ ほう こく しょ
浦田遺跡発掘調査報告書



2000

新潟県・小国町教育委員会

うら たい せきはくつちょうさ ほうこくしょ
浦田遺跡発掘調査報告書



2000

新潟県・小国町教育委員会

序

小国町は、新潟県の中南部に位置し、東・西は海拔300～500mの山脈を挟み小千谷・柏崎両市に、南北は川西・越路両町にそれぞれ隣接した、だ円形の自然豊かな盆地です。町の中央には信濃川の支流である洩海川が南北に流下し、その左右に広がる平地部は昭和30年代に第一次の区画整理事業を終え、小国の基幹産業である農業を支えてきました。しかし、時間の経過とともに農業を取り巻く環境や情勢の変化によって、より効率的な農業基盤を整備する時代となり、大型基盤整備化の取り組みを始めています。

今回の発掘調査を行った浦田遺跡は、小国町で2地区目となる県営ほ場整備小国東部地区内で、町の中央よりやや南に位置し、西側には、縄文晩期の遺跡である延命寺ヶ原遺跡が存在する地域です。事前の確認調査により遺跡の存在が確認され、それに基づいて現地調査を行ったものであります。

発掘調査の結果、多くの縄文晩期の土器や石器のみならず、近現代の生活に密着した土葬墓地なども確認され、先人の遺跡をたどる貴重な資料であると思います。

この発掘調査報告書が、小国町の歴史をたどるための資料として広く活用され、多くの町民の方々から他の遺跡に対しても関心を持っていただく布石となることを期待いたします。

今回の発掘調査にあたり、県教育庁文化行政課、柏崎農地事務所をはじめとする諸機関から多くのご指導・ご協力を賜りました。また、調査担当の池田亨先生をはじめ多くの主任調査員・調査補助員・調査協力員の方々からご尽力いただきました。この調査報告書の作成にご尽力いただいた多くの皆様から心から感謝とお礼を申し上げます。

平成12年3月

小国町教育委員会
教育長 佐藤浩治

例 言

1. 本報告書は、新潟県刈羽郡小国町大字太郎丸字浦田699番地、他に所在する「浦田遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県営圃場整備事業に伴って新潟県教育庁文化行政課による試掘調査によって土師器・須恵器及び柱穴等の検出により、古代の遺跡が確認された。この事により小国町教育委員会が主体となって発掘調査を実施した。調査期間は平成9年（1997）5月28日から8月8日までの47日間にわたって実施した。
3. 発掘に先だって行った現況地勢測量は晴ナルサワコンサルタントに委託し、実施した。なお発掘調査にかかわる遺構・遺物の実測調査、写真撮影等は主任調査員及び調査補助員と調査担当者があたり、遺物の整理・実測・拓影等も同様に冬季間を通じて実施した。なお写真・トレースは調査担当の池田が行った。
4. 出土遺物及び調査にかかわる資料はすべて小国町教育委員会が保管している。なお遺物への注記は太郎丸（T）野田（N）浦田（U）、1997（97）の略記号としてTNU97とし、これにグリッドナンバーを併記した（例、TNU97-A-A1-P1）。Pはピット検出の遺物である。またA区D7グリッド周辺の上師器密集区については「平安時代」の平字を付し、数字ナンバーで取上げた遺物がある。整理作業でグリッドに帰属を修正した。
5. 本遺跡は三つの特徴的な地区に分けられる。A区は水田開墾によって削平されたが、多くの中小ピット群の遺構区である。平安時代の住居跡と推定される。B区は小さな沢地形で、低湿地であった。開田によって数回にわたる埋立地となり、柴木・竹・塩ビパイプ・土管と時代の交遷を語る暗渠排水の施設が確認された。

被覆土壌中からは各時代の遺物（土器・木片を含む）が検出されている。

C区はA区の南側に接する部分で土師・須恵器及びこれにかかわる遺構を検出したが、C区の西端部に広がる近世以来明治初期の上葬墓遺構区であった。以上3地区のはっきりと区別される特徴を示しているが遺物は開田工事に伴って四散し、混入していた。
6. 出土遺物のうち木器、特に漆器・柱根・木筒・数珠玉等については奈良県（財）元興寺文化財研究所保存科学センターに保存処理を委託した。また土葬墓検出の土壌分析、種実・不明植物遺体についての自然科学分析はバリノ・サーヴェイ（株）にお願した。さらに土葬墓第64号・56号墓検出のヒトの歯の歯冠については日本歯科大学新潟歯学部、高橋正志教授にお願し、写真・鑑定報告書を頂いた。各々第5章4に編集した。
7. 発掘調査該区の下層は粘性の強い白色シルト層である。杉原敏夫氏（新町）から焼成実験をして頂いた。充分須恵器に生産できることが確認された。今後の資料として記録しておく。なお土師器杯底部に粉の圧痕が確認できた。これのレプリカ作制については、六日町（南魚沼郡）歯科医師石田洋氏のご協力を頂いた。
8. 周辺の遺跡環境調査によって新に千谷沢「原小尻居半遺跡」湯本昭男採集品（須恵器）、太郎丸「小丸山遺跡」（宝篋印塔・古銭・火葬墓）、同真福寺境内「真福寺板碑」（自然石）の新遺跡についても関連するものとして編集した。新発見の真福寺自然石板碑の紀年銘解読については東京大学名誉教授（国学院大学教授）千々和到氏の御指導を頂いた。なお発掘調査から本書作制に至るまで県文化行政課をはじめ多くの方々、諸機関からの御指導と御協力を頂いた。特に町内からの発掘作業に従事して頂いた方々には熱暑・降雨による泥沼、土葬墓の発掘調査に献身的な御協力を頂き、その労に感謝し、厚く御礼を申し上げる。

目 次

序

例言

第1章 調査に至る経緯	(小国町)	1
調査体制		2
第2章 遺跡の位置と環境	(山崎正治)	
1 自然・地理的環境		3
(1) 遺跡の位置と周辺の地形		3
(2) 小国町の気候と動植物		5
2 遺跡周辺の歴史的環境		6
(1) 縄文時代		7
(2) 古代・平安時代		7
(3) 中世時代		8
(4) 寺院址		9
(5) 塚		10
(6) 集落址		10
(7) 古墓・供養塔		11
(8) らん穴		12
(9) 八海山信仰址		12
小 結		13
第3章 調査の概要	(池田 亨)	
1 調査の方法と経過		20
(1) グリットの設定		20
(2) 調査日誌—方法と経過		20
2 整理作業		20
3 発掘調査日誌		22
第4章 遺跡	(池田 亨)	
1 概観		23
2 層序		24
3 遺構		26
(1) 6本柱遺構とピット群		26
(2) 溝状遺構		31
(3) 近世以来土葬墓群		31
(A) 桶棺墓		32

(B) 甕棺	32
(C) 火葬骨のある遺構	35
(D) 土坑	39
(4) その他の遺構	40
4 遺跡概括	41
第5章 遺物	(池田 亨)
1 平安時代の遺物	42
(1) 土師器	42
(2) 須恵器	43
(3) 木製品・柱根	54
2 縄文時代の遺物	56
3 近世土葬墓群・遺構外の遺物	61
(1) 棺桶	61
(2) 甕棺	62
(3) 副葬品	62
(A) 陶磁器	63
(B) 木器・金属器	63
(C) 砥石・硯・播鉢	69
(D) 土人形	74
(E) 数珠	74
(F) 六道銭	75
4 出土遺物の科学的分析	82
〔1〕遺物の自然科学的分析調査(バリノ・サーヴェィ株式会社)	82
〔2〕土葬墓(56・64号墓)出土の歯について(高橋正志 日本歯科大学新潟短大教授)	84
〔3〕出土木製品保存処理報告書(元興寺文化財研究所保存科学センター)	85
第6章 まとめ	(池田 亨)
1 平安時代の遺構・遺物について	87
2 縄文時代の遺物について	88
3 近世土葬墓について	88
第7章 関係遺跡の資料	(池田 亨)
附1 桜ヶ岡遺跡出土遺物について	91
附2 原小屋居平遺跡採集の遺物について	93
附3 小丸山中世墳墓について	95
附4 貞治6年銘、真福寺境内の自然石板碑について	98
終章 「浦田遺跡」まとめの略年表	101
引用・参考文献	104
写真図版 1~20	
報告書抄録	

図版目次

第1図	小国町遺跡分布図	15
第2図	遺跡周辺の現況とグリッド設定図	21
第3図	更正図(発掘位置では地籍「墓地」があった)(明治17年更正図より作制)	23
第4図	基本層序(県文化行政課試掘調査報告書より作制)	24
第5図	中央ベルト(東西列)D区北面の層序	25
第6図	南北列縦断面(粗朶暗渠A区～C区・B区～D区)	25
第7図	大型6本掘立柱遺構とセクション図	26
第8図	掘立柱建物跡(A区B・C-5・6グリッド)とセクション図	28
第9図	A・C区各ピット・土坑断面図(1)	29
第10図	A・C・D(D1～C58)区各ピット・土坑断面図(2)	30
第11図	SD3(古代水路跡)断面図	31
第12図	A・C区遺構分布全図	33
第13図	土葬墓群の分布状況と墓群のグルーピング、堀遺構図(SD3)	35
第14図	B区発掘調査平面図及び遺物採集地点	41
第15図	土師器(1)	44
第16図	土師器(2)	45
第17図	土師器(3)	46
第18図	須恵器(1)	52
第19図	須恵器(2)	53
第20図	木簡・柱根・楔状木器・各種木器等実測図	55
第21図	縄文時代石器(1)	58
第22図	縄文時代石器・土器(2)	59
第23図	縄文時代石器(3)	60
第24図	土葬墓平面～断面図(1)	64
第25図	土葬墓平面～断面図(2)	65
第26図	墓墳内その他出土漆器・櫛	67
第27図	墓墳内及び遺構外出土陶磁器類実測図	71
第28図	土葬墓副葬品等木器・金属器その他実測図	72
第29図	砥石・硯・掃鉢実測図	73
第30図	土人形(馬・人面)	74
第31図	出土銭貨(土葬墓副葬品・他)(1)～(2)	76
第32図	江戸時代太郎丸村絵図(元禄5年、中島家資料)	89
第33図	原「桜ヶ岡遺跡」(北原勲コレクション 須恵器・中世須恵質陶器)実測図	92
第34図	千谷沢「原小屋居半遺跡」(湯本昭男コレクション、須恵器・砥石・縄文石斧)実測図	94

第35図	小丸山要害と宝篋印塔採集墳墓跡概念図	96
第36図	小丸山表採宝篋印塔残缺(A~I)と渡来銭拓影・七日町墓地宝篋印塔実測図	97
第37図	上栗墓地の古墓(供養塔)概念図	98
第38図	真福寺境内の板碑拓影図(種子・釈迦三尊)	100

表 目 次

第1表	小国町の遺跡一覧表	17
第2表	土葬墓一覧表(副葬品等、特徴)(No.1~No.3)	36
第3表A	土師器、坏口径・底径分布表(15点)	43
B	土師器 ●口径(16点) ●器高(13点) ▲底径(49点)	43
第4表	土師器観察表	47
第5表	土師器叩締技法の観察表(第17図)	48
第6表	黒色土器(土師器)観察表	49
第7表	須恵器観察表	50
第8表	木製品・柱根等観察表	54
第9表	縄文土器・石器観察表	56
第10表	副葬品 漆器・櫛の観察表(第26図)	66
第11表	陶磁器観察表	68
第12表	木器・金属器観察表	69
第13表	砥石・硯・播針観察表	70
第14表	土葬墓副葬銭他グリット出土銭貨一覧表	75
附1表	「桜ヶ岡遺跡」出土遺物観察表	91
附2表	「原小屋居平遺跡」出土の遺物観察表	93
附3表	町内各所遺跡出土銭貨分析表	99
第15表	板碑盛衰年代分布表	99

第1章 発掘調査に至る経緯

今回実施した浦田遺跡の発掘調査は県営ほ場整備事業東部地区の計画に伴って実施した調査であり、平成8年8月、新潟県柏崎農地事務所から小国町教育委員会（以下、町教委）経由で新潟県教育委員会（以下、県教委）に遺跡の取扱いについて、協議がなされた。

このため町教委は平成8年11月に県教委の協力を得て、工事により影響が予想される地区の確認調査を行った。調査対象区域は、浪海川に注ぐ小国沢川右岸の低位段丘上に位置する。東側から西側に緩やかに傾斜し、西側には古代の遺跡である「野田遺跡」が存在している。確認調査の結果、西側については遺跡の広がりを認めることはできなかったが、東側について、遺物・遺構が確認され、以前沢が東西に走り、その両側に平安時代の小規模集落が築かれていたものと判断された。このことは工事に先立って本調査が必要であるという事と同時に、新たに発見された遺跡として、北側を「浦田遺跡」、南側を「野田東遺跡」として周知化の手続きをとり、平成9年1月、県教委は遺跡台帳に記載した。

この結果をもとに町教委は、柏崎農地事務所に遺跡の概要を示し、県教委の指導を受けながら協議を重ねた。協議の結果、当初の工事予定を遅らせることのないよう平成9年前期に本調査を行うこととした。日程的に厳しいこともあり、調査面積が極力少なくなるよう「野田東遺跡」側は、遺物包含層に達しないような工事とし、本調査を実施するのは現田地で削平予定の「浦田遺跡」周辺のみということで話がまとまった。

町教委では早速発掘調査に向け準備を開始した。調査の時期、調査員の派遣、調査の方法等について検討を行ったが、最大の難問は調査員の確保にあった。

わが町では、過去に2回の発掘調査の経験が少なく、調査体制・知識とも極めて低位にあった。そんななか、県教委より六日町在住の池田亨先生を調査員としてご紹介いただいた。直ちに池田先生に打診したが、先生の今取り組んでいる仕事、距離的な問題など、簡単には返事はいただけなかった。時期も押し追った平成9年4月、先生の承諾もないまま、当時小出町で整理作業中の池田先生をお訪ねし、小国町の実情を説明申し上げ、わが町の山崎正治先生を補助員としてお願いする約束で、ようやく快諾をいただき一挙に調査体制が整い、平成9年6月発掘調査開始となった。

各調査の調査体制及び期間は以下のとおりである。

分布調査（平成8年8月5日）

調査主体 小国町教育委員会（教育長 佐藤浩治）
事務局 中島季男（小国町教育委員会 社会教育係長）
調査員 吉田淳一（新潟県教育庁文化行政課 主任調査員）
小松彰（同 文化財調査員）

確認調査（平成8年11月11日～15日）

調査主体 小国町教育委員会（教育長 佐藤浩治）
総括 五十嵐徹（小国町教育委員会事務局長）
管理 中島季男（小国町教育委員会 社会教育係長）
庶務 桑原さおり（小国町教育委員会 主事）
調査員 北村亮（新潟県教育庁文化行政課 主任調査員）
吉田淳一（同 主任調査員）

発掘調査（平成9年5月28日～8月8日）

調査主体 小国町教育委員会（教育長 佐藤浩治）
総括 五十嵐徹（小国町教育委員会事務局長）
管理 中島季男（小国町教育委員会 副参事）
庶務 桑原さおり（小国町教育委員会 主事）
調査員 池田亨（日本考古学協会員）

調査体制

- 調査主体 小国町教育委員会 教育長 佐藤 浩治
事務局 総括 五十嵐 徹（教育委員会事務局長）
管理 中島 季男（教育委員会副参事）
庶務 桑原さおり（教育委員会主事）
- 調査担当 池田 亨（日本考古学協会員）
- 主任調査員 山崎 正治・北原 勲・真貝 健一・林 久（以上小国町文化財審議委員）
- 調査補助員 高橋 至・保坂 利雄・湯本チヨ子・佐藤真理子・村山 恵子・今井 芳子
- 調査協力員 植木 徳平・大橋 秀雄・北原 政治・北原 隆・小林 宏三・佐藤 信二
中島 利一・保坂 一衛・木我為一郎・植木 幸子・北原スミイ・保坂 広美
羽鳥 フミ・細金佐太一・細金フジエ・米山 玉策・山岸ハルエ・稲波 美子
- 排土作業重機協力 平野建設株式会社、現況地勢測量 株式会社ナルサワコンサルタント
- 参考遺物資料提供 北原 勲（須恵器・中世陶器・古銭等）湯本 昭男（須恵・土師器等）
植木 徳平（縄文時代石器）、小林 春子（古銭）、山崎正治（古銭）
小松 正淑（文書資料）、中村哲四郎（民俗聞き取り）、中沢 政栄（民俗聞き取り）
中橋 権次（民俗聞き取り）
- 出土桶棺の復元 佐藤 信二（元桶職人）

検出されたヒトの焼骨（細片）はすべて調査終了後、太郎丸野田の共同墓地六地藏尊隣地に納め、地元太郎丸野田区の協力を得て、記念碑を建立した。供養導師は真福寺（曹洞宗）住持。

第2章 遺跡の位置と環境

1 自然・地理的環境

(1) 遺跡の位置と周辺の地形

浦田遺跡は新潟県刈羽郡小国町大字太郎丸字野田、地籍字浦田に所在する。本遺跡の所在する小国町は、中越地区のほぼ中央や南西寄りに位置している。信濃川の支流、洩海川の造成した沖積谷盆地にある。四周は東に関田山地を介して小千谷市に境し、西は八石山地を境に柏崎市に隣接している。南は中魚沼郡川西町、北は三島郡越路町とそれぞれ接している。面積約86km²、広袤（横、長さ）と広がり東西約11km、南北12km、周縁44kmである。

町内にはJRおよび私鉄の便はなく、鉄道利用はもっぱら三島郡越路町の塚山駅（信越線）か、小千谷市の上越線小千谷駅を利用する。バス路線は昭和の初期から開通し、長岡市・小千谷市方面への交通によった。最近の自家用車の普及に伴い、上越新幹線や関越高速自動車道の利用によって東京日帰りも容易になった。

その昔、国鉄利用で初めて小国町を訪れる人の誰もが口にするのは、塚山駅で下車して四囲の狭さにびっくりし、この奥にある小国町は一体どんな山峽の僻地かと想像したという。また一方、県道柿崎・小国・小千谷線で八石山系田島峠越えに、あるいは反対に小千谷側から小国隧道経由でそれぞれ初めて小国入りをする人には、きれいに区画された美田の広がり、落着いたたたずまいをみせて、しかもカラフルな両側山麓一帯の河岸段丘の集落群を見て、予想をはるかに上まわる小国町の広々とした景観にこれまでびっくりしたという。

この小国盆地の地形を概観すると、洩海川の造った盆地状の河谷氾濫原平野である。洩海川の下刻作用による地質は、新潟県内で一番若い中越第三紀層褶曲地帯のやや中央、洩海向斜構造谷のほぼ中流に位置している。東は関田山地によって信濃川縦谷の谷口に位置して発展した小千谷市と接し、八石山地は西側を限って連なり、鯖石川の河谷に発達した高柳町・柏崎市の南鯖石・中鯖石・北条地区と接する。南は中魚沼郡川西町に接する山添地帯で、この地域は頸城山地の隆起運動の影響から、洩海川壮年期の蛇行侵食谷（嵌入メアンダー）で頸城丘陵東北地域の流れを集めて、小国町大貝地区に流入する。

大字原の「袋の原河岸段丘面」と、川を隔てて対面する「乙の平・細田段丘面」の間の開析作用を最後に自由蛇行（フリーメアンダー）に移行する。そして小国氾濫原平野を形成しながら小国町北端に進み、越路町の小坂・塚野山地区から、関原背斜構造運動（褶曲隆起運動）に妨げられて、再び小規模ながら嵌入メアンダーで開析しつつ、不動沢・岩田地区から再びフリーメアンダーに移行する。

現在では河川改修工事による直線河道で長岡市下山地区で信濃川に合流する。したがって前述の塚山駅周辺は鼻の先がつかえるほどの峽谷景観を呈する。この辺の洩海川の河谷は、関原背斜の構造運動に先行して流路を形成した。地形学上でのいわゆる先行性流路で、背斜構造を乗り越えて流れ得たものと考えられる。

関田山地は、長野県の千曲川と新潟県南西部の高田平野との間に連なる褶曲山地で、新第三紀の堆積岩を主とし、その上に火山岩類が覆っている所もある。関田山地は延々40kmに脊陵山地を形成し、最高峰は南端の斑尾山を除くとおよそ中央に位置する鍋倉山（1289m）を頂点に1000m前後の山並みが連なって信越国境を形成するが、隣接する中魚沼郡から小国地区へ入ると標高300m前後と高度を下げ、やがて台地状となり、越路町米迎寺駅の背後で新潟平野の沖積層に埋没する。

一方、八石山（518m）を主峰とする八石山系は、地形的には頸城山系から分岐して、長岡市関原町まで

一連の見事な山並みを形成しているやに見える。しかし地質構造的には、南側3分の1は覆峠・松之山背斜、中央部3分の1は八石背斜、北3分の1は関原背斜の三背斜構造によって構成されている。小国町北部から、越路町 袴沢・木和田久保・長岡市大嶺・高鳥・千本付近の黒川流域で終わる。

小国和紙で有名な小国町山野田集落は、この八石山系の南部覆峠、松代背斜と中央八石背斜の接合部に近い大沢峠中間からのびる一支脈の尾根の基部に発達した集落である。小国地区は旧来から便宜上、洩海川を中心に左岸を川西地区、右岸を川東地区とし、流域の上流・中流・下流をそれぞれ上地区・中地区・下地区としてきた。浦田遺跡は川東の上地区に位置し、洩海川の低位段丘面の一画に位置している。

洩海川の河岸段丘は、信濃川流域の中魚沼郡津南町・中里村・川西町・十口町市、小千谷市地区に広がる日本の代表的な河岸段丘に比べることはできないが、洩海川が形成した小規模な段丘面が数段分布している。特に川東地区の太郎丸・上岩田・櫛沢・新町・法坂・桐沢・七口町地区には広範で、しかも見事な段丘面が発達している。いずれも関山系から流出する小国沢川・櫛沢川・野又川・桐沢川・大坪川・染屋川などの小河川によって開析されながらも、一連の配列分布を見せている。小国町の大部分の集落はこれらの段丘の上に形成され、一般に「居平」と称している。

もちろんそこは、最も新しい低位段丘面で標高80~90mで、水害を避け、通風・採光に恵まれた生産的な生活面である。その背後には標高100~120mの中段段丘の崖垂が迫り、豊かな湧水の接点でもある。浦田遺跡もまたそうした地形の一画にある。浦田遺跡の上面には延命寺ヶ原の高位段丘面（標高145m）が広がる。地籍は大宇小国沢・上岩田・櫛沢にまたがるこの面は、小宇大平を主体として櫛沢川までの間、南沢・大沢・北沢によって開析されて雑木林に覆われ、西面している。延命寺ヶ原中段段丘面（標高100m）に裾を引いている。この面は厚いローム質土層に被覆され、大正時代（1912~26）までの柵摺用土の用材として使用され「ウスベト」（白用土）と呼ばれていた。かつては初秋の茸狩りで賑わった場所である。現在は小国町森林公園として変貌し、観光のメッカとして注目され盛況である。

延命寺ヶ原中段段丘面は、現在一望の水田になっている。山裾には森林公園の付属施設「オブス」、「養楽館」と大駐車場が敷設されて町民憩いの場となっている。中段段丘面はかつて阿弥陀川上流から引水による大小二つの灌漑用溜池によって耕作される小範囲の水田があっただけで、他はすべて畑地であった。昭和49年（1974）土地改良事業によって、洩海川からポンプアップされた用水によって中段段丘面は全面的に開田され、約30haの美田と化した。段丘の南寄り縁辺部は、縄文時代の遺跡としてよく知られている。「延命寺ヶ原」の地名は、この段丘面に所在したと伝えられている「延命寺」なる寺院跡の名称に由来している。延命寺は源氏の流れを汲む「小国氏」の菩提寺であったと伝えられている。

低位段丘面は、中段段丘崖垂の接線で標高90~100mの間に分布している。低位段丘面は旧来から祖先が水害から遁れ得る安全性・排水良好な高燥衛生面、田畑配分の経済性等から居住空間として湧水地を求めて集落形成が行われた。「浦田遺跡」のある野田・清水尻・阿部田面（太郎丸・上岩田）もこの範疇に属する。南は小国沢川、北は阿弥陀川によって限られたこの面の南半は、小国沢川の扇状地堆積地形で、丸山田・堂地免と前面に押し出され、従って徐々に洩海川に向けて傾斜している。

堂地免の名称は、太郎丸に所在した大口堂の免租地であったという。野田の居平面は、小国沢川の浸食から逃れた基盤層の良好な面で、阿部田面に続いている。延命寺ヶ原中段段丘崖下の清水尻は、野田・阿部田面より約5mの比高差があり、阿弥陀川を隔てて上岩田面に続いている。清水尻・水上付近は地名が示すように湧水が豊富で、オッサ清水のような名水井戸もあり、イブダと呼ばれる耕土の深い溜田「とうぶけ」「さわた」「下やち」等湿地帯が多い。これら低位段丘面は「クロボク」と呼ばれる黒色土が厚く覆っている。

(2) 小国町の気候と動植物

四周を各丘陵山塊に囲まれた谷盆地を北へ向って流下する渋海川が造成した沖積地が、各河川によって刻まれた開折地形は隆起造山運動によって谷間特有の豊かな自然地形を示している。縦断的な地形をみると東西方向でE370-75-494W、S345-85-75-74-171Nの標高差が大概の数値である。すなわち、東西側の山塊が高く、南北に細長い谷間は北からの季節風が吹き込む地形をなしている。また「米山サンから雲が出た 今に夕立がくるやら——」の三階節の通り、東日本性気候帯に位置しながら西山八石山塊にはばまれた盆地々形特異な気象条件下にある。

夏は高温多湿、冬は過湿性の高い豪雪が地理的な気象現象の特徴となっている。歳時記風に小国の季節感を説述すると、早春は4月である。4月は融雪期の後半にあたるが、日照時間もぐんと延び、平均気温は13.5℃、平均湿度は70%と一年中でいちばん解放感に満ちた季節である。村の鎮守の祭礼が中旬に集中する時期である。

雪消えの早い南向きの土壌にはユキワリソウ・ショウジョウバカマ・イチリンソウ・シュンラン・イカリソウなどの草花が咲き、マンサクが黄色く明え、山桜がほころび始める。5月になると陽春の到来で、梅も桜も一斉に咲き始める。まさに春爛漫の好季節となる。気温も21℃、湿度71%と暖さが増して、山は山菜採りで賑わう。時折り日本海を通過する低気圧が、南寄りの突風をもたらすことがある。フェーン現象で夏のような暑さに見舞われる。

小国の初夏は6月の好天続きでやってくる。空気は乾燥し、火災シーズンでもある。青葉若葉が目にも痛い程になり、小鳥たちの囀りも耳に心地よい。盛夏は7月から8月中旬までで、気温も30℃前後に上昇し、湿度が高く蒸暑いのが特色である。小国の梅雨現象は顕著ではないが、一般的には初夏の後期から盛夏の初期までで、時には集中豪雨に見舞われることもある。幸い小国町は水害の恐れは遠退いた。かつて渋海川の河床が浅かった頃は、自由奔放に暴流していたので、当時の農民たちは水害との闘いを繰り返していた。近世以降河床が低下して、溢水することはまなくなった。

お盆が過るとめっきり涼しくなり、小国の初秋がやってくる。急に日足が短くなり、涼しさが増すが、時には厳しい残暑に見舞われる。この時期から稲刈りが始まり、曇天、雨天が多くなるが太平洋岸側に比して晴れ間が多い。台風被害が少ないのも小国の幸いの一つである。

10月下旬から11月は晩秋で、気温も19℃～16℃と下り、秋の日暮れは「釣瓶落し」の言葉通り早くなる。菜や大根の取り入れに忙しく、秋たけなわの紅葉を愛するゆとりもない。小国の紅葉は気温と湿度の関係で、色鮮やかになることはない。

11月下旬から12月は初冬である。日照時間は冬期間を通じて月平均50～60時間、最低では40時間位と短くなり、午後2時を過ると日暮れを感じる程である。気温は2℃前後とめっきり寒くなり、初雪、初雪が降り、早ければ根雪になる。秋雨前線の気圧配置から、いよいよ西高東低の冬型気圧配置に変わり、初期には強い木枯が吹き、ユキオロシの雷鳴が轟く。こうなるとまさに冬将軍の到来である。

1～2月はいわゆる「セッキ」(雪季)である。西高東低の気圧配置の大陸性気団が次々と発生し、吹雪の日が多くなる。小国盆地では、季節風はそう強くはないが、重い「ドカ雪」に見舞われる豪雪期である。積雪は年によって差異はあるが、少雪で0.7m、豪雪で4.2m昭和前半期の資料で平均3.2mであり、年間降水量平均2,700%のうち11月～2月の月平均降水量300～600%に達し、年間降水量は冬期間に集中する。しかしこの積雪量も小国町の上・中・下地区で大変な差異がある。

昔から小国町では「一里一尺」と言われてきた。下地区から上地区に向けて、一里行くごとに積雪量が

尺ずつ多くなるというのである。下地区で氷雨でも上地区に上るに従ってミゾレになり、山地区ではボタ雪に変わる。鷺之島の標高60m、法坂75m、諏訪井83m、大貝で240mとその標高差は180mに達しているからである。

やがて3月ともなれば、さしもの雪は降り止まり、中国西北部から黄砂が飛来して雪面を色づける頃になると待望の融雪期である。日足もびて気温も上昇するが、朝方になって気温が下り、雪が凍って「しみ渡り」(雪原を歩く)が楽しめる。川の瀬音も高まり、ネコヤナギの芽がふくらみ、雪融けの床にはユキツバキが咲き、土堤にはフキノトウが顔を出す。待ちに待った春の訪れである。暗くて長い冬中、雪に閉じ籠められ、苦しみと忍耐の生活から解放されて雪中生活の不経済性も苦しみもすべて忘れさせてくれるのがこの春の訪れである。

波海川やその支流にはナマズ・フナ・コイ・ウグイ・ニゴイなどの淡水魚が棲息している。生活污水が流入し、水田の乾田化が進行し、農業の影響などでカジカやメダカがすっかり姿を見せなくなった。また旧来マス・サケ・アユの遡上は減多にないと言われている。

哺乳動物ではコウモリ・モグラ・ネズミ・トウホクノウサギ・イタチ・ムジナなどが棲息しているが、最近タヌキが急増して畑作を荒しまわるようになった。鳥類では最近ヒバリとクイナが姿を見せなくなった。明治初年頃は、トキが多く棲息していた出で、上地区に「ドウの巣山」がある。ドウはトキの別称である。

小国盆地で喬木とは、植林によるアケナスギが多く、アカマツも両岸山塊の派生尾根に群生していたがマツクイムシの被害を受けて見る影もなくなった。ケヤキは旧河道の崖縁に繁茂している。波海川の岸辺にはオニグルミがよくみられる。昔はカワグルミの原木が各所に生えていて、建築材に使用されたが今ではまったく減少し、珍しい存在になった。

フナは群生地が限定されていて、早春一早く新緑の芽ぶきが日に痛いほどの美しさと春のよこびを与えてくれる。下草類は特別なものは見られない。コムラサキシキブ・ヤブツバキ城にある。近年ハルジオンなどの帰化植物が繁茂してきた。

2. 遺跡周辺の歴史的環境

「小国」オグニという地名は全国的に多く、その景観も共通している。四周に山をめぐらした盆地になっている。吉田東伍は「四方山をめぐらした独立地で、一小国の観を呈す。故に小国という」(『大日本地名辞書』)といい、柳田四男は「二里二里の山坂を越えてやっと到達できる山地」(『地名の研究』)としている。当小国町もまた中世末期までは刈羽郡か魚沼郡か、その所属が明瞭を欠いている。文献資料では「魚沼郡小国保」としている方が多い。小国が魚沼郡と関係が密であることは地形的に見てうなずける。

境界をなす関田山塊は、ゆるやかに傾斜して北走する。その最高峰(小国内地)は城山(時水域)の384m、丸山の372m程度である。これに比して八石山塊は、主峰八石山(518m)が刈羽側(北)からは隔絶の地であり、小国盆地の存在すら無視されていた。しかし一方魚沼郡との関係は古く、下地区の「千谷沢」は小千谷の「千谷郷」の出郷であると言われている。

四圍隔絶の地、小国の地形は「隠れ里」的性格を持っている。小国の旧家と言われる先祖を調べてみると山伏や落武者の農墾説が多い。また吾野島の「大塔塚」は後醍醐天皇の息子、大塔宮護良親王(延慶元～建武2年1308～35)の墓所との伝説である。近世になってからも小国へは六十六部の廻国聖や座頭、素性不明の浪人者などが入りこんでいる。また漂泊の行者、木喰五行菩薩(行道)もこの別天地小国で半年余りの長逗留をし、木喰仏を彫造した。

しかし中世戦国時代には守るに易く、攻めるに難い天然の要害である小国郷は、武家所領として最適地であった。小国郷が清和源氏頼光の流れを汲む小国氏の所領として、歴史上に登場するのは鎌倉時代の初期（『尊卑分脈』、『新潟県大百科事典』上（新潟日報事業社））で、古代から中世にかけて「小国保」として存在した国衙領であった。小国保は八石山塊を介して「佐橋荘」・「鶴川荘」などに接し、東側関田山地を境にして「藪神荘」・「妻有荘」と関係する。浪海川下流の北縁には「紙屋荘」・「太田保」などが存在していた。

「小国保」の古代の存在を位置付ける文献資料は皆無である。縄文時代晩期まで、小国の河岸段丘上にムラ造りをしてきた人々が、いずこともなく遷転してから幾星霜、おそらく小国の人々の祖先となつたであろう人々が移り住むようになったのは何時頃の事であったのだろう。それらの証を解明するにも本「浦田遺跡」の発掘は極めて重要なものである。以下第1図、周辺の遺跡地図に従って小国町における遺跡について略述する。

(1) 縄文時代

遺跡番号37（以下数字のみ記す）の国沢遺跡は縄文時代後期の遺跡である。浪海川西岸の低位段丘面（標高70m）に所在し、現状は畑地及び墓地となっている。遺跡は古くから知られ、好事家によって遺物が収集されていた。『小国郷土史』（1938）の口絵写真に国沢遺跡出土品として、石鎌・石包丁・石錘・石槍・石棒など各種が写真掲載されている。遺物は武石小学校に保管されていたが現在所在が不明である。

20番、上ノ原遺跡は現在宅地である。縄文後期の遺物包含地で、石錘などが採集された。60番、坊屋敷遺跡も遺物包含地であり、また中世渡来古銭が採集されており複合遺跡と思われる。

3番、延命寺ヶ原遺跡は浪海川東岸の中段段丘面（標高100m）の西端縁辺部に所在する。この遺跡も古くから周知の遺跡で、特に石鎌が多く子ども、大人を問わず大量に採集され、その数は万を下らない。遺跡は昭和41年（1966）、小国町教育委員会によって一部の発掘調査が行われた（『縄文時代の延命寺ヶ原』中村考三郎他1966）。縄文中期初頭から後期・縄文晩期（藤橋式一大洞B・BC・C式期）の土器石器が多量に検出され一部は町の資料館に展示されている。本浦田遺跡の卑近距離にあり、本調査によって検出された縄文遺物は延命寺ヶ原遺跡からの流入ないし水田への客土によって搬入された遺物と思われる。

13番水吉遺跡、14番池田遺跡は共に中期の遺物が採集されている。53番、郷土山遺跡は、浪海川西岸にあって大きくクランク型に山流する東側へ突出する舌状台地上（標高118m）の北縁に位置している。延命寺ヶ原と同位の中段段丘面であり、古くから遺物が採集され、中期から後期の壺形土器など一部は町資料館に展示されている。縄文時代の遺跡は11件を数える。

(2) 古代・平安時代

小国町の古代はまったく不明である。51番、桜ヶ丘遺跡は昭和35年代（1960～）の土地改良工事によって出土した須恵器や中世陶器・柱状の木材が確認されたが、遺構確認などの調査も行われることなく「住居跡ではないか」などの話題になった程度で年月が過ぎ去って今日に至った。

34番、御館遺跡は浪海川東岸、大字千谷沢鷺之島字御館（標高69.5m）の段丘崖の縁辺部を利用して造営されていた。昭和59年（1984）国道の拡幅工事に当って緊急発掘調査（小国町教育委員会）を行った。ここは中世城館跡として小国町第一級の遺跡であった。全面発掘が望まれたが予算も少なく、また遺跡保存の見地からも調査区は最小限にとどめられた。

発掘調査が進むにつれて予期せぬ平安時代の掘立柱遺構3棟、須恵器、土師器が一括して検出された。土師器（杯）には墨書の認められるものや、黒色土器も検出された。また柱穴列の配置関係から考察して住居跡というよりも官衙跡ではないかと推定された（『御館—発掘調査報告—』1985大河内勉他）。御館の発掘調

査によって小国町の古代史を探る貴重な遺跡となった。なお63番、原小屋居平遺跡は今般の浦田遺跡発掘調査に関わって新に発見された須恵・土師器の包含地であり、中世陶器および縄文時代の打製石斧が採集されている。原小屋居平遺跡は鷺之島居平と同一標高の低位段丘のフチと呼ばれる広大な氾濫原（比高9m）が両居平の間に介在している。このように須恵・土師遺跡が、浦田遺跡及び2番の野田東遺跡を含めて4遺跡が小国の古代史（9世紀以来平安時代）の手がかりとなるわけである。

(3) 中世時代

中世城館跡は小国地内に数多く所在している。そのほとんどが小規模な山城であるが、争乱の続く中世の一時期、各集落の自衛のために心血を注いで築いたものであろう。小国の城館跡を語るには「小国氏」の存在を明らかにしておく必要がある。先述の通り小国氏の祖は清和源氏頼光の流・源三位頼政（平安末期の武将）の弟頼行である。頼行は平安時代末期に小国保を領有し、土地の名を氏として小国氏を名乗った。

『尊卑分脈』によれば、実際に小国に downward して居館を構えたのは頼行の孫頼連（頼繼とも）であった。爾来、数世紀にわたり小国保に跋扈し、領内の開発に尽しながら南北朝代には南朝方としてその本拠地を西蒲原郡弥彦荘（岩室村）の天神山城に移した。小国保に残った一族によって守備、開発は進められた。

小国地内の数多い山城は、その集落の首領が自衛のために築いたものもあるが、多くは小国氏の影響を受けていると思われる。ただ鎌倉初期、南北朝代、戦国時代と変遷、拡大する山城を年代、様式として識別する調査はまだ充分ではないが、中世「館」と「要害（山城）」の二本立が普通であった。

館は平場の集落中に構えられ、地頭や集落の首領の平素の住宅兼政庁であった。したがって館は中世集落において核心的位置を占め、同時に土塁や堀を構えて要害性を保持しつつ、同時に経済的生産単位としての農村と密着していた。また一方で河川、潟などの水運を利用し易く、交通とも結びついているのが通例である。

小栗山地内の水田から大正15年、径2尺5寸、深さ4尺の椽の箱に太平・景元・宣徳通宝など14種約18貫の埋納銭が出土したという。近世になると一層田畑の開発が進み、集落も拡大、道路整備が進むにつれて居館跡は削平、埋没して発見しにくくなった。しかし要害（山城）は館を中心に一里四方の範囲内に丘陵などの適地や河岸段丘の縁辺部など天険の地を利用して築城された。山城は有事の時の避難所、籠城のための施設であった。したがって近世近代に到っても開発による破壊を免れ、原形を遺存してきた。

4番、小国館址（大字小国沢字石原田）は小国氏の居館跡と推定される。現在は真福寺（曹洞宗長安寺末）境内の南側に土塁、空堀が確認される。小国館跡の要害は16番の小国沢城跡（小城山、標高256m）・15番法末城（286m）・5番崩沢城（210m）・7番諏訪井城（218m）・49番原城（森光城）（204m）・46番源明城（203m）・45番小栗山城（210m）・44番猿橋城（210m）跡群が居館を取り巻く形で所在している。

小国沢城跡と原城跡は要害堅固な構築で、前者は小国頼連が居城し、後には新保喜右衛門が居城したと口傳されている。原城は小国氏の一族で小坂下野守の居城であったという。18番時水城（城山標高370m）はかつて小国氏の詰の城で、規模広大、要害堅固なことは近隣に類を見ない壮大な山城である。その後北朝方の上杉憲顕の臣、曾根五郎左衛門の居城と言われている。

42番大脇城跡（141m）、40番箕輪山城跡（140m）は同一縄張りやなす馬蹄形の城郭で、小国氏の一族小国頼平が居城し、後に姓を大脇と改めたという。町城外になるが記号Bは小坂城跡で、小国氏一族の小坂源藏頼通が居住した。

36番、武石城跡（標高150m）も小国氏一族で、武石氏を名乗り宗家に随従して岩室・石瀬方面へ移ったという。19番の桐沢城跡（標高200m）は幾条もの土塁を構えた堅固な山城である。24番の法坂館址（大字

法坂字北平)は、集落内にあり、低位段丘の崖垂(標高72m)に位置し、集落全域を縄張りとする構えである。法坂集落の山崎氏の宗家の館である。本丸・二の丸。馬場などが確認される。本丸跡にある山崎家は今でも屋号をジョウ(城)と呼び、これの要害は17番の法坂城跡(標高200m)で、小国沢城と桐沢城との中間点に位置している。

34番は古代で先述した御館遺跡である。地元では「中御館」と称し、昭和59年(1984)の発掘調査によって平安時代の建造物との複合遺跡であった。中世居館跡は、土塁・空堀・地形遺構・掘立柱建物址・井戸跡2基等々が確認された。出土遺物は珠洲系中世陶器や青磁・青白磁・瀬戸、鉄洋・鉄釘や中国渡来古銭などが検出された。古銭の最新は永楽通宝(初鑄年1408年)や瀬戸焼きなどから御館の存続年代の上限は15世紀後半と推定されている。

館址は東西80m、南北60mもの大きな規模であった。居館主は佐藤大膳太夫頼尚(『温古の菜』、文禄三年『定納員数日録』、『越後野志』)だというのが、やはり小国氏の居館が上地区から移ってきたものではなかろうか。

29番、釜ヶ入城跡(標高370m)も佐藤氏一族の三法寺氏の居城といわれる。ここは小千谷との峯界にあり、桜町トンネルの直上に位置している。28番鳥屋城跡、35番大沢城跡、39番上村城跡、36番の武石城跡と共に御館防衛の城砦群で、越路町のA中山城跡やB小坂城跡も一連の城郭ともみられる。中山城跡には縦堀(敵形阻害)が確認され、小国の各城砦跡にはみられない戦国時代の修築である。

南北朝時代、小国氏は徹底して南朝方として活躍した。したがってこれまでみてきた各城砦跡はほとんど南朝方のものが基盤であろうと思われる。ところが大字諏訪井の細田川を境に、南部は北朝方の船岡氏の勢力下にあったと推量される。その根拠は10番の苔野島城跡が船岡氏の本拠であり、洪海川の瀬替工事のため大きく変形しているが、麓には「根小屋」の地名もあって明らかに「館」の営まれたことが認められる。さらにその尾根続きに9番の増沢城跡、洪海川上流に山野田城・三桶城跡がある。いずれも苔野島城の管轄下にあった。しかし、これだけの数の城跡跡が存在しているにもかかわらず、これらを巡って攻防戦を伝える資料も口傳も残っていない。ただ一つ「ハヶ谷城の戦い」という伝説がある。これは次項で述べる。

(4) 寺院址

小国町で一番古いと言われる寺院址は50番の盛光寺址である。この寺は現在の真光寺の前身だと言われる。寺伝によれば寛元3年(1245)、小国頼行の末流小国源太郎左衛門盛光は、弟頼盛とともに鎌倉北条の軍勢2万騎とハヶ谷城に戦って敗れ、小国谷の中村(現在の森光)に落ちのびて右臣とともに自刃して果てたという。男子3人あったが、長男の太郎盛経は討死し、二男盛国と三男盛次が父の菩提を弔って4年後の建長元年(1249)一字を建立し、父の名をもって盛光寺(真言宗)とした。

また長男盛経の室高子は、夫の安否を気遣って小国谷へやってきたが、土民のために乱暴され死亡した。ところが悪疫が流行し、これは高子の祟りだと恐れをなした土民等によって一社を建立して御霊を鎮めたのが森光神社の前身「高衣社たかぎい」だというのである。

ハヶ谷城は岡中記号G及びFの八谷城跡と八石小城であろう。この2つの城はその構築の状況から、完全に小国側の城跡であることが分かる。

6番、長福寺址(諏訪井)は、太郎丸真福寺の末寺であったが、昭和中期(1950年代)無住となり、廃寺となった。檀家は真福寺に移籍した。現在諏訪井集落の墓地になっている。

21番は安定寺址(大字相野原)は一説に柏崎市南鯖石大字西之人に移転したという。移転の年代は不詳だが、現在同所には安住寺があり、木喰五行菩薩彫像の微笑仏が所蔵されている。「定」が「住」に変じたも

のかも不明である。

22番の来迎寺址(大字相野原)は相野原の口吉神社の別当寺で、小国谷草創の古寺と言われている。

52番、法光院址(大字原字坊屋敷)は、何時の頃か三島郡塚野山原集落に移転した。この塚野山原は小国町原から出たもので、同所には法光院が現存しているが、安定寺と同様「宝光院」となっている。法光院址の崖下に渋海川の釣鐘淵があり、いわゆる沈鐘伝説が伝えられている。さらに下手には過去帳を投入したと言う箱淵と呼ぶ所もある。

(5) 塚

塚の实地調査は充分尽くされていないが、54番、大塔塚は古来から貴種潜入伝説としてこれまで広く喧伝されてきた。所在地は大字苔野島字陵(みささぎ)にある。苔野島集落東の後背山麓(標高200m)台地上に位置している。昔から大塔宮護良親王の陵墓と伝えられてきた。苔野島城主船岡氏の一族、瀬辺伊賀守は鎌倉の土牢から親王を救出し、小国谷へ辿り着いた。しかし、やがて病に倒れた親王は雪深い苔野島で一命を終った。その地名もミササギ、近くには「お供塚・幸運坂」などの場所や地名があって興味がそそられる。

『刈羽郡旧蹟志』(1909年)によれば、当時老杉が3本、老松が1本根株を交えて植えられてあり、いずれも目通り7~8尺もあり、杉は根元が一株になっていた。塚の周囲は約10間(約18m)ばかりだったと記している。現在は塚跡には石祠と地元青年会によって建てた「大塔塚」(昭和3、1928年)の記念石柱があるばかりで塚のマウンドは失なわれた。また一説には大塔宮ではなく、高倉宮以仁王(1151~80治承4年)の陵墓だとの説もある。

27番、千部塚(大字法坂)は地名だけが残り、千本塚とも呼ばれ、千部のお経を書いた石を埋めたとも伝えられている。高さ10m程の虚空蔵山があり、頂上に虚空蔵尊の祠がある。頂上は平坦に削平され、南東側には幅5~6m、比高2m程の帯郭のような施設がある。山の基部にも幅4~5mの曲輪状の段切りが施してある。果たして経塚だけなのか、または背後の山地と一体の山城なのかも知らない。

31番、堂塚山遺跡(大字千谷沢字入山)は段丘上縁辺(標高140m)に所在し、現況山林である。若草保育園、小国町・越路町水道企業団事務所の裏山に位置している。山麓には「上ノ原集落址」があり、この付近に大そうな長者が住んでいたと言われる。堂塚山には「朱瓶伝説」があり、これは長者の黄金千杯、漆千杯、朱千杯が今もお埋蔵されているというのである。

12番、狐塚(大字諏訪井字狐塚)、規模や状況は全く不明である。法末の愛宕神社から南へ約1km山道を下ったカーブの所で東側山頂比高差30~40mの頂上一辺8m、高さ0.5m程の方形平地があり、北側中央部に自然石(40×20×13cm)が建ててある。通称オクネンと呼ばれているが、その意味するものは奥の院とか奥殿を意味するものと思われるが、未調査である。さらにここから100m程離れて長さ11m上幅4m、底幅1.5mの空堀が細尾根を塞ぎ、さらに50m程進むと掘曲輪を一条巡らしただけの単郭の跡跡に遭遇したが、方向、位置関係が確認できなかった。以後の調査が必要である。

62番、次郎ヶ峰塚(大字大貝字大田)は中世以来の関東街道の峠に所在し、小国保と妻有荘の境界にあたることから境界塚と思われるが資料はない。

(6) 集落址

8番、馬頭田(マトウゼン)址(大字諏訪井字馬頭田)は、中世代のいつ頃か、ここが旧諏訪井の集落だったと伝えている。近くには共同稲架があったと思われる「稲干平」がある。この馬頭田の奥まった所に11番の横根集落址(大字諏訪井字横根)がある。ここは修験の行道にあたり、馬頭田よりもさらに一昔前の旧諏訪井村だったと言われ、寺屋敷と呼ばれる場所には平坦地井戸跡が所在している。

23番、立ヶ島村址(大字法坂字海端)は、元禄以前(～1688)に川欠によって法坂地内八日町へ移転した。古記録には楯ヶ島ともあり、「館ヶ島」にも通じて興味深い所である。(3)項の中世時代で説述した17番の法坂館跡の直下に位置している。この集落の一族は山崎姓を名乗り、後に山崎茂兵衛は郡中取締り庄屋を勤めた。さらに北魚沼郡川口町西倉の地に天保年間(1830～44)開拓を進め、山崎新田を起こした。

立ヶ島村は、旧澁海川の東岸にあった自然堤防上に営まれた村ではなかったかと推察される。対岸の二本柳村も元禄年間(1688～1704)、川欠によって現在地に全村移転した。

26番、屋敷ノ入(大字法坂字野又)の近くには太兵衛沢という同様の廃村址遺跡がある。屋敷ノ入から法坂地内に移住したのが溝口氏、太兵衛沢から移ったのが松田氏であると伝えられている。

32番、上ノ原址(大字千谷沢字上ノ原)は前述の堂塚山の麓、原小屋集落の南にあたり、中位段丘面にあった。昭和初期(1926～)まで2～3軒の家が残っていたが、全村原小屋に移転した。33番の月ノ木(大字千谷沢字月ノ木)は、参謀本部5万分の1地形図に集落として記載されていた。詳細は不明である。

38番、山武石(大字武石字瀧ノ脇)は、国道291号線沿で、国沢川の右崖上の山懐にあった。武石村は中世の初め頃ここに立村したと言われる。武石村発祥の地である。

43番、鈍三郎址(大字八王子字鈍三郎)からは大字千谷沢の^{いの}茂野氏が移住したと伝えている。廃村地を新に開墾した時、甕形陶器に収納された中国渡米古銭(岩井市在住中村氏所蔵)が出土した。銭貨の分類調査等は行われていない。

47番、外山址(大字森光字外山)は昭和47～(1972～74年)頃、旧森光小学校跡地に集団移転した。現地は小栗山に出る田沢川の流域で、今も廃屋の跡がみられ、作業場として残した建物も2～3軒ある。そのさらに奥まった所、字池ノ原にも3～4軒の集落があったが、慶長10年(1605)頃廃村になったという。屋敷平という地名が残っている。

58番、大貝町址(大字大貝字大貝町)、大貝の集落はもと十二ノ森にあったが、いつの頃か大貝町に移り、さらに現在地に転住したと伝えられる。59番、荒屋敷址(大字桐沢字大官免(荒屋敷))は、七日町への街道が山裾を通過する辺り、数戸の集落が存在したという。附近には庚申塔が祀っており、土地改良工事に当って中国渡米古銭が数枚発見された。

現在は越路町に合併しているが、記号CとDの旧下新田・上新田も忘れてはならない。この2集落は元和年間(1615～24)に立村し、享保年間(1716～36)まで存続したが、澁海川の川欠のため全村が原小屋に移転した。現在でも両集落は旧地に神社を残したまま、年々の祭りは氏子達によって行われ、維持管理をしている。記号Hの^{まがひら}程平(柏崎市大字北条字程平)は、旧武石街道の中継集落で、茶店などもあったと伝えられている。

小国と海岸方面を結ぶ重要な街道だった武石街道は、小国船道が整備されるまで人馬・物の交通が頻繁であったことを物語る路傍の石仏が多い。特に地藏信仰が厚く、旅の安全を祈願したものであろう。

(7) 古墓・供養塔

30番、上栗古墓(大字七日町字下居平)、小型の五輪塔が3基ある。いずれも原巻の供養塔である。1基は屋号インサのもので、インサは原巻の宗家と言われている。他の1基は屋号ウラ家のもので、インサの分家に当るが、一時は集落での大きな力を持った家柄だという。少し離れたもう1基は屋号ジュウゼンサ家の供養塔で、この家も一時期繁栄したという。年号は前の2基が寛文7年(1667)、後の1基は判然とはしないが、延宝3年(1675)かと思われる。いずれも年号は新しいが、高さ110～120cm程で高さはあるが荘重さが無い。しかし石工の技法は古いタイプを残した五輪塔である。また武石の国沢の墓地にも2基の五輪塔が

あり、元禄4年(1691)銘がある(37番)。ここは縄文遺跡でもある。

64番、小丸山墓址(大字小国沢字オノ神)は小国沢地籍であるが、太郎丸の入会地で柴木伐り場であった。戦時中食料増産のため開墾され、現在畑地である。畑耕作中に古銭が採集され、宝篋印塔の残骸を大概3基分を採集した。ここは真福寺の東谷タッチュー沢(塔頭沢)の東側に位置し、東西90m余、南北30m前後比高差10m前後の独立残丘である。この地形は人工の中世館跡の要害址と思われる。

既述の小国館跡(推定)の真福寺境内に隣接し、南側にも幅20m余、比高差5m余の空堀(現廃棄水田)が認められる。これは小国氏の時代(南北朝代14世紀)に比定できる。宝篋印塔(凝灰岩質)は略式化がみられる、特に基礎部がなく五点が揃うものはない。中世小国の歴史解明に必要な一級資料である。また畑耕作の畝立中に宝篋印塔主部、水輪残骸、焼骨と火葬墓とみられる焼土坑面も確認された。

66番、土橋の宝篋印塔(大字七口町字土橋)。現況墓地で、字上居平と下居平の中間にあたり、宝珠院(真言宗)境内続きに位置している。七日町の共同墓地で、屋号カンゼンとカンゼンイモチの墓が同一区画に建てられている。その中に2基分の宝篋印塔の笠部がある。1基は逆位にコンクリート付けして他の笠部の台座に使われている。カンゼン家は前記の屋号インサと並んで原巻の宗家であるという。

原巻にはもう一軒の屋号イナバ家があり、同家の墓誌によれば宇多天皇の後胤で上州総社の蒼知城(蒼海城)から北朝方上杉氏に従って越後に入って原勝左衛門と号した。永正7年(1510)治右衛門と改め、八代目は丹五郎を称したと記している。しかしこの墓域には古墓は1基も見当たらない。

65番、板碑(大字太郎丸 真福寺境内)平成10年4月8日に新発見された自然石板碑(58×24×15cm)で、平面に梵字(種字バク・アン・マンの陰刻)釈迦三尊を配し、下中央に「貞治六丁未月日」右脇に施主、左脇に敬白と浅いノミ跡である。真福寺境内の歴代住山墓の中にそっと置かれた状態であった。小丸山からの出土と思われるが、証明される資料はない。

新潟県、特に中越地方の板碑集中地域は南魚沼郡・中魚沼郡川西地区であるが、真福寺板碑の特徴等と板碑の統計的な見地からも最盛期の板碑であり、南北朝代小国氏研究に必須資料として小国町で発見された板碑第1号である。資料に乏しい中世史を確証するために前記の宝篋印塔の発見と共に大きな前進であった。

(8) らん穴

らん穴は南北朝時代の城郭に付随して存在するものと見られている。緊急時に避難穴とし、物資を隠匿したりしたものと伝えられている。小国では山城の16番小国沢城跡、19番桐沢城跡、29番釜ヶ入城跡、40番箕輪山城跡等にらん穴がある。若野島城跡にもあると言うが、確認されていない。最近太郎丸共同墓地の南脇(字上の山)の沢に確認された奥行3m、幅1.9m、高さ1.6mで、やや中央には炉跡と思われる炭化物もある。地元では「カクレ穴」と称している。カクレ穴は小国館に付属するものと思われる(90頁写真)。

(9) 八海山信仰址

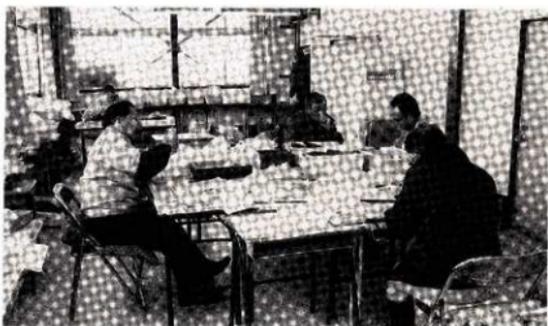
小国町で通称八海山と呼ばれている61番(大字上岩田字向山)は、また一般的に「クズレ」と呼んでいる急峻な崖の稜線上に設けられた祭祀場には八海山やその他の石仏が祀られていたが、近年になって石塔群は上岩田の諏訪神社境内に移された。かつて上岩田を中心とする八海山講中が組織され、毎年8月31日～9月1日にクズレに登拝し籠行が行われた。戦前には草角力が奉納されたという。

小国町全域でも「作神」として八海山信仰が厚く、8月31日の夜は長い竹竿の先に茄子を半分に切った燭台をつけて燈明をあげ、はるか魚沼の八海山を遥拝したものである。上岩田諏訪神社境内に移された石塔群は、明治30年代(1897～)のものであるが、現在もなおクズレの稜線に移し残された舟型光背の行者像をした六臂の分尊像は庚申塔であろう。すなわち青面金剛王と思われる。ほとんど土中に埋没しているが、古く

江戸時代寛政期（1789～）頃のものかも知れない。

小 結

野田集落が一村として独立しなかったが、川欠に苦しむ太郎丸が新田開発の拠点とした所であろう。その一環が「浦田」であった。元禄5年（1692）の太郎丸村絵図（第32図）には、野田集落に隣接して浦田に4軒の民家が描かれ、野田は8軒である。また明治39年（1906）、太郎丸の「新旧調査一覧表」によれば浦田の4軒は五右衛門・嘉左衛門・十三郎・甚三郎の4人で、五右衛門には「元禄・天保年間退転の記録アリ」と注釈が記されている。嘉左衛門には「転住カ絶家カ不詳ナリ」とし、十三郎・甚三郎の横には「右同断」とある。なぜ浦田の住人が4軒とも無くなったのか、野田の8軒中「角兵衛」のみが退転したにすぎない。野田と太郎丸をとりまく環境・位置において何が退転の条件であったのか見当づける資料は現在みられないが、政治的、社会的、経済的な側面から今後の研究を進めなければならない。

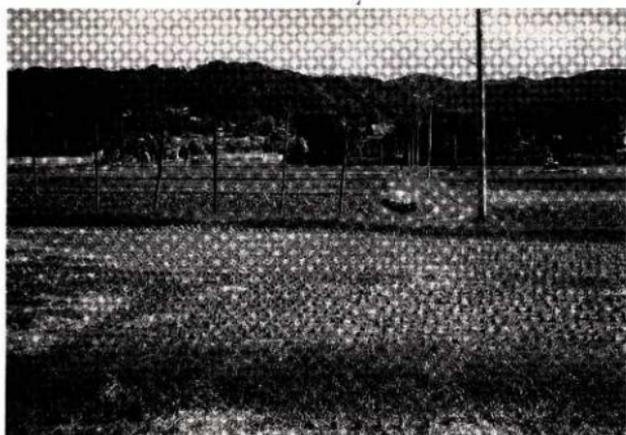


遺物の整理作業



稲架のある早春の小国町

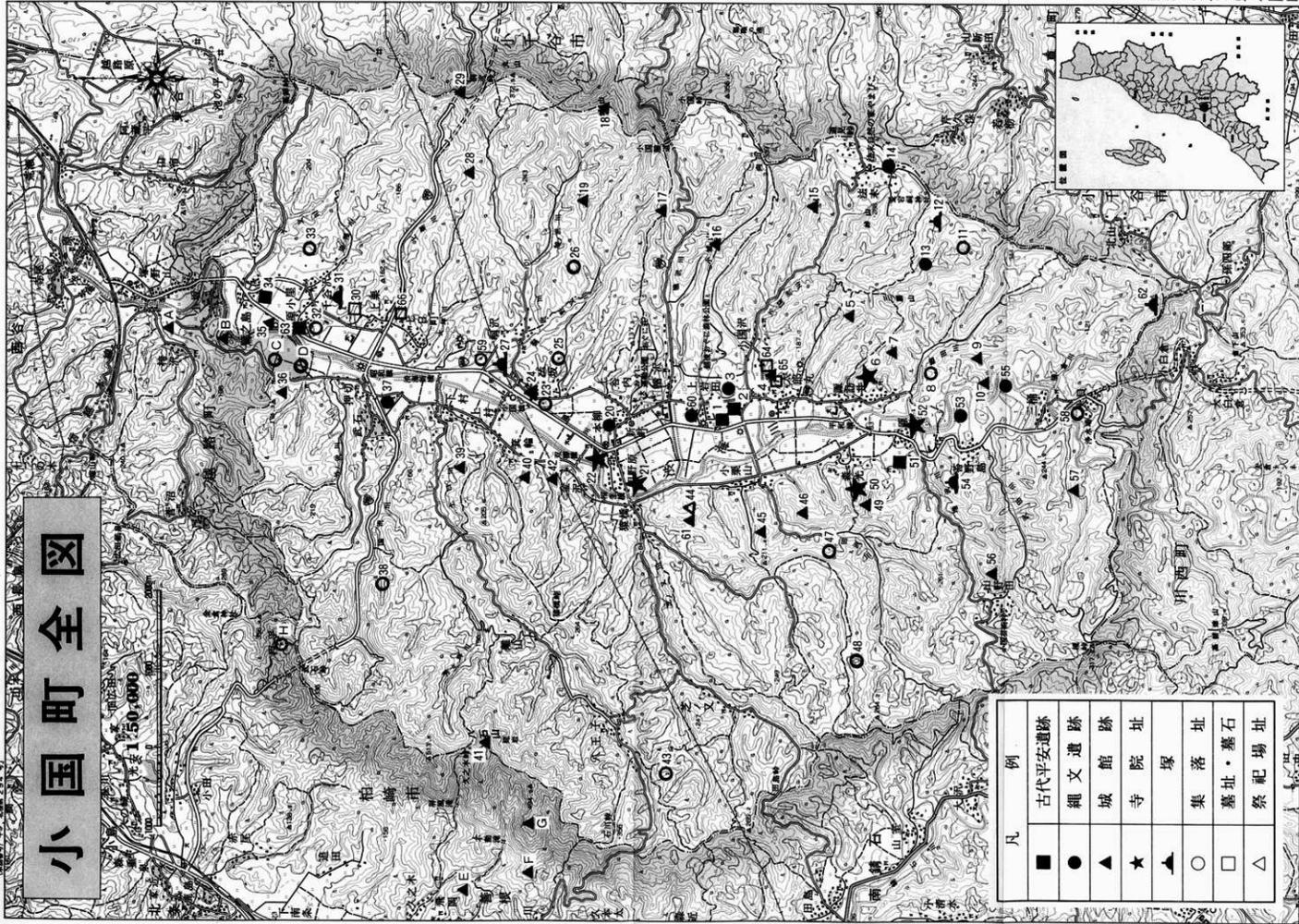
MEMO



51. 桜ヶ岡遺跡（原字桜ヶ岡）

小国町全図

縮尺 1:50,000
 1000 5000 10000



凡例	
■	古代平安遺跡
●	縄文遺跡
▲	城館遺跡
★	寺院址
▲	塚
○	集落址
□	墓址・墓石
△	祭祀場址

新1図 小国町遺跡分布図

北海道地図株式会社北海道支店
 電話 0481-865-7700

第1表 小国町の遺跡一覧表

地区 番号	集落 番号	遺跡名称	種別	所在地	現況	遺構・遺物	出土物など 所蔵者	備考
1		浦田遺跡	遺物包含地	大字太郎丸字浦田699他	水田	土師・須恵器 近代墓地	小国町教委	平成9年発掘調査埋蔵
2		野田東遺跡	遺物包含地	大字太郎丸字野田	〃	〃・〃・漆器片 磁石	〃	平成8年県教委試掘、 圃場整備
3	8	延命寺ヶ原遺跡	遺物包含地	大字太郎丸字大原1647他	畑 水田	縄文(中～晩期) 土器・石器	小国町教委 長岡市博物館	昭和41年発掘調査遺物調査、一部植 集、伝延命寺跡、城跡ともい う
4		小国館址	城館跡	大字小国沢石原田	寺院境内	中世(南)空堀 土塁		中世小国氏の居館跡と 推定される
5		崩沢城跡	城館跡	大字太郎丸字崩沢	山林	空堀(3条) 削平地等		尾根越えの間道を掘す
6		長福寺址	寺院跡	大字源訪井字源訪井	集落墓地			昭和30年代無住となり 廃寺
7	12	源訪井城跡	城館跡	大字源訪井字殿入	山林	空堀(7条) 曲輪数ヶ所		
8		馬頭田	集落跡	大字源訪井字馬頭田	水田			「マトウゼン」と読む
9		増沢城跡	城館跡	大字若野島字川向	山林	空堀(4条) 曲輪・削平地等		若野島城跡と尾根続き
10	18	若野島城跡	城館跡	大字若野島字若ヶ島～川向	山林	空堀(4条) 竊堀(3条)・水ノ手		上根小屋・下根小屋・ 舟窪など地名
11		横根	集落跡	大字源訪井字横根	山林			寺屋敷の地名、「横根 寺」の伝承
12		狐塚	塚	大字源訪井字狐塚	山林			
13	3	水吉 (長者ヶ池)	遺物包含地	大字法末字水吉1800	水田	縄文時代(中期)	内山貞敏 神林昭一	
14	4	池田遺跡	遺物包含地	大字法末字池田290	荒地	縄文時代 (石斧・石皿)	内山貞敏	
15		法水城跡	城館跡	大字法末字沢中	山林	空堀(5条) 曲輪・井戸跡		
16	9	小国沢城跡	城館跡	大字橋沢字若沼	山林	空堀(9条) 曲輪・茶釜・槍	高橋 勇 小川菊二	小国氏の居城・後新保 森右衛門居城
17		法坂城跡	城館跡	大字法坂字南沢	山林	空堀(6条) 曲輪・削平地		
18		時水城跡	城館跡	大字桐沢字柳平	山林	空堀(4条) 雪室・曲輪多数		小千谷との境で朝沢城という、昔は 五郎左衛門居城、かつて小国氏の居城
19	16	桐沢城跡	城館跡	大字桐沢字古城	山林	空堀(12条) 曲輪・井戸・乱穴等		
20	6	上ノ原遺跡	遺物包含地	大字新町字上ノ原	住宅地	縄文土器(後期) 石鏝	長岡市博物館 新町小学校	
21		安定寺址	寺院跡	大字相野原字安定寺	水田			何時か柏崎南跡石に移転
22		来迎寺址	寺院跡	大字相野原字上ノ原	畑			相野原日吉神社の別当 寺(神宮寺とも)説
23		立ヶ島	集落跡	大字法坂字海端	水田			元禄以前川欠により字八日町へ 移転、一帯に龍ヶ島という。
24		法坂館址	城館跡	大字法坂字北平	住宅地	馬場・井戸・塚跡		山崎マキ総本家の屋号 「城」という。

25	5	法坂才の神遺跡	遺物包含地	大字法坂南平1250	畑	縄文(中～後期) 石斧・石鏝	松田 勇 神林昭一	
26		屋敷ノ入	集落跡	大字法坂野又	山林			近くに太兵衛沢という集落跡がある。
27		千部塚	塚	大字法坂字下川原	山林			頂上に虚空蔵菩薩が祀ってある
28	15	鳥屋城跡	城館跡	大字七日町字鳥屋城	山林	空堀(4条) 削平地等		花立ともいう、石祠数基ある。
29	10	釜ヶ入城跡	城館跡	大字七日町字城ノ沢	山林	空堀(8条) 樹形曲輪等		小千谷市との境、桜町トンネルの真上
30		上栗系石	墓塔	大字七日町下居平	墓地	五輪塔3基		近くに足利義尚廟所と伝える所あり
31		堂塚山	塚	大字千谷沢字入山	山林・畑			朱熹伝説がある
32		上ノ原	集落跡	大字千谷沢字上ノ原	畑			昭和初めまで数戸の民家あり原小屋に移転
33		月ノ木	集落跡	大字千谷沢字月ノ木	水田 山林			参謀本部5万分1図に集落記載
34	19	御館址	城館跡	大字千谷沢鷺之島字御館	畑 住宅	平安・土葬・礎石・礎石 中世・築城・井戸・土塁	小国町教委	昭和59年国道工事に先立って発掘調査
35	13	大沢城跡	城館跡	大字下新出字古城	畑			
36	14	武石城跡	城館跡	大字武石字外山	山林	空堀(5条) 小削平地等		小国氏の一族武石氏居城
37	7	国沢遺跡	遺物包含地	大字武石字国沢197	畑 墓地	縄文(後期)	神林昭一	
38		山武石	集落跡	大字武石字滝ノ脇	水田 山林			武石集落発祥の地という
39		上村城跡	城館跡	大字横沢字岩平	公園 山林	空堀(2条) 曲輪等		
40		箕輪山城跡	城館跡	大字横沢箕輪塚之沢	公園 山林	連郭式曲輪・乱穴		塚之沢を取巻き大脇城と尾根続き
41		八石樹形城跡	城館跡	大字八王子字樹形	山林	土塁等		頂上に東北電力機反射板設置
42	11	大脇城跡	城館跡	大字横沢字大脇	畑 山林	空堀(8条) 屋敷・曲輪等		小国土馬頼平(大脇姓)居城
43		鈍二郎	集落跡	大字八王子字鈍二郎	山林	渡来右銃・貯蔵機	岩井市在中村	
44		猿橋城跡	城館跡	大字横沢字猿橋	山林	空堀等		近くの小栗山集落に八海山という地あり、8月3日、土着にて暴乱
45		小栗山城跡	城館跡	大字小栗山字殿入	山林	空堀・曲輪等		
46		源明城跡	城館跡	大字小栗山字源明	山林	空堀(縦・横堀) 曲輪		
47		外山	集落跡	大字森光字外山	畑 山林	住居址		昭和47～49年頃森光小学校敷地跡へ集団移転
48		池ノ原	集落跡	大字森光字池ノ原	水田 山林			屋敷平の地名あり慶長10年頃廃村という
49	17	原城跡	城館跡	大字原字冬籠山甲	遊歩道 山林	空堀(縦堀等) 曲輪等		小国氏一族の小坂下野守居城

50	盛光寺址	寺院跡	大字森光寺護摩堂入	畑 山林			真真福寺の前身と伝え 小園殿立と言われる
51	桜ヶ丘遺跡	遺物包含地	大字原字桜ヶ丘	水田	須恵器・木柱 中世陶器	小園町 教育委員会	昭和35年土地改良の際に発 見し採集した。熊野社の下
52	法光院址	寺院跡	大字原通称坊屋敷	水田	渡来古銭	北原 勲	現在資料館展示
53	2 郷土山遺跡	遺物包含地	大字苔野島 字郷土山235～257	畑	縄文(中・後期)石斧 石簇・石鏃・凹石	小園町教委 柏川一雄	
54	20 大塔塚	塚	大字苔野島字陵	畑 山林	古銭・記念石祠		大塔宮(濃良親王)陵 墓説
55	1 納ヶ島遺跡	遺物包含地	大字苔野島字納ヶ島	畑	縄文(中期) 土器	布施 隆	
56	山野田城跡	城館跡	大字山野田字バクダイ	山林 鉄塔	曲輪等		東北電力送電鉄塔建設 で変容
57	三桶城跡	城館跡	大字三桶字三桶入	山林	空堀(6条) 曲輪等		
58	大貝町	集落跡	大字大貝字大貝町	畑 山林			大貝は十二ノ森から大貝町に 移り、現在地に移転したという
59	荒屋敷	集落跡	大字削沢字大官免 (荒屋敷)	水田	渡来古銭	山崎正治	七日町への山裾通り、数戸の 集落跡近くに庚申塚がある
60	坊屋敷遺跡	遺跡包含地	大字上岩田字上ノ原	畑	縄文時代、石簇		通称坊屋敷 昔土葬場 だったという
61	八海山遺跡	祭祀場跡	大字上岩田字向山	山林	近現代の祭祀址 土俵・石塔等		通称クズレと呼び、石塔類は 諏訪神社境内に移転した
62	次郎が峰塚	塚	大字大貝字大田	山林	4基の塚		柏崎一妻有三国一葉葉への新道 に当り万里集九・道真遺石通過
63	原小屋原遺跡	遺物包含地	大字千谷沢138 通称原小屋原平	畑 宅地	土師器・須恵器・ 縄文石器	湯本昭男	家改装以前から採集され た。(9～10世紀)
64	小丸山墓址	中世墓地	大字小園沢字才ノ神 通称小丸山	畑	宝篋印塔・古銭・ 火葬土塊	小園町 教育委員会	平成10年4月採集調査
65	真福寺板碑	板碑	大字太郎丸真福寺境内	墓地	自然石板碑 (58×24×15cm)		出土不詳「釈迦三尊尊子 施主敬白貞治六〇〇〇月日」
66	土橋古墓	宝篋印塔	大字七日町字土橋集 落墓地	墓地	宝篋印塔基部2基分	原 熊治	カンゼン・インサ家は 原マキの宗家
A	22 中山城跡	城館跡	越路町大字塚野山	山林	空堀・曲輪・堀籠等		小園保の山城とみられて いる
B	23 小坂城跡	城館跡	越路町大字千谷沢 小坂字門前	山林	空堀・連郭式曲輪		小園氏一族小坂源藏頼 通居城
C	(旧) 下新田村	集落跡	越路町大字下新田	水田	鎮守鹿島社所在		原小屋集落に転居し、 祭礼は旧地で挙行
D	(旧) 上新田村	集落跡	越路町大字上新田	水田	鎮守十二社所在		原小屋集落に転居し、 祭礼は旧地で挙行
E	49 善根城跡	城館跡	柏崎市大字善根字 大之田飛岡	山林	空堀・曲輪・堀籠等		馬蹄型城郭、規模社大
F	八石小城跡	城館跡	柏崎市大字石川	山林	空堀・曲輪等		八石城の出城
G	八石城跡	城館跡	柏崎市大字石川	山林	空堀・人曲輪等		本丸に鈴木杜六陸軍大 臣の墓の礎がある
H	程平	集落跡	柏崎市大字北美字程平 (小園側は武石字打越)	山林 原野	住居址・廃屋		旧武石陣に集り、小園と柏崎を結ぶ 重要な、程平は二重地と噂といった

第3章 調査の概要

1. 調査の方法と経過

(1) グリッドの設定

まず現況地勢に従って畦畔を利用して十字状に区分して北西側をA区、北東側をB区、南西側をC区、南東側をD区とした。任意の区分である。東西方向にABC順の記号を中心からA区ではA～F列に、B区は東からA～Gまで4mごとのセクションとした。南北方向は全区共通の1～12列まで北から南へ4m毎のセクションを設定した。A～D区は任意の区分であるが、グリッド設定は磁北に従って抗打ちをした。このことによりグリッドはA区のA1(4×4m)とし、さらに2×2mの小グリッドに区分して右から左の千鳥順の1～4小グリッドを設定した。従って「A-A1-1」(例)のようにグリッド名が与えられる。

調査面はゆるく南に傾斜し、東半面はさらに東南に向けて傾斜地形を示している。また任意にA・B区とC・D区を境界ラインとした畦畔は北面と南面の傾斜の変わり目にあり、一定程度の段差を示している。また後で確認したことであるが、C区には大正3年(1914)6月に使用を廃止した「墳墓地」であったことを法務局から取り寄せた「旧土地台帳謄本」によって明らかとなった。

(2) 調査日誌—方法と経過

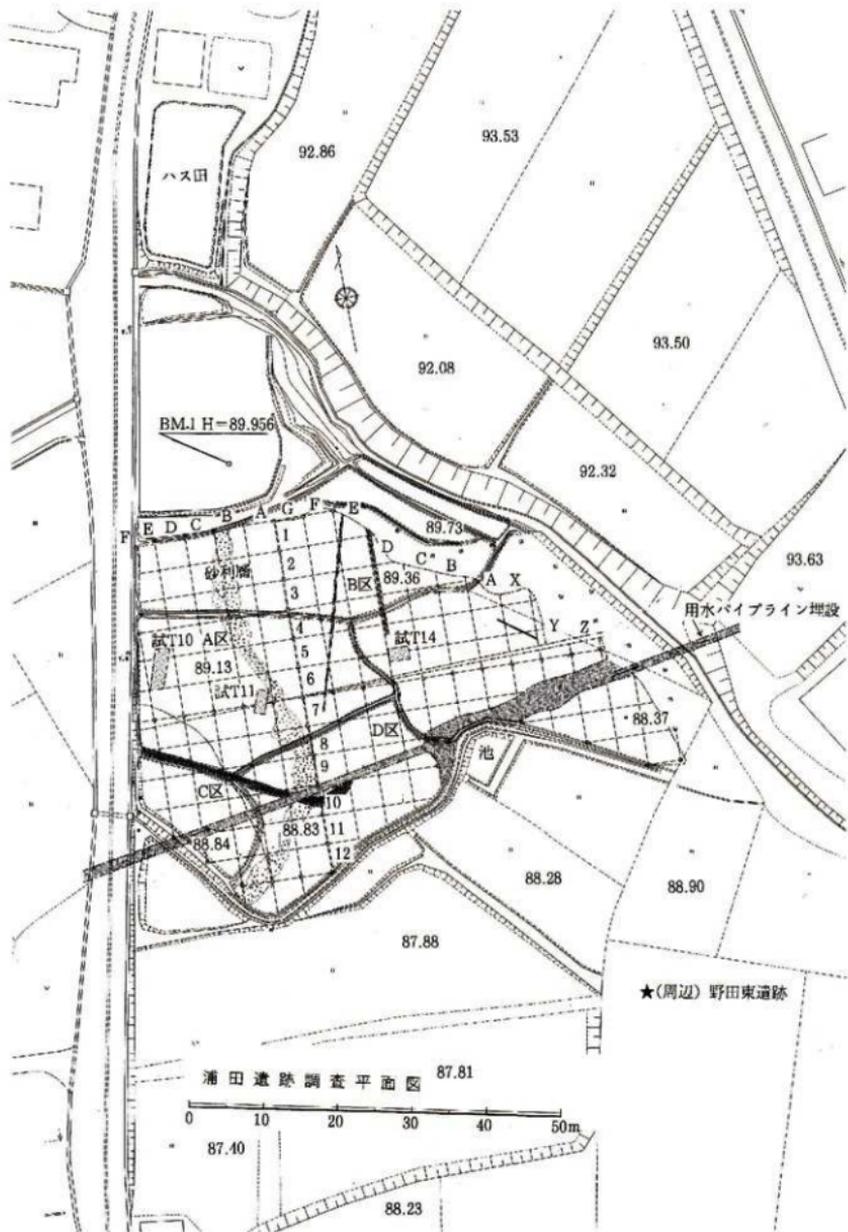
調査区の現況は水田であり、土壌は強粘性土で東側には深い温田を形成していた。したがって耕作土はブルドーザーによる排土作業とする。また中央よりやや南寄りの地下に埋設された水送管が西から東へ向って埋設されているという。確たる位置および深さが分からないために、埋設箇所の試掘検索を行った。重機による圧力とパワーシャベルでの裂傷を避けるために幅2～3mの除地を設けなければならなかった。このことは、表土の排土場所が東西に長い除地によって重機の動きを妨げることになる。したがって送水管の部分に盛土をして影響を避け、クローラーによる運搬の手立てを整えた。

ベルコンは電気モーターによる原動力とし、配電工事を実施した。現況測量図は例言に示したように(株)ナルサワコンサルタント社によって測図、作図を行なった。現況写真撮影を行い、プレハブ事務所兼休憩室2棟の設置、器材器具の搬入は作業開始に先立って町教委によって実施した。

耕作土の重機による排土を進めた後、刃付きジョレンによる排土整理の作業を行い、遺構の検索を進めた。排土運搬はベルコンベアによった。出土遺物はグリッド毎の採集とし、安定的な遺物は図面に記録することによって取り上げた。なお遺物・遺構の所属位置については大グリッド(4×4m)毎に新たな番号を付した。しかし、報告書の図面は通し番号に改めた。なお作業日程については次頁に表化して示した。

2. 整理作業

遺物の整理作業は平成9年度5日間、平成10年度37日間、平成11年度11日間を通じて遺物のクリーニング、注記、実測、拓影等の作業を実施した。これらの作業については山崎正治・高橋 至・保坂利雄・林 久・湯本チヨ子・佐藤真理子・村山恵子の協力を得て進めた。写真撮影、トレースは池田(担当者)が行った。なお小国町における葬送墓制や周辺の遺跡調査については山崎正治の指導を得て巡検・調査12日間、中世墓として確認(新発見遺跡)した小丸山遺跡の調査については地主・耕作者を含め、山崎正治・保坂利雄・佐藤信二・保坂一衛・高橋 至・湯本チヨ子の協力を得た。同時に真福寺境内において自然石板碑(南北朝時代、貞治六年銘)を発見した。



第2図 遺跡周辺の現況とグリッド設定図

3. 発掘調査日誌

年月日	曜日	天候	記事	須恵器 土師器				墓域				写真撮影	ビット掘込み グリッド設定	遺構平面実測 遺構断面実測	遺物クリーニング	摘 要
				A区	B区	C区	D区	A区	B区	C区	D区					
1997 5/28	水	晴	△	△												重機オペレーターと打合せ
5/29	木	曇	△	△			▲									耕作土中より土師・須恵器片検出
6/2	月	曇	▲	●	○	○										教育長のあいさつ、以後作業開始
3	火	晴	▲	●	○	○	△	○	△							A区小グリッド設定
4	水	雨	▲	●	○	○	△	○	▲							B区 "
5	木	雨	▲	●	○	○		○	▲							雨のため精査は午前中で中止
6	金	曇	▲	●	○	○		○	▲							A・B区の遺物取上げ、高橋実氏来訪
9	月	曇	▲	●	○	○		○	▲							A区 柱穴を探す。C区棺桶検出
10	火	雨	▲	●	○	○		○	▲							A区6列に黒土の深まり遺構確認
11	水	曇	▲	●	○	○		○	▲							排土にクローラー車を使用
12	木	晴	▲	●	○	○		○	▲							B5-P156より柱根を検出
13	金	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						D区手作業の排土、B・D区古溝跡
16	月	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						中央ベルト、セクション実測
17	火	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						B区遺物取上げ、C区精査
18	水	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						バックフォア・クローラー業者へ返却
19	木	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						D区遺物取上げ
20	金	雨	▲	●	○	○		○	▲	○						1・2・3号棺桶の検出
23	月	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						棺桶の横臥埋葬、お碗・端・銭貨
24	火	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						30・18号棺桶の重葬関係を検出
25	水	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						D区古溝跡の湿地地区深掘り
26	木	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						埋立地溝帯から各種の遺物検出
27	金	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						奈良元興寺保存処理に関してTELする
30	月	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						一日の台風8号で全域プールのように入水
7/1	火	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						A区柱穴精査
2	水	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						壱輪・竈器～六道銭・桶子・検など多い
4	金	雨	▲	●	○	○		○	▲	○						水溜りの排水に苦労する
7	月	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						棺桶取上げ、杉原先生粘土地成実験良好
9	水	雨	▲	●	○	○		○	▲	○						A～C区土師・須恵器遺構の調査
10	木	雨	▲	●	○	○		○	▲	○						■ 器具筒に付ける鳥型が検出されていた
15	火	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						A～D区精査、内で調査不能のため午後中止
18	金	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						棺桶取上げ、50号墓碗・桶・六道銭検出
19	土	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						20号墓は甕で甕を飾りつけた状況を検出
20	日	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						発掘調査状況について教委と打ち合せ
22	火	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						57号墓切めて四角棺の横臥棺が検出された
23	水	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						配電機撤去、新たな墓坑次々と検出する
24	木	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						土師・須恵器～遺構の発掘
25	金	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						" , 棺桶取上げ
26	土	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						" , 旧水路の確認
28	月	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						" 遺物取上げ・人形6本柱検出
29	火	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						" , C・D区ビット全掘
30	水	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						" , 柏崎日報社来訪
31	木	晴	▲	●	○	○		○	▲	○						遺構実測～実測四面の確認
8/1	金	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						C区平面実測終了、土師・須恵器精査
5	火	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						土師・須恵器精査、61号委葬墓切取り作業～
6	水	曇	▲	●	○	○		○	▲	○						" , 築坑新に6基追加
8	金	雨	▲	●	○	○		○	▲	○						■ 発掘調査を完了 ■ 発掘用具整理、遺物クリーニング

第4章 遺 跡

1. 概 観

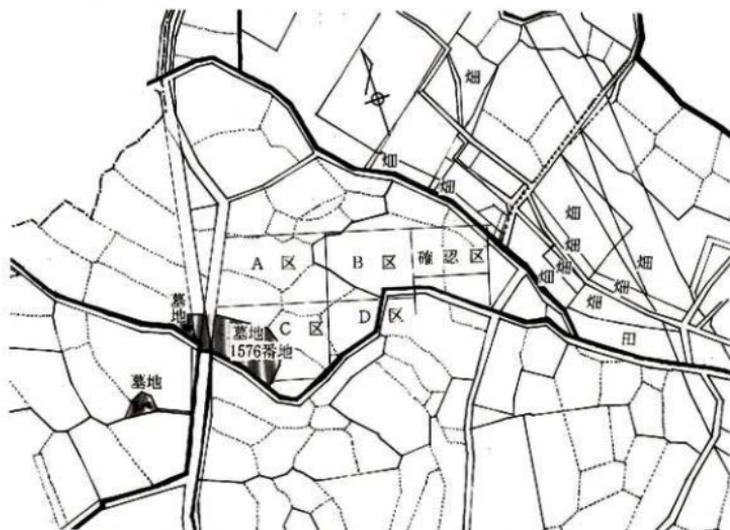
明治・大正・昭和・平成と各時代の土地開発と改田工事をうけて、変更された地勢の原形を知ることは困難である。浦田遺跡の発掘調査に当たって設定したBM89.956m（標高）は北側旧田面（現建設資材置場）である。調査区西側に接する町道を中心に西面へ向ってゆるく傾斜し、浜海川右岸に至る。河床との比高は約9.2mである。また東南側へも微地形の傾斜を示し、発掘後の泥沼状の基底部との比高差は2.5mに達した。調査区の北縁と南縁を区切っている灌漑用水路は、総体的地形に逆って東南方向へ流れる水路である。

北東辺の水路の上は比高約3mの段丘崖を形成して、上面は水田・畑・民家が広がり、さらに上位の段丘面は延命寺ヶ原遺跡（縄文時代後期・晩期主体）が所在する（標高104m）。

浦田遺跡は浜海川や小国沢川が形成した基盤層よりも、小国盆地東縁の関田山系からの地滑り崩落による裾野の長い傾斜地を造成し、その地形を浜海川・小国沢川の乱流が下刻作用をもたらした地形と理解される。

したがって遺跡西側の町道から、発掘調査面のA・C区が、東縁の段丘崖の地形などからみると逆面へ向って傾斜しながらカマボコ状の高まりをみせている。そしてこの高まりのA区が古代平安時代（9世紀）の居住跡であったものとみられるピット群が広がり、土師・須恵器がA区南半面からC区北端面にかけて集中的に検出された。ピット群の中、建物跡としてのプランを確認できる状況は、近世以来の耕作削平によって極めて困難である。C区C・D-6・7グリッドに検出された大型ピットの6本柱建造物とみられる遺構は、特殊な意味をもつ建造物と思われる。

東側のB区は南東方向に傾斜しながら、小沢地形を形成して湛水した痕跡の植物遺体の堆積層が確認された。したがって暗渠排水工事が時代を追って施工され、埋立てによる平準化と乾田化改良がもたらした各種



第3図 更正図（発掘位置では地籍「墓地」があった）（明治17年更正図より作制）

の遺物を搬入する結果を示していた。次にC・D区（南半部、特にC区は藩政時代から明治初期にかけての土葬墓群であり、75基余の桶棺墓や薬莖と思われる埋葬墓の存在が確認された。また単に土葬墓のみでなく、火葬骨や炭化物・燃焼炭化木材などもあり、これの位置関係を分析する問題点を示していた。

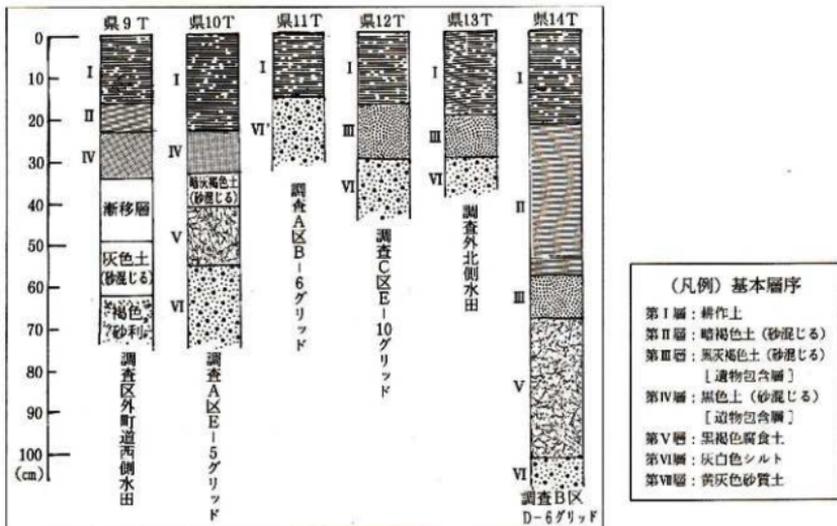
C区の8～10列に土葬墓群によって破壊された水路跡が検出された。溝遺構を破壊しての土葬墓の経営はA区の古代遺跡に所属する溝と判断される。このことから土師・須恵器とビット群のA区とC区北端A～C列と、C区のD～F 7、8列に顕著な約60cmの段差は、傾斜の弛急を別としても古代からの高低差のある地形であったことが理解される。しかし古代の住居跡などが墓域によって破壊され、占拠されたかどうかを確認できる痕跡はなかった。以上の発掘調査面積は1,868㎡である。

2. 層 序

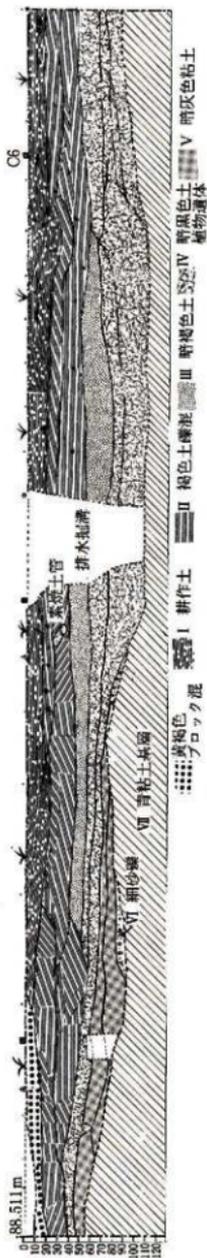
改田工事等によって削平、埋設の行われた浦田遺跡は自然堆積の地層を残している部分はない。特にA区では白色粘土層が耕作土を排除すると現われてくるという状況であった。したがってA区B～Eの5・6グリッドでは埋設土の中に含まれる遺物は折り重なる状況の検出であった。

B区は数次にわたる改田埋立てによって平準化されてきた。最下層部には植物遺体の堆積層があり、長い年代にわたって水腐池であったことを物語っている。基本的な層については、県文化行政課（北村亮・吉田淳一）による試掘調査によって確認された層序（試掘トレンチ第9～14区）を複写して掲載した（第4図基本層序）。次にB・D区を南北に分けた中央ベルトのD区北面を実測調査し、層序のセクション図を掲載した（第5図）。さらにB区からD区への南北列の傾斜断面図・粗朶暗渠縦断面、A区かC区への南北列（B区D列）の縦断面図を掲載する（第6図）。

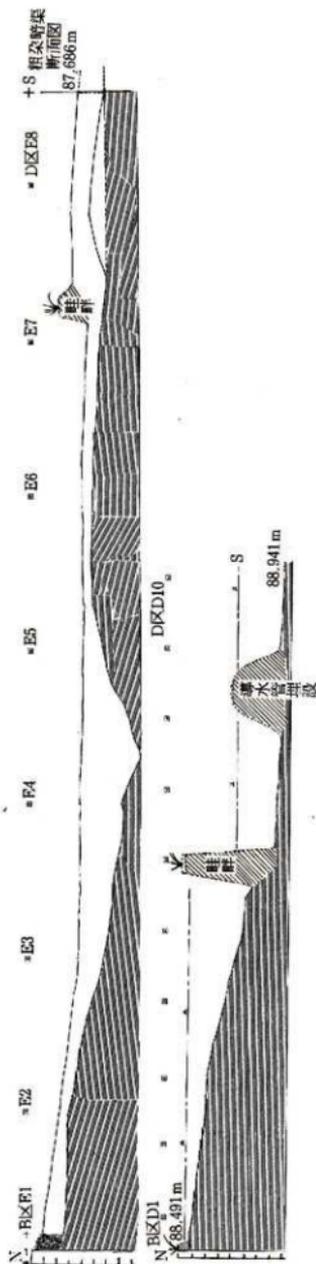
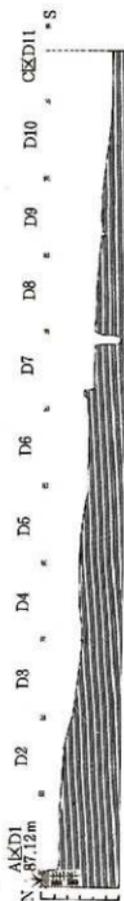
遺物はⅢ・Ⅳ層の暗褐色土層に砂質上から小礫が混在する約20～25cmの中にあり、Ⅰ・Ⅱ層の耕土・埋設土中の遺物は搬送されたものである。またⅤ層以下は青灰～白色粘土層であり、基盤層を形成し、場所によっ



第4図 基本層序（県文化行政課試掘調査報告より作制）



第5図 中央ベルト(東西列) D区北面の断序



第6図 南北列断断面(粗梁暗渠、A区~C区・B区~D区)

で砂礫層が露出する。例えばA区B列からA区A6からはA列(東)へ回り、再びA11から西へ転じてC・D12・13列へカーブしている。黄色色砂礫層が耕土直下に露出するのは、明らかに泥流土の滑り層の特徴を見せているものと判断される。

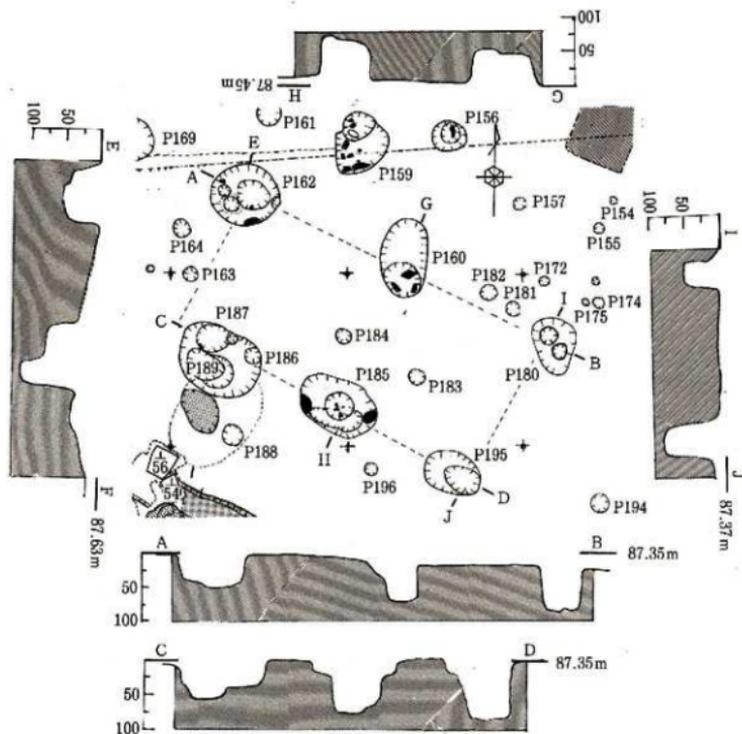
以上のことから基盤の粘土層にみられるピット群と、Ⅲ・Ⅳ層の攪乱を免れた部分(A区・C区の境界近辺の一部)だけに遺構が比較的残されていた。しかし、検出された遺物の大半はA区北側から基盤整備によって埋め込みに混入して運ばれ、加圧されて細片化した遺物の多いことが確認された。

3. 遺 構

(1). 六本柱遺構とピット群 (第7図)

A区及びC区境界附近の約70㎡(C-E-6・7大グリッド内)において、土師器を主体として須臾器を含む遺物が集中的に検出された。さらに大形ピット内から安定した土師器とわずかながら黒色土器の破片10数点が採集された。大形ピットは主軸方向N65Wを示し、長軸8m(北側)と6m50cm(南側)、短軸は東西ともに3m50cm内に前後する規模の6本柱の遺構を示している。

P160. 南北に長楕円形を呈し、南北1.9m、東西1mの内内側半分に0.7~0.8mの円形で、深さは発掘面



第7図 大型6本柱遺構とセクション図

から0.5mを測った。図中3点の黒塗り部分は発掘面直下に存在する石材である。ビット内埋設土は雨と湧水の中での作業となり、粘土層のセクション図はとれなかった。状況としてはすべて黒色土である。

P162. 南北1.5m、東西1.6mの円形で、最深部は発掘面から0.5mの深さである。南縁部に石材があり、ビット内ビットを形成する3基が確認された。セクション図はP160同様であるが、西側の小ビット1基は周囲に白粘土が根固め状に遺構を形成していた。東側のビット内ビットの径は約0.7mに対し、西側の小ビットの径は約20～25cmで、添柱的な存在である。

P186・187・189. 南北1.6m、東西方向に長楕円形を呈し、約2mを測る中に3基のビット内小ビットを構成している複雑な様相を呈している。P186は径35cm、P187は径約70cm、P189の径約55cm位で、P189が最も深く、発掘面からは80cmである。P186・187の深さは共に45cmを測る。隣接する南側に浅く掘り窪めた西寄りに80×60cmの楕円形に焼土遺構が確認されたが、その関連性を明かにできる資料は得られなかった。

P185. 南北1.1m、東西1.8mを測る楕円形を呈し、中央部に径約60cmのビット内ビットを構え、南縁に東西1.2mの掘り込みがみられる。また東西両端部には石材が発掘面直下に検出された。基本的に石材の含まないシルト層である点から、明かに人為的に持ち込まれたものであろう。

P195. 南北の径1m、東西方向約1.4mを測る楕円形は、東側に寄って60×80cmの中心部があり、発掘面から深さ80cmである。このビットの西端部から黒色土器片が検出された。

P180. 南北1.3m、東西0.9mを測る楕円形を呈し、2基のビット内ビットを構成している。東側が径約30cm、西側が約45cmの小ビットで、西側は発掘面から54cm、東側が50cmとやや浅い。

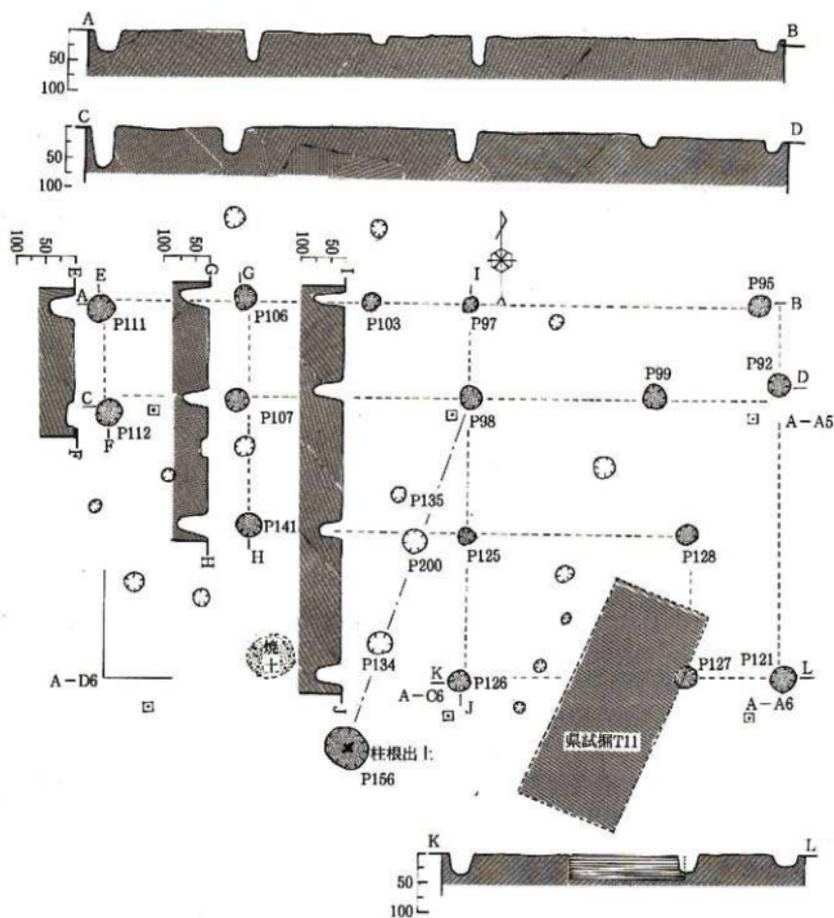
以上掘り込みの大形なビット6基は、楕円形の方向性の共通する南列に対して、北側のP160・P180は南北に長い形状を示してやや等質性に欠けている。これを結ぶ建造物の形状は、P187ないし、P189において直角を構成しない。しかし6基とも大きさ、深さなどの点で周辺全体から際だった存在であることから不整形ではあるが、掘立柱建造物の柱穴であろうと判断した。但し、この溼地粘土層であるにもかかわらず、柱根が残存しなかった。不思議ではあるが、度重なる土地整備工事によって抜き取られた可能性が大きい。

北側のP159は南北1m、東西1.2mを測る大形ビットであるが、深さは30cmと浅く、北端に径約60cm、深さ約50cmのP158はしっかりした柱穴である。これらの範囲からは土師器・須恵器片が多く検出され、石材も2点検出されている。さらに隣接するP156は、70×80cmの円形ビットで、深さ40cmから柱根と思われる木材が検出された（第20図5）。

A-A5・6～A-D5・6グリッド内ビット群（第8図）

A区全面に検出されたビット群はE・F列3～6グリッドでは稀薄である。逆に集中して群を形成するグリッドが3ないし4か所にグルーピングできる。しかし、その中で掘立柱建造物を特定しようとするとビット列が整わず、建物跡を決定することが出来なかった。比較的ビットの深さや整列状況から1棟の掘立柱建物と判断したのが、B・C-5・6グリッドを中心とする16基のビット群をもって構成される南北5m、東西7.4mの規模が想定される。16基のビット群は8図下表のごとく法量を示している。

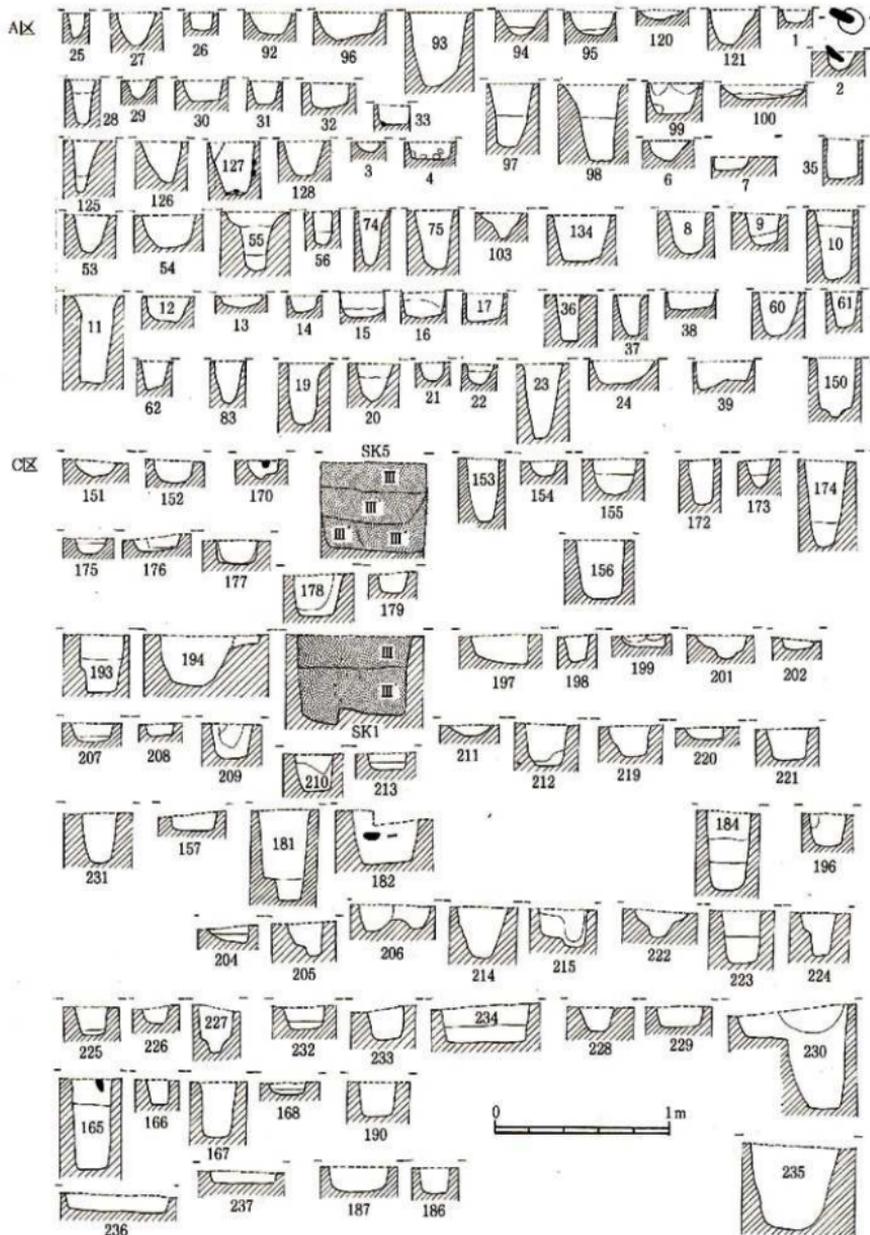
残存している一定の大きさや深さを条件として選択した。想定される本建造物の主軸方位はEW0°である。図の下方中央左寄りにP156がある。注記の通り唯一柱根を検出したビットであるが、これとの柱穴列を探ってもP134・P200・P98の4点を結ぶライン以外に見当たらない。ビットナンバーは237番まで検出した。ビット群の集中区はA区・B区で10か所前後にグルーピングされるが、建物としてのプランを認めることはいずれも困難である。



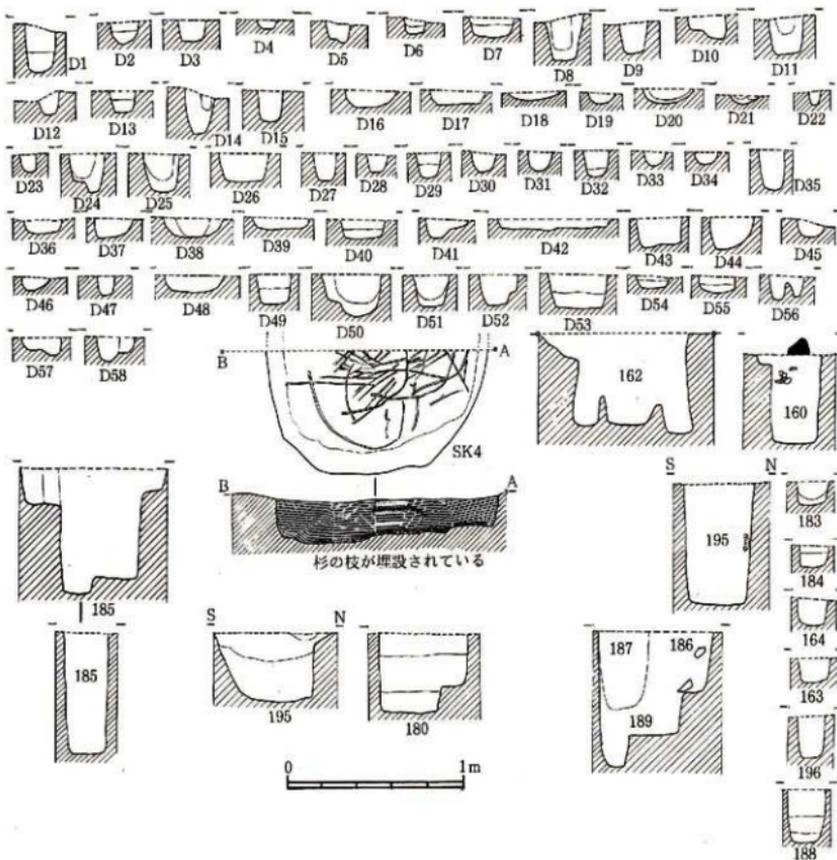
第8図 掘立柱建物跡 (A区B・C-5・6グリッド) とセクション図

ビット番号	南北×東西-深さ	cm	備考	ビット番号	南北×東西-深さ	cm	備考	ビット番号	南北×東西-深さ	cm	備考
P 95	30×30	-20		P 99	30×30	-20		P 141	30×30	-50	
P 97	20×20	-50		P 98	30×30	-50		P 121	35×35	-20	
P 103	25×25	-15		P 107	30×30	-50		P 127	25×推30	-30	
P 106	30×30	-50		P 112	35×35	-16		P 126	25×30	-40	
P 111	35×35	-45		P 128	25×30	-23					
P 92	30×30	-20		P 125	25×20	-40					

(第8図 掘立柱建物跡を構成すると思われるビット群の計測値)



第9図 A・C区各ビット・土坑断面図(1)



第10図 A・C・D (D1~C58)区各ピット・土坑断面図(2)

(2) 溝状遺構 (第11~13図)

SD 1 (A区D 1) はA区発掘面の北東隅のピット集中区で検出された。長さ2.1m、最大値0.7m、深さ調査面から25~35cmを測る。長さの軸はN22°E方向で、ピット群の並び方向と平行しているが、形状や覆上がすべて耕作土であり、基盤層が粘土層で土地改良に伴って削平された跡地であるために判断資料が乏しく、その性格は不明である。

SD 2 (A区D 2) はSD 1の南東寄りに所在する長さ1.4m、幅20cm、深さ5~10cmと浅い溝であり、SD 1と同一方向を示し白色粘土層に遺存した部分だけで他に資料がない。

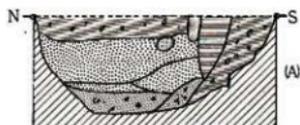
SD 3 (C区G 8→D区G 10) はC区基地区域で確認され、南東方向に流れる溝状遺構である。直線が23m、落差は約90cmである。C区A10で約40°東へ流路を変更する。その長さは6mで落差はなくなる。溝の幅は法面上端部で約1m前後、溝の深さは25cm~45cmと調査面の凹凸によって差が大きい。

溝内の覆土は第11図のセクション図で示したように暗褐色土で大半を充填し、大概乾燥している。溝の側面は大体平らで、法面上開きの箱型を呈し、底面からは荒砂が検出されている。清流であつたであろうことが想定される。出土遺物は一点も検出されなかったが、安定した覆土の状況から判断して六本柱建物やピット群に伴う時代の遺構と思われる。なおD区G10での先は、道水管の埋設工事で失われ、道水管保存のため流末は確認できなかった。

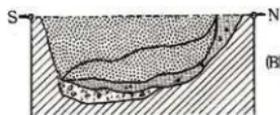
(3) 近世以来土葬墓群 (第3・12・13図、第2表)

発掘が進むまで調査区に墓地があつたことについての予備知識はまったくなかった。第1号棺墓が発掘され、初めて道路拡幅工事や道路の西側で開田の折り人骨・墓坑が確認されたことがあつたとする話題が出た。道路西側の一角をジョウド(浄土)と言つたという。ジョウドは葬儀のトリオキ場(野の葬儀場で引導場)である。早速資料調査をして頂いた所、明治17年(1884)の土地更正図にこの土地が「墓地」であることが確認された。また法務局小千谷出張所「旧土地台帳謄本」の閲覧をした。「浦田1576番、地目・墳墓地・墓地、使用廃止大正3年(1914)6月、地価設定」とあり、反別1畝20歩外畦畔の土地があつた。個人の所有名義になつたのは昭和2年(1927)であつたが、昭和27年一旦所有権が農林省に移転し、改めて28年3月個人所有に転移登記されたことが明らかになった。いわゆる戦後の農地解放である。

最初の土地所有者は25年間の耕作期間があつた。この間開田が行われたと思われる。手掘り、畚搬送の開田工事であつたと思われる。次の所有者は「農地解放」と「交換分合」の整理をうけ、29年頃から土地改良が進み、34年原地区ではブルドーザーが購入されて重機による改良工事を進めたという。所有権はさらに二転して昭和44年の譲渡、三度の譲渡者は昭和46年ブルドーザーによる改良工事を行った。ここでB、D区に大きな変化がもたらされた。暗渠排水には素焼土管を使用したという。したがってB、D区に検出された塩ビパイプや粗朶・孟宗竹等による暗渠排水工事は昭和46年以前の土地改良工事であることが理解される。平成7年6度目の所有権の移転があり、地勢の伝承が消滅したものである。



C区F 8



C区C 10



D区G 10

第11図 SD 3 (古代水路跡) 断面図

A 桶棺墓 (第12・13図、第2表)

土葬墓坑と推定し、発掘によってナンバーを附したものは69番までである。しかし調査の過程で重複する墓坑が複雑化したものについては、枝番号を余儀無くした。この場合にA、B、C及び中・外として標記した。したがって総基数79基となった。これを内容別に分類すると次のようである。また、棺を残していない「再葬空墓坑」19基を除外した60基を基礎数として分類割合を《 》に%を記入する。

桶棺墓の横臥棺埋葬式は一般的民俗事例としては極めて異例として当地方では把握される。長方形棺(59号墓)を加えて40基(66.7%)を第Ⅰ類とする。桶棺の材料は杉板の4分板(12ミリメートル)が使用されたものがほとんどである。棺の深さは1尺(30.3cm)から2尺6寸5分(約80cm)前後の大きさのものが計測可能な内50%余である。これに対して2尺前後以下の小形棺が45%余である。

桶棺(横埋葬式)	39基(49.4%)	《65.0%》	庭棺	17基(21.5%)	《28.3%》
堅棺(堅埋葬式)	3基(3.8%)	《5.0%》	再葬空墓坑	19基(24.1%)	
角棺(横埋葬式)	1基(1.3%)	《1.7%》			

桶子の上半分の一枚に径10cm程の○印を墨書したものが6基確認された。これは死者の正面を意味するものであったと思われる。これをAタイプとし、無印をBタイプとする。第Ⅱ類は59号墓の長方形(唯一)の横臥棺である。長さ2尺8寸7分、幅1尺3寸8分、深さ1尺3寸2分の大形で、側板強化のために柾木が二か所に打ちつけてあり、埋葬に当って縄で縛った痕跡も確認された。箱の角や底板、蓋板には銅板の飾金具も施された上等なお棺であり、富家の埋葬墓と思われる。

第Ⅲ類は26号墓、35号墓、66号墓(堅棺墓)と21号・50号・60-B号墓の6基である。前者は堅型埋葬墓(坐棺)であり、棺の長さも残存状況からみても30~40cmであり、桶子の厚味などからみても樽状のもので急傾桶棺に流用されたものと理解されるものである。これをⅢ類Aタイプとする。次に後者の3基は横臥埋葬式ではあるが、桶子の厚味があり、長さは47~55cm(1尺8寸余)の小形であり、柿染様の塗布がみられるもので、これをⅢ類Bタイプとする。A・Bタイプ共に桶棺に流用された家具であったものと判断される。しかも桶の大きさからみても子供用に流用されたお棺と思われる。

B 庭棺 (第13図、第2表)

庭棺と呼称し、葉庭様の棺と考慮する一群はそのように判断される織機様が観察されたもので、これを第Ⅳ類Aタイプとする。次で52-B号墓は蓑蔭織のように観察された遺物で、Ⅳ類Bタイプに分類する。次に網代編状の埋葬には縁に竹ヒゴが部分的に残存していた40号墓がある。これは明らかに包みの閉合せを竹ヒゴ状の素材を使用している。これをⅣ類Cタイプとする。さらに37・52-A号墓は竹筵状の埋葬墓であった。素材も形状も不明ではあるが、別類のものとしてⅣ類Dタイプとした。

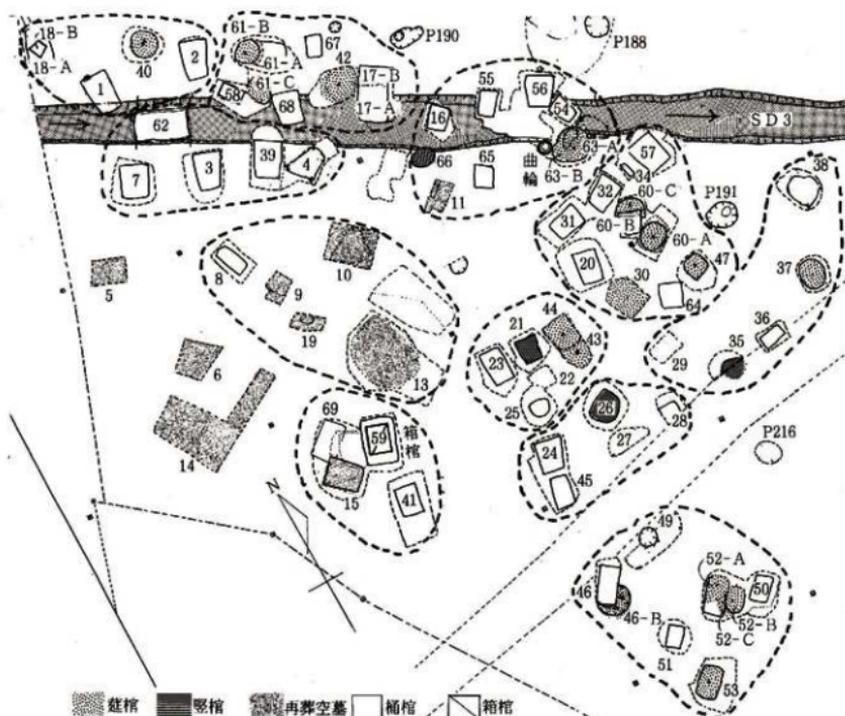
いずれも素材の同定はしなかったが、形状を保存採集するゆとりもなく、部分採集収納とした。庭棺の検出件数は17基(28.3%)であるが、かつての人口構成が富士山型(多産多死型)であった時代、多くの子供達が早逝した。そうした悲しい埋葬墓の可能性が高い。「年端も行かない子供」(6歳以下)は、成人のような葬儀なしに埋葬されることが常であった(『日本の葬式』井之口章次(筑摩堂書240)1981)。

子供の墓は別扱いだとする民俗はごく最近まで、どこでも同様であった。佐渡琴浦では「ワラベ墓」と称し、結婚前の死者は可哀想だから火葬にせず、土葬にして土饅頭の上に石を1つをせた。石垣島(沖縄)のワラベ墓(6才まで)は、死体を正座体にして太陽に向けて合掌させて埋葬したという。これは幼児の霊が再び生れて、子孫繁栄を祈願するものだという。したがって粗末であっても懇ろに扱われていた。第Ⅳ類A

道路



新12号 A・C区遺構分布図



第13図 土葬墓群の分布状況と墓群のグルーピング、編道構図 (SD 3)

タイプの60-A号墓は、庭状埋葬の上に舟形に潰れていたが、山笠の竹骨が遺存していた。これは1基のみであったが、埋葬に当って「日隠し」をしたものか、西方浄土への旅装束として副葬した旅笠であったものかも知れない。しかし1基だけしか検出されなかったのでA類の細分が必要かも知れない。

第IV類の庭棺は、墓域全域に分布しているが、第13図の塗り分けで明らかなように、墓域の北～東側を外周するように点在することが理解される。また同一か所で重層して存在する63のA・B、43と44号、52のA・B・C号墓の場合は、他人の埋葬墓との重葬ではなく、同一家系の墓坑であることはいうまでもない。さらに上層、下層すなわち埋葬の新旧関係では、総じて桶棺墓の下層から検出されている点を特筆しなければならない。

C 火葬骨のある遺構 (第13図、第2表)

整地排上面から明瞭に観察された炭化物の混入した黒色土坑の痕跡は、埋設土が柔軟で不完全燃焼の木材片や布片を伴出する土坑もあった。なお焼骨の細片が集中する箇所でも土坑を形成しないものも数か所あった。これは基本的に数表からは除外した。第12図でSK 4号 (径1.25m、深さ最深部28cm位) の中には杉の枝が相当量詰っていた。SK 4は使用しなかった再葬のための火葬用の土坑ではなかったかと思われる。

ここで取り上げる火葬骨のある墓坑は、第V類とするが火葬埋葬墓ではない。火葬骨が少し採集できる程

土葬墓一覽表 (副葬品等、特徴) (No.3)

棟号	方位	長さ×幅	上山	下山	正面 φ×長さ	背面 φ×長さ	高さ	構造 長さ×幅×高さ	墓者	特徴	棟	残数	副葬品	等 用 品
(41)-A	NW50°	72×0.8	182.7+	33.8+	43×1.3	57.5×0.7	75.2×2.6×1.1	瓦葺2.6×0.7	底張り、上蓋 $\frac{1}{2}$ 、袖片9枚(新)	棟上・下2ヶ	残6枚	(新油紙のみ「六」字有り)、 漆		
(41)-B	NE40°	50×					縦方50×50	草席、61-Aの10cm下版、(厚板切取り)	棟			漆のみ点検(上面)		
(41)-C	?	60×					縦方60×60	草席 (切取り板付)	棟	棟1枚、杯蓋	残1枚			
(42)-A	NE24°	75.5×0.9	176.5+	99.1+	42.5×3.0	53×0.75	51×3.5×2.0	C形	底張り瓦形、上蓋 $\frac{1}{2}$ 内面に古銭跡有り、袖切り7ヶ所(新上)	棟	残6枚			
(42)-B	?	35×38×3.0					縦方70×80	草席	SD3 (外観調査で切取りしてしまった)					
(44)	NE22°	73×0.75	20.6+	58+	43.8×1.8	50×1.0	50×4.5×1.5		底張り・上蓋 $\frac{1}{2}$ 、袖片2枚	新巻紐(瓦形)	残6枚	袖状白色瓦物・漆葺3点		
(45)	NE40°	53.2×0.7	47+	37+	32.1×1.5		縦方80	底張り $\frac{1}{2}$ 袖片6点		草(漆葺木匠の下)	残6枚	十原漆片		
(46)	NE40×45	53.0×0.9	112.1	32.4×1.2	39.6×0.4	53.0×2.4×1.5	横方90	C形	型枕、底張り中央に文字か? 上蓋・袖片少	棟(新巻紐)	残6枚	袖状、袖状白色瓦物		
(47)	NE10°	42.2×0.7	53.2+	41.3+	24.6×1.1	27.6×0.6	縦方60		底張り・上蓋 $\frac{1}{2}$ 、草床、小型符	棟(新、漆調粉)				
(48)	NE26°	70×	82+	69+			横方100		大型枕、黒床・蓋	棟(新)				
(49)	NE30°	77.4×0.9	172.8	140.2	41×2.4	52.5×0.6	51.7×0.9×1.4 60.5×0.7×1.4	C形	空形(黒大蓋版)、印号集の西面下蓋、2ヶ4ヶ所	棟(新)	残5枚	杯蓋、袖状白色瓦物		

度のもので桶材や墓材なども検出されていない。副葬品を伴出した土坑は12号の1基だけである。第V類に数えたのは19基で、全数の24.1%を占める。第V類の性格と散乱する火葬骨の存在である。

これは明治新政府によって火葬令が出されるが、明治6年(1873)には早くも火葬禁止令が発せられた。しかしこの2年後の8年には再び火葬を許可している。問題は明治6年に県令楠本正隆通達による「埋葬地設定について申出なき者あり」と督促している。次いで明治9年県令永山盛輝は6月17日付をもって火葬場を人家から遠隔地に設置すべき旨を通達した。明治15年には「火葬場取締規則」、明治17年「墓地及埋葬取締規則」(太政官布達)が制定された。なお明治32年には火葬・埋葬・改葬に関する市町村長の許可が必要とされた。

明治20～30年代、広く墓地の改葬(人家から遠隔地へ)が行われたのは村々に残る文書によって明らかである。にもかかわらず、マキ親類毎の墓地や個人毎の屎敷地や田畑などに改葬されずに今日もなお経営されている事実もあり、改葬令を守らなかった根強い粗霊とのつながりを知ることができる。

太郎丸・野田在住の人々の記憶になくなった墓地ではあるが、39号墓(Ⅰ類Bタイプ)から検出された明治16年発行の半銭(兌換銭)は38,202,062枚の内の1枚であり、この埋葬墓は明治16年(1883)以降に土葬されたものであることは確実である。太郎丸村の長老中沢政栄氏(大正3年生)の証言によれば、祖父の語った話として明治14年、幼児の死亡に際して樽棺による土葬が行われた。なお墓寄せを行ったのは明治36年頃であったという。墓所はマキごとにまとまり、広々としていたという。

また大正5年野田生れの中橋権次氏の証言では、発掘された墓域を「埋葬場」といった。そして埋葬場の北側を区切るように用水路があった。桶棺の土葬墓は明治に入ってすぐ止めたという。さらに隣村小国沢村小松家文書「香資其外受納諸費附込帳」の大正3年「祥雲孩子」2歳の葬儀は土葬であったことを東京町田市在住の小松正淑氏から資料とご指導を頂いた。2歳の幼児故の土葬であったと思われるが、周辺諸村の事例では山横沢村(現八王子)など、昭和30年の町村合併まで土葬が多かったと中村哲四郎氏が証言している。

発掘墓域の東側段丘上端部に移設された現在の野田区の墓地から、紀年銘のある墓石を調査すると9基(54基中約17%)ほどである。最新年号は明治7年(1874)、最古墓塔は享保18年(1733)である。およそ140年間である。なお「萬霊塔」文政3年(1820)、「先祖代々塔」文政5年、「先祖代々」文久元年(1861)の3基は墓塔ではなく、まさに人のみに止らず萬霊に対する供養塔であるが、概して家系代々の集合家族墓(寄せ墓)であることが「先祖代々塔」で理解される。なお今回発掘調査によって集骨された火葬骨は一括して野田区墓地内に「無縁塔」を建立して埋葬し、法要を執行して頂いた。

D 土坑(第9・10・12図)

SK1(C区B9グリッド)は、大形六本柱建物遺構の南側4m、SD3(古代水路跡)の北縁辺に存在する。N36°W軸を長さ77cm、幅65cm、深さ59cmを測る方形の土坑である。上層はややしまりのある暗褐色土、下層はやや柔らかい暗褐色土が充填されていた。基層は砂質の白粘土層である。遺物は一点もなかった。墓域外、方形土坑の性格は不詳である。

SK2(C区A B列10グリッド)は大概東西方向に長軸を示す方形で、東西1.2m、南北95cm前後、深さ45cmを測る。東側にやや法面をもつ、西側の南隅を切ってSK3がある。SK3に先行するSK2はSD3(水路跡)南縁に平行して所在する。埋設土はSK1と同様の暗褐色土層で、遺物もなくその特徴は示していない。

SK3(C区B10グリッド)SK2の南西隅側を切り合いにして、楕円形を示している。方向はSK1と平行方位であり、長さ1m、幅約80cmを測るものと思われる。北隅の切り合部面にやや法面を持ちながらS

K 2よりも約33cmも深く、調査面からの深さは72cmを測る。SK 1との間隔は約5mである。セクション図は測定していない。

SK 4 (C区C・D11グリッド)は前項ですでに述べたところであるが、墓地の南東側に所在する円形プランで、径1.25m、深さ28cm位である。中には杉の小枝が相当量敷かれていた。覆土は褐色砂礫質の混入した乾燥土が充填していた。SK 4は他の土坑よりも比較的浅く、杉枝が埋設され、それ以外の遺物もない。再葬のために準備された火葬穴ではなかったか、と推量される。

SK 5 (C区A 9グリッド)は不整形プランで径90cm、深さは59cmを測る。覆土は暗褐色土であるが、上層は酸化鉄の赤サビ化している。次層は粘性が強い。下層は白粘土が混入している。遺物は1点も検出されなかった。

SK 6 (C区A・B 8グリッド)はP171号を土坑に読み替える。SK 1・3号と同一方向に長軸を示している。プランは隅丸方形的な楕円形で、長さ80cm、幅65cm、深さ58cmを測る。一挙全掘のため断面図はない。

以上6基の土坑について概略の観察を進めたが、SK 4を除く5基の中SK 1、2は歴然とした方形プランを示し、SK 3、5、6号はその長軸方向をSK 1と同一方向性をもち、大概方形を思わせる楕円形である点、規模においても同類性を示している。出土遺物を一切伴わないなど同質性が向われる点で、この土坑の性格が極めてむつかしい存在であるが、時期区分としては平安時代の古い時期の遺構と判断する。

(4) その他の遺構

開田遺構 (第5・6・14図)

開田、土地改良工事は全調査区内にわたるが、A区は削平され、C区は墓地として掘削されて発掘前の現況以外の開田遺構はみられなかった。D区は低湿地(深田)であり、導水管理設のため発掘不能であった部分的な発掘調査で、耕作面より0.7~1m前後の下層でようやく砂利層が確認できる状況である。

B区において土地開発の歴史が検出された。深い所は1m下層の泥炭層で検出された暗渠排水の施設である。墓地が地目解除になった大正3年以降、個人所有になって閉鎖されたC区と異なり、湧水と泥炭地であったB区では古い開田区であった。①. 確認調査区(B区の東端部)×6グリッド、下層暗黒色土層で孟宗竹の節を抜いたパイプで暗渠排水工事を施した跡が確認された。②. E1→8グリッドまで確認された粗朶暗渠排水工事は北から南へ向って傾斜し、粗朶束を埋設したもので、もっとも昔からの一般の施工法である。

これに対し③. A5グリッドおよびE7グリッドのセクションベルト(第5図)II層に検出された、素焼土管による暗渠排水工事跡がある。素焼土管がこうした工事に埋設されるようになったのは昭和46年、土地購入者がブルドーザーによる土改時に埋設したとの証言がある。なお高度経済成長期、石油化学の発展を代表する、ポリ塩化樹脂パイプ製品の④. D1~D4・グリッドに検出された暗渠排水施設がある。これは素焼土管埋設の直前期に使用されたものと思われる。

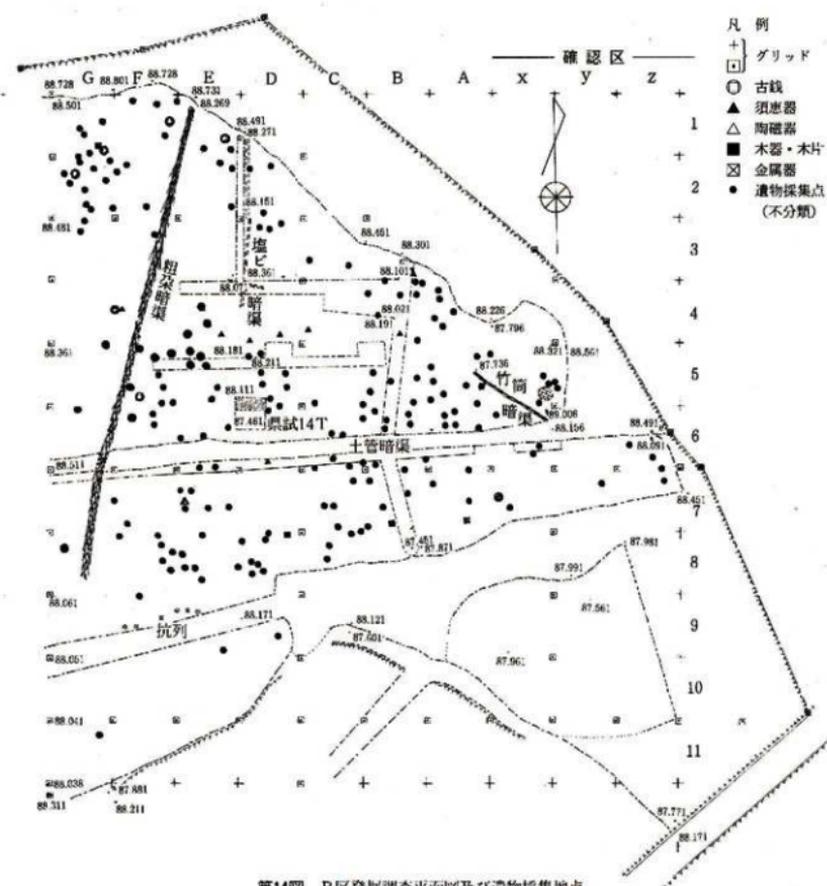
以上の4件の改田施設中の粗朶・孟宗竹使用の暗渠排水工事は、大正時代後期ないし昭和初期の施工と思われる。①~④の四種類の暗渠排水の技能は、時代性を象徴するものとして水田稲作農業史を民俗学的に位置付けする重要な資料である。陸作農業に対し、水田稲作が土木技術・水利問題を考慮する時、低湿地がその原点であった。農業土木の向上は水抜き乾田化工事であり、新田開発による耕地の拡大が必要とした灌漑工事への努力であった。

4. 遺跡概括

浦田遺跡の遺物は縄文時代に始まるが、遺跡としての遺構を検出確認することはできなかった。したがって①、平安時代後期の柱穴群、大形掘立柱建造物跡、性格不明の大形土坑及び遺構南縁部を巡る溝張り遺構の存在が確認された。

②、大正3年まで、地目「墓地」遺構が検出され、現在居住者に伝承も絶え、土葬の内容が忘却されてしまった桶棺墓や、さらに葎・蕁麻様の包装墓の検出によって我国墓葬史上、極めて貴重な資料を提供するものである。

③、低湿地における稲作農民の民俗知識として、水抜きによる乾田化改良という農業土木技術を知る「暗渠排水」の施工法・材料の変遷（四種類）を見ることができた。以上三つの遺構、遺跡の時代の連鎖はまったくない。近現代村落史への断片として縄文時代まで溯るものであった。



第14図 B区発掘調査平面図及び遺物採集地点

1 平安時代の遺物

(1) 土師器 (第15~17図・第3~6表)

遺構は発掘状況で述べてきたように開田、土地改良工事等で削平、擾乱された該遺跡では、遺物は細片化され、調査区の広範にわたって散在していた。遺構に伴って検出された遺物は、C区のB~Dの7、8列に当る六本柱入形雁立柱遺構に集中して採集された。遺物のほとんどが土師器であり、須恵器及び木製品等は遺構に共存するものは少く遺構外に大半は散乱していた。

検出した土師器の細片はわずか650点ほどで、図化したものは15~17図の100点である。その内甕形土器など大形土器と判断されるものは30%程度である。残りは大小の区別も出来ない環類の破片と思われる。第15図で口径と底径の両者を測定(推定も含む)できた15点の関係グラフを制作した(第3表A)。口径9.3cm~14.5cmに分布し、中心は12~14cmに集中する。底径は4.5~6.5cm内にあり、大半は5cm前後に集中している。なお表3で集計した51点中口径16点、器高13点、底径49点(推定も含む)分布状況を第3表Bで示した。各部位共に特色を示すものはないが、底部の直径では5~6cmの間に33点(67%)を占め、器形からみてかなり底径が一般的に小さい点が特徴であることが理解できる。

器形では①碗型に内湾する体部(第15図1・10)、口唇部の挽上げの外反する10に対し、②直線的に外開き(60度)、立上り角度のはっきりした(第15図4・7)タイプ、③立上り角度(50度)の緩く大きく開き、やや器体の湾曲する(第15図3、5、8、9、10、13~15)タイプである。この内9・15はわずかながら柱状高台型のタイプがある。④胴部中位から角度を60度に挽上げる(第15図2)タイプが1点ある。

③タイプで浅型の16、大概③タイプと思われる5、6、11、17は口縁部を失っているために不明であるが立上がり角は明瞭である。12は小形で浅く、柱状高台のタイプである。18は皿型で低位の柱状高台タイプである。内側は渦巻などで仕上げの窪みを残し、回転糸切技法後の調整はみられない。

第16図中で低位ではあるが、柱状高台のタイプを示しているものは20・39~43・46~48の9点があげられる。また立上がりの不分明な緩いものに36が上げられる。

第16図51は口径25.4cm(内法24cm)、残高5cmを測る。胎土は淡紅色を呈し、焼成は良好である。頸部はく字状に外反し、胴部との間に約2cmの平行部を有して胴部への膨みを示している。

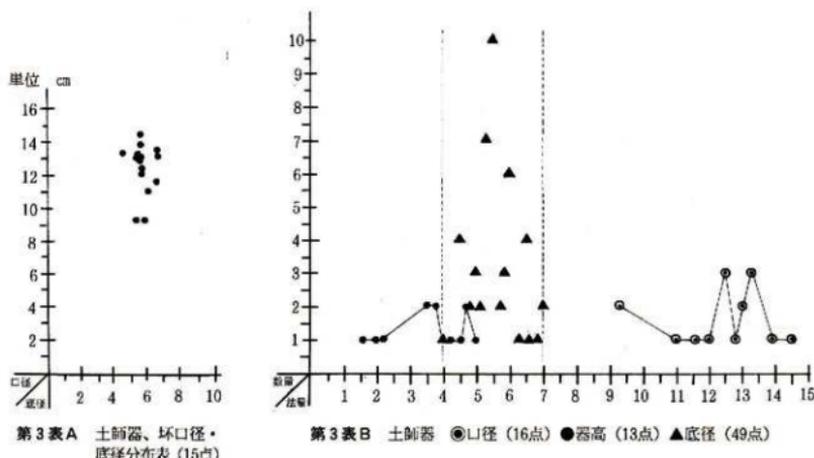
第16図52は外径34.7cm(内法32.8cm)、残高15.5cm、器厚最大1.3cmを測る。二次焼成によって鮮やかな淡紅色を呈する。胎土は精良で焼成は良好である。ロクロなどで調整、胴部は内湾して口縁は外反しながら丸く納めている。胴部や下半部位に縦位の平行叩締め、横位にへう切りの沈線がみられる。平行叩痕の上部には部分的に削った調整痕も同われ、平滑面がある。平行叩締め部位の内壁にも条痕風の押圧当具痕が何われる。上部はロクロ調整による刷毛目状の仕上げがみられる。

第16図91は底径5cm、残高1cmを測る底部のみの検出である。胎土は灰白色、精土で焼成は良好である。回転糸切技法による無調整であるが、中央部に長さ0.82、幅0.5cm、深さ0.25cmを測る初雁の圧痕が確認される(C区D7-改出工事で盛土された部分であり、六本柱建物遺構の位置である)。初雁は比較的短表系ながらかなり膨みのある初雁である。小国町最古の稲作の痕跡である。

図版化した土師器底部49点中、ロクロ台切離し技法で回転糸切法によるものは46点(94%)、静止糸切法によるものは1点、技法不明のもの2点である。圧倒的な回転糸切法の独占する特徴は、須恵器生産の衰退

と共にその技術が土師器生産に生かされるようになる9世紀中葉以降、後半の所産と思われる。

第17図はすべて細片のため器形は不明である。器体の厚味は1.4cmから0.5cmを測り、部位による差もある



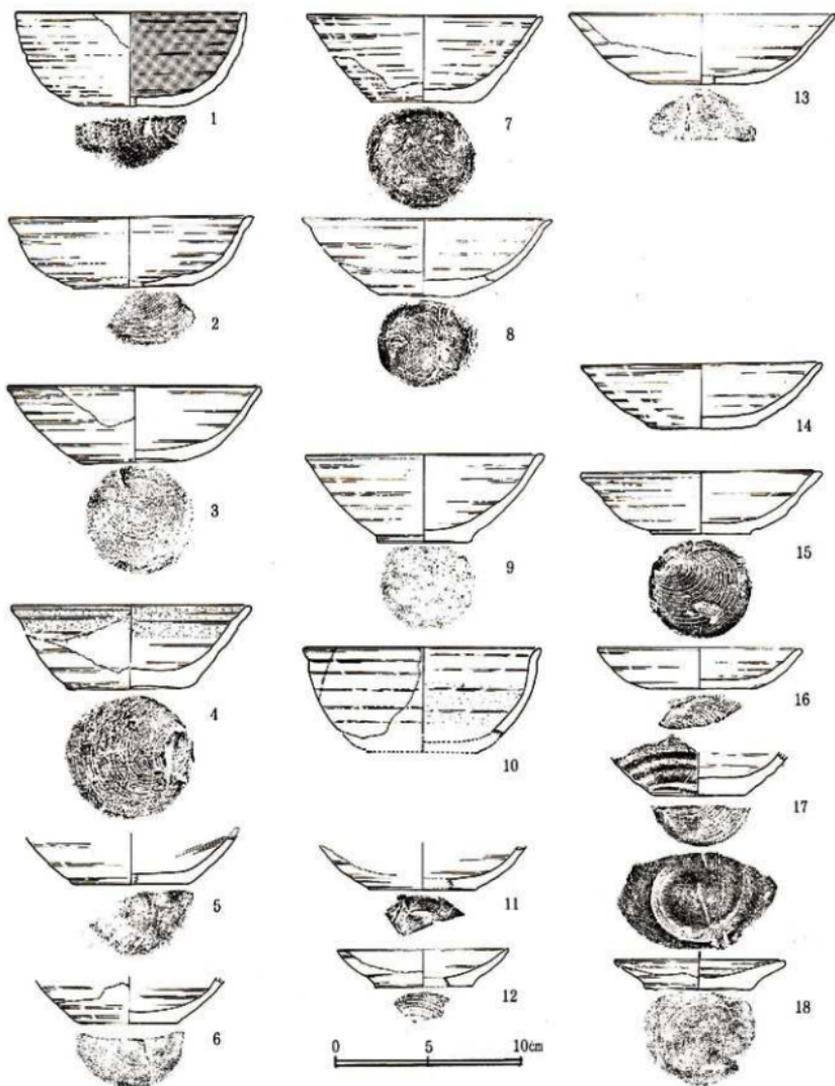
が、大概鍋、甕などの破片と思われる。胎土は灰黄色を呈し、焼成の良好なものと、紅褐色化した二次焼成による赤色化した破片があり、煮炊具として使用された痕跡の明瞭なもの、体部外面に煤が付着しているもの(52の鍋下半部など)があり、煮炊器が目立っている。

①体部外面は平行叩きと内部の同心円文、②平行叩きとロクロ撫でに刷毛目、③平行叩きとロクロ撫で、④平行叩きと指頭痕の組み合わせがある。外面の叩き調整にも太い条痕、細い条痕の深いもの、浅いもの、格子目(74)、ロクロ撫で波状調整後、ランダムな叩き条痕(73)の伺われるものもある。体部内面の同心円文当具を使ったものは57・63・65・66・82・86・88・89である。指頭痕調整されたものは56・59・61・62・64・71・77・78・79・81・87である。なお図版右下のA～Eは器体内面の調整痕の5種である(表5の観察表)。

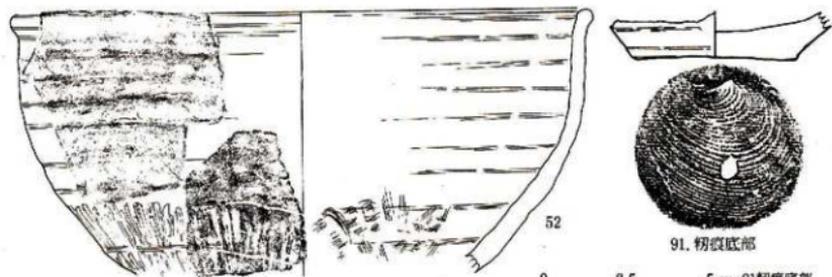
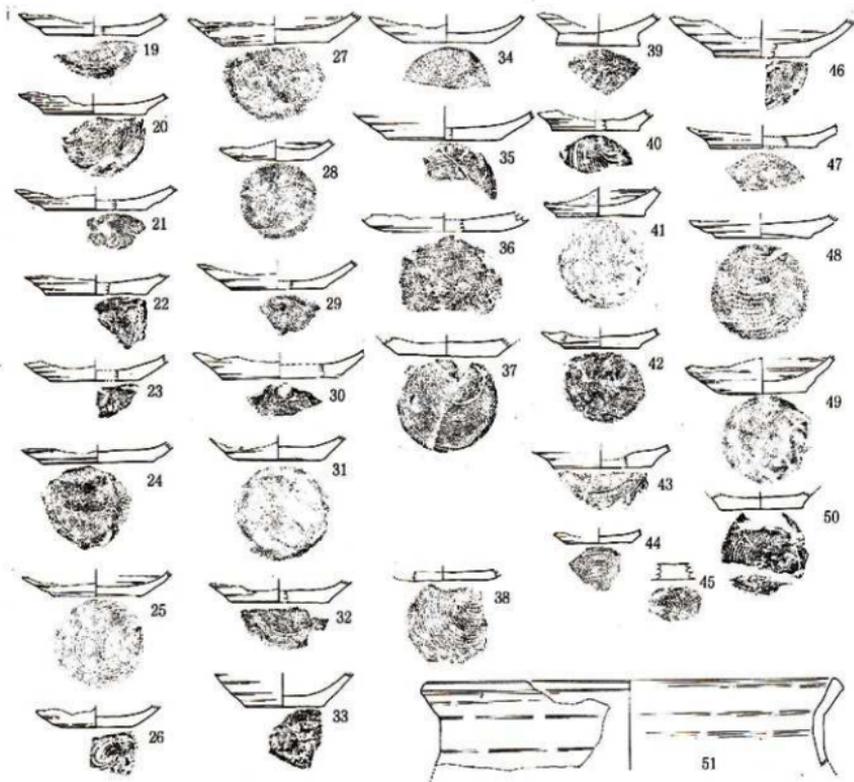
土師器杯の内、内面黒色土器片は表6で集計した43点(第15図1の塊を含む)の大小破片が検出されている。胎土は大概灰白色を呈する精土で焼成は良好のものが多く、遺存した部位は口縁部が多く、底部を残すものが少ないため、ロクロ切離し技法の分かるものは1点(回転糸切法)のみである。他は水挽きによる調整によって、底部糸切痕が磨消されたものとみられる。しかも二次焼成による変色や底部の磨耗が進み、その使用頻度の程度が高いことを示している。また内面の筐磨き調整をするものは1点のみみられない。しかも黒色部は口縁部外側1～1.5cm幅も黒色化されたものが目立っている。底部立上がり角度も緩いものと認められる。

(2) 須恵器(第18・19図、第7表)

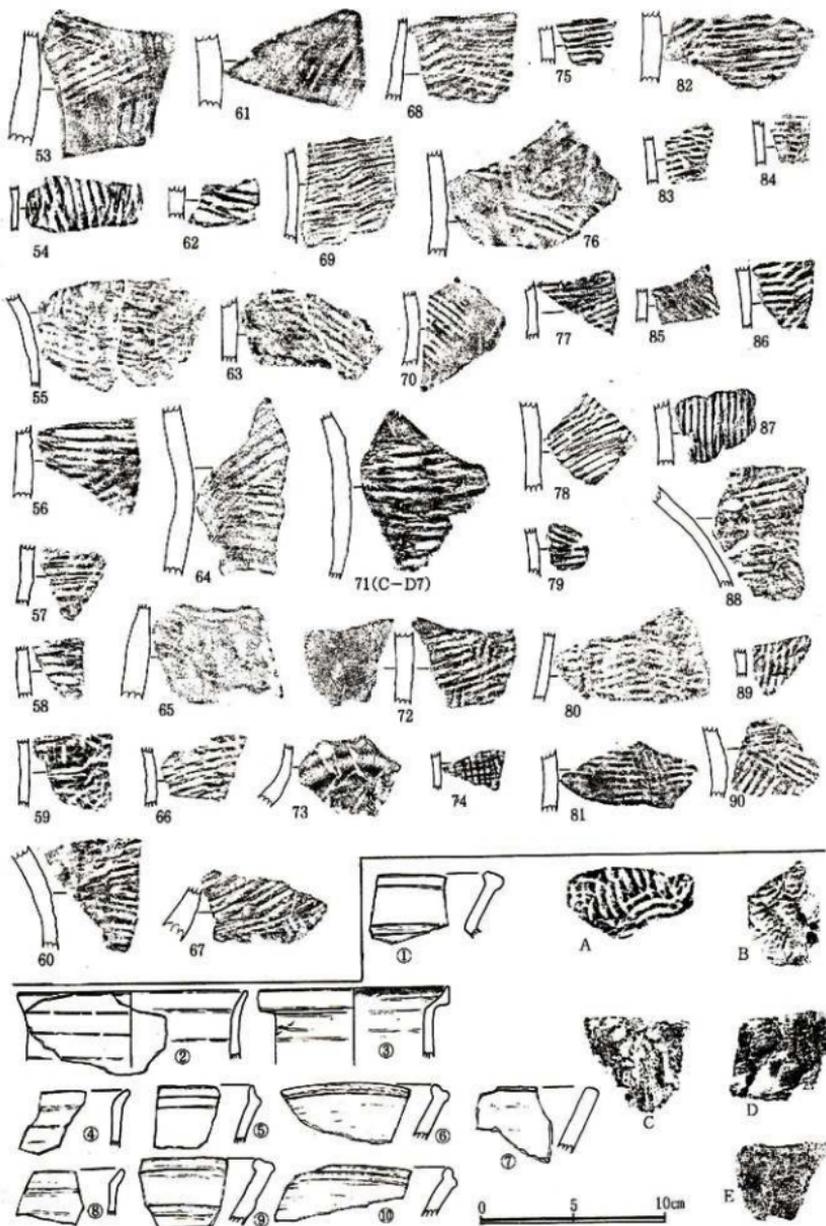
須恵器の破片の検出は80点余に過ぎない。図化したものは67点、完形で図面化できるものは1点もなく正確な資料はない。壘形土器の口縁部5点、壘形土器片4点、環形土器6点、環蓋形土器6点、碗形土器1点の他はすべて小破片ばかりである。



第15圖 土師器 (1)



第16圖 土師器 (2)



第17圖 土師器 (3)

第4表 土師器観察表

No	出土地点 E1-F17	法 量			器形	胎土特色	技法その他特色	備 考
		口径cm	器高cm	底径cm				
1	P180 (C区D8)	12.5	8.0	6.7	瓶	淡紅色精土	口クロ回転波状整形、口縁外寄・底部焼黒色化底筋糸切痕磨き仕上げ	内周、外壁二次焼荒麗
2	P162	13.3	3.8	6.8	坏	灰黄色精土	口クロ回転波状整形、回転糸切底、口縁部外反	
3	C区D7	13.9	4.2	5.5	坏	灰黄色精土	縦行6点漆液合煎摩裏れ、回転糸切底、内外壁荒れ	内壁暗褐色汚れ、地(灯り具小)
4	P162	13.5	4.5	6.5	坏	灰黄色、石葉粒含	口クロ回転波状整形、回転糸切底、糸縁部外反、煎摩裏れ	底部厚み1cm、口縁部漆色
5	P186	11.6	残2.5	6.5	坏	灰黄色砂質	口クロ強で、内壁割面で瓶、回転糸切底、磨練荒れ	
6	C区D8	残12	残2.5	5.5	坏	淡紅色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、磨練は強い	
7	P162	12.8	4.7	5.5	坏	淡紅色精土	口クロ強で波状整形、回転糸切底、口縁部外反	
8	P166	13.3	4.0	4.5	坏	灰白色精土	口クロ強で口縁部1cm位で外反屈曲、回転糸切底	底部立上がり角はゆるく、外壁内湾
9	C区D7	13.0	4.7	6.5	坏	淡紅色石葉粒含	口クロ強で、体内内湾、立上がり高台造り、回転糸切底	二次焼
10	C区D7	残12.5	残1.5	?	瓶	灰白色精土	口クロ強で、体内内湾、口縁部外反屈曲、二次焼褐色	内壁茶褐色行着物、部分的に赤色原料
11	C区D7	?	残2.3	5.8	坏	灰白色精土	口クロ強で足磨き、回転糸切底	
12	C区D7	9.3	2.0	5.3	坏	灰白色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	
13	P162	14.5	3.8	6.5	坏	灰黄色精土	口クロ強で回転波状・整形・体内内湾し、斜角から直線状	回転糸切底、内壁褐色異物付着、内周中央灰色化している。
14	C区D7	13.0	3.6	6.5	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整	
15	P162	13.2	3.4	3.3	坏	灰黄色精土	口クロ強で、内壁磨き漆液調整、回転糸切底	
16	C区D7	11.0	2.2	6.0	坏	灰黄色精土	口クロ強で、底架立上がり部位に捲取線1か所	回転糸切底
17	P185	?	残2.2	4.8	坏	淡紅色精土	口クロ強で波状整形、回転糸切底	
18	B区E6	9.3	1.6	5.8	皿	暗褐色精土	口クロ強で内壁高巻、付高台輪上リング部、回転糸切底	外壁茶褐色から灰黒色火焼
19	P162	?	残1.3	5.5	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/3
20	C区D7	?	残1.3	6.0	坏	灰黄色精土	口クロ強で波状調整・回転糸切底	残2/3
21	P160	?	残1.3	6.0	坏	灰黄色精土	口クロ強で波状調整、回転糸切底	残1/4
22	P162	?	残1.1	6.0	坏	灰白色精土	口クロ強で波状調整、回転糸切底	残1/4 内壁灰黒色化
23	A区D5	?	残1.5	5.3	坏	灰白色精土	口クロ強で波状調整、回転糸切底	残1/3
24	C区D7	?	残1.0	6.6	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残底部
25	C区D7	?	残1.5	5.3	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残底部
26	C区F8	?	残1.2	4.8	坏	灰黄色染め強い	口クロ強で調整、回転糸切底、内壁漆色文	残1/6、上壁黒染61号
27	A区E6	?	残1.6	6.3	坏	黄褐色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、染め強い	残底部
28	P162	?	残1.2	4.6	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、染め強い	残底部
29	C区D7	?	残1.6	5.5	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/3
30	C区D7	?	残1.3	残7.0	坏	灰黄色精土	口クロ強で足磨き、回転糸切底、立上がり部高台補修	残1/4
31	B区F5	?	残1.3	5.6	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底底厚強で内子	残底部
32	P162	?	残1.3	5.8	坏	黄褐色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/3
33	C区E9	?	残2.0	4.9	坏	灰白色精土	口クロ強で調整、底部磨耗	残1/4 器体一部淡紅色
34	P180	?	残1.6	6.2	坏	灰黄色砂粒含	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/2
35	P185	?	残1.6	6.8	坏	淡紅色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/4
36	B区B6	?	残0.8	7.9	坏	黄褐色砂粒含	口クロ強で磨き調整、回転糸切底立上がり角ゆるい	残1/2
37	C区D7	?	残0.6	6.0	坏	灰白色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残底部
38	C区E7	?	残0.5	5.6	坏	灰黄色精土	?	回転糸切底
39	C区D6	?	残1.9	6.1	坏	淡紅色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、高台部0.7cm	残1/3
40	C区D7	?	残1.2	5.3	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、高台	残1/3
41	C区D6	?	残1.7	5.4	坏	淡紅色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、高台	残底部(須磨製)
42	P84	?	残1.1	4.6	坏	淡紅色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残底部 内壁暗灰色
43	C区E7	?	残1.2	残6.0	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/3
44	P160	?	残0.7	5.0	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残1/3
45	C区D8	?	?	?	?	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	底部厚み3cm
46	P162	?	残2.3	5.7	坏	黄褐色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、高台	残底部1/4
47	C区E7	?	残1.3	6.5	坏	灰黄色精土	口クロ強で調整、回転糸切底、高台	残1/3
48	P162	?	残1.4	5.5	坏	灰黄色砂粒多含	口クロ強で波状調整、静止糸切底、高台	残底部
49	P166	?	残2.0	5.0	坏	紅褐色精土	口クロ強で調整、回転糸切底及び大径底	残底部
50	A区D5	?	残1.0	5.0	?	灰白色精土	口クロ強で調整、回転糸切底	残底部
51	C区D7	地35.4	残0.6	?	?	淡紅色精土	口クロ強で調整、染め強い	
52	P189	地34.7	残10.5	?	?	淡紅色精土	口クロ強で調整内壁羊毛状強で、割面下半円跡	底部欠
朽葉底	C区D7	?	残1.5	5.0	坏	黄褐色染め強い	口クロ強で調整、回転糸切底、埋戻り	裏割面に粘着 長0.2 幅0.5 深6.25cm

第5表 土師器印締技法の観察表 (第17図)

No	出土地点	胎土・特徴	印締技法	No	出土地点	胎土・特徴	印締技法
53	P157	灰黄色、粘土、焼成良、煤	平行印き、横なで、指頭痕	72	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロなで
54	P182	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロ横なで	73	C区B8	黄褐色、粘土、焼成良	ロクロなで、磨耗不鮮明
55	C区D8	淡紅色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロ横なで	74	C区D12	灰黄色、粘土、焼成良	格子目印き、ロクロなで
56	C区D7	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、ミガキ指頭痕	75	P187	灰黄色、粘土、焼成良、表面黒色化	平行印き、ミガキ
57	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文	76	B区E6	灰黄色、粘土、焼成良、砂礫混	平行印き、磨耗
58	C区D8	灰黄色、煤化磨耗	平行印き、ロクロなど	77	C区C10	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、指頭痕
59	C区D10	灰黄色、粘土、焼成良、表面黒色化	平行印き、指頭痕	78	C区D7	淡紅色、粘土、焼成良、煤	平行印き、指頭痕
60	B区E3	暗灰色、粘土、焼成堅	平行印き、青海波文	79	C区D7	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、指頭痕
61	P162	淡紅色、粘土、焼成良	平行印き、指頭痕	80	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、磨耗
62	P174	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、指頭痕	81	掘土表探	灰黄色、粘土、焼成良	平行印きなで、指頭痕
63	C区D7	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文	82	P196	黄褐色、粘土、厚手、焼成良	平行印き、青海波文
64	C区D7	灰黄色、粘土、焼成良、煤	平行印き、指頭痕	83	C区A10	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文
65	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文	84	C区B7	暗灰色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロなで
66	C区E7	黄褐色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文	85	C区C10	灰黄色、粘土、焼成良、煤	平行印き、ロクロなで
67	A区D7	暗黄褐色、粘土、焼成堅	平行印き、ミガキ指頭痕	86	C区C10	黄褐色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文
68	P160	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロなで	87	C区D7	淡紅色、粘土、焼成良	平行印き、指頭痕
69	P165	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロなで	88	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文
70	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文	89	C区D8	灰黄色、粘土、焼成良	平行印き、青海波文
71	C区D7	淡黄色、粘土、焼成良、煤	平行印き、指頭痕	90	P157	暗灰色、粘土、焼成良	平行印き、ロクロなで
A	P187	赤褐色、粘土、煤2次焼	平行印き、青海波文	D	P153	灰黄色、粘土、焼成堅、煤	平行印き、指頭痕
B	C区D8	暗灰色、粘土、焼成良、2次焼	平行印き、榎目木口当具	E	C区D8	赤褐色、煤、焼成良	平行印き、刷毛目
C	B区E3	暗灰色、粘土、焼成良	平行印き、平行線輪当具				
①	裏証21T	淡紅色、粘土、ロクロ調整、頸部く字状、口内面はつまむ		⑩	C区D9	灰黄色、粘土、外壁淡紅色化(命)と同一器体と思われる。	
②	C区D7	二次焼赤褐色粘土、調整灰白色化、ロクロなで、調整痕外壁		⑪	C区E7	灰黄色、粘土、直線的に挽上げた口唇部、成形器か。	
③	C区D8	淡紅色、粘土二次焼、外壁茶褐色、鉢状口縁内壁煤揚げ		⑫	C区D7	淡紅色、粘土、二次焼(く字状外反口縁、小壺型)	
④	P180	黄褐色、二次焼で炭化口縁部は堅い、縦く外反する深鉢		⑬	B区E5	暗灰色、粘土、ロクロなで調整、頸部膨らみ、外壁、煤、鍋	
⑤	C区C10	淡紅色粘土、二次焼、焼成良、外反する口縁直上に挽上げる		⑭	P174	灰黄色、粘土、⑩と同一器体か、掘土区E19~20cmの裏	

杯形土器6点の内、口縁部のみが2点で比較的浅い作出かと思われる。底部4点は無台杯1点、有台杯3点、各々外側接地の疊付き技法で高台部も低く、直立的である。底部切離技法は不詳であるが、なで調整が施されており、底部と体部の境付近の器壁が厚く、作出の技法から糸切底部のロクロなで調整によるものかも知れない。口蓋にみられる天井部鋭削調整と器壁内外面とも、ロクロなでによる凹凸が目立ち、杯と同じく天井部と体部の境付近の器壁が厚いという同技法が伺われることである。

甕形土器口縁部の5点(凶化4点)にすぎない。全体形を知る資料が皆無である。なお検出グリッドを点検すると、土地改良工事によって散乱した状況を示したものとなっている。それでも遺構調査面、割合にまとまったのがC区のB7・8、C8、D7・8・9の6グリッドで23点(全数の34%)である。すなわち六本柱建物遺構に伴って検出されたものと理解するが、埋出し地区であるために遺物が集中した地区であることも考慮しながらも検出割合の大きさは重要なことである。

胎土の特色では①灰黒色から暗灰色を呈するもの、②灰白色を呈するもの、③青灰色を呈するもの三分することができる。他に窯焼きでの焙焼が回り切らない部分によって出来たと思われる黄褐色を呈するものが含まれる。胎土の粒子は概ね精良である。砂粒を含むものが数点含まれる。また白色粒子を少量含むものが5点ほど確認された。次に自然釉のかかるものが7点含まれている。

器体製作調整技法で観察するとロクロ回転なで調整によって仕上げたものは、甕・壺・杯類の口縁部、底部の検出物においてすべての技法が30%を占めている。その他の部位の調整痕を残す印締手法を分類すると

①外面が平行叩き、内面が青海波文の当具を用いる（18%）。②外面格子文叩き、内面青海波文当具（13%）。③両面共に平行叩き痕を残すもの（12%）。④平行叩き、内面同心円、の当具を用いる（9%）。⑤格子文叩き、内面当具に川弧状文を残すもの（12%）の5分類ができる。なお部分的にロクロなどで消しのあるものや、カキメの認められるものがある。

灰黒色を呈する壘形土器・碗形土器を除いては、在地系の9世紀末から10世紀前半期にみられる遺物と思われる。

第6表 黒色土器（土師器）観察表

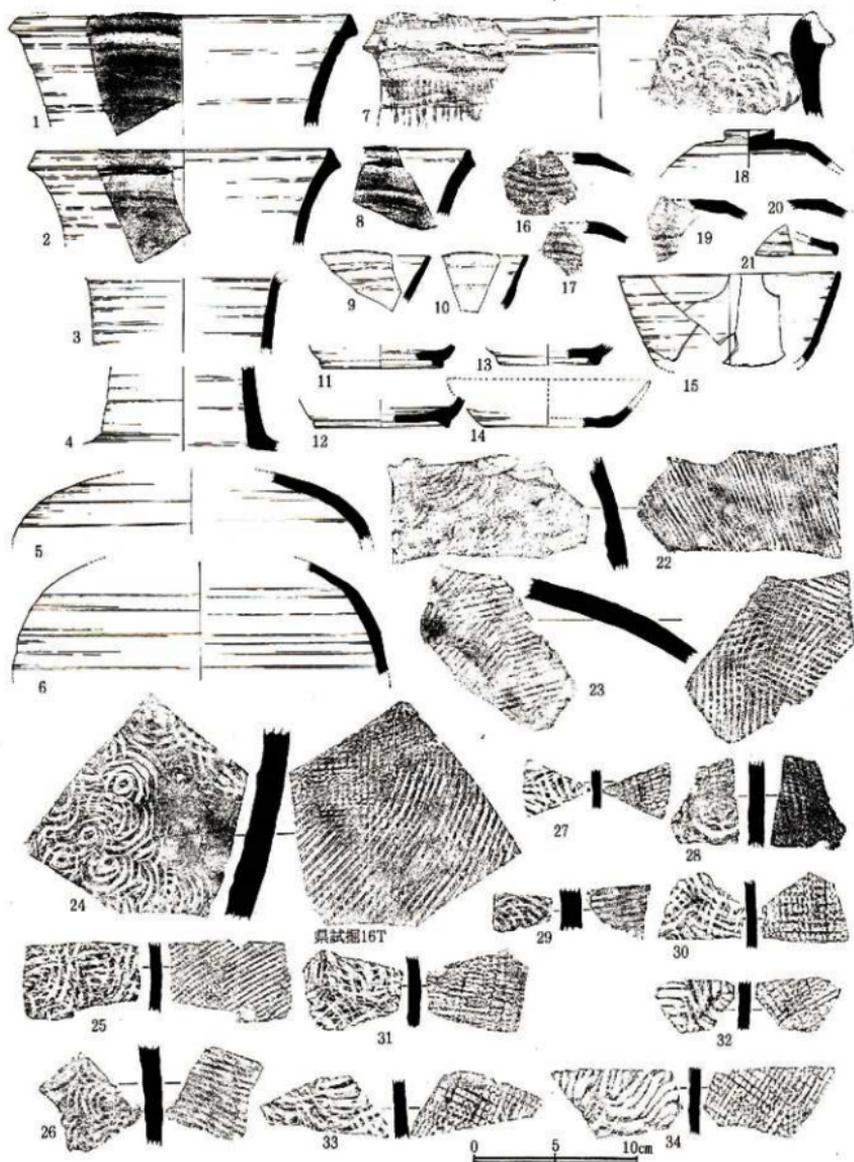
No.	出土地点 ピット・グロブ	破片数、部位等	特徴（焼出された土器はすべて坏形）
1	P160 (C区D7)	8点 口縁～体部他2個体分	灰白色胎土、口縁外端まで黒色、立上がりはや、緩く、胴部やや膨み、直線的に挑上げる。などで仕上
2	P162 (C区D7)	9点 口縁～底面立上部他1	灰白色胎土、口縁外端まで黒色、砂粒含、ロクロなどで調整、立上り角度45°と大変緩い、底部切離技法は不明。
3	P164 (C区D7)	1点 口縁小片	暗茶褐色胎土やや荒く、焼成堅い、2次焼きによる黒色内面は荒れて光沢がない。
4	P187 (C区D8)	2点 体部	暗灰色精土、焼成堅い、ロクロ調整、黒色内面に光沢がない。
5	P189 (C区D8)	10点 口径12.5、底径5.7、 碗高5cm	第15図に図化した。表4土師器観察表の1で参照、回転糸切後に磨き技法による碗型、他4点底部立上り部分・口縁部
6	P194 (C区B9)	1点 底部と思われる小片	灰黄色胎土、焼成堅い、外面2次焼の荒れ、内黒にも光沢はない。
7	B区E5	3点 口縁部小片	暗茶褐色、口縁外端まで黒色、砂質、黒雲母石英含、ロクロなどで調整、内黒光沢はない。
8	C区C10	1点 体部細片	淡紅色2次焼対外面荒れ、内黒光沢なし。
9	—29号 (C区E10)	3点 口縁部器高残部5.5cm	暗灰色砂粒、黒雲母含、焼成堅い、口縁外端1.5cmまで黒色、ロクロなどで調整、大ぶりの坏
10	—52号 (C区E11)	1点 底部立上り部	暗灰色磨き仕上げ、底部切離法不明、2次焼で暗灰色荒れ、内黒光沢なく荒れ、立上り角度緩い。
11	C区F8	1点 体部細片	2次焼赤褐色化、薄土器厚0.35cm 内黒焼け荒れ。
12	—68号 (C区F8)	3点 口縁部残高5cm	灰白色精土、口縁外端1～1.5cmまで 黒色、ロクロ調整、外面は2次焼による荒れ、推定口径13～14cm

第7表 須恵器観察表(1)

No	出土地点	法 量			胎 土 特 色	技 法 特 色	備 考
		口径cm	胎高cm	底径cm			
1	A-A3	径20.2	残 6.8		灰褐色、志土厚液、胎土やや鈍い	ロクロなどで調整、口縁外反し、裏み上げて納める	横 口縁部
2	C-D7	径17.8	残 5.8		灰褐色、精土、焼成良	ロクロなどで調整、口縁外反し、裏み上げて納める	横 口縁部
3	B-G3		残 4.3		黄灰色、白色骨材含、胎土ガツキ	ロクロなどで調整、押定最大径12.0	胎部
4	D-D7		残 5.0		灰褐色、白色骨材含、火曜線、焼成良	ロクロなどで調整、押定最大径7	胎 胎部
5	D-C8		残 4.9		灰褐色、砂を含ま、焼成良	ロクロなどで調整、押し印痕と調整線、最大径22.8	胎 胎部
6	C-D8 (P196)		残 6.7		黄灰色、砂を含ま、焼成甘い	ロクロなどで調整、志土半焼黄褐色、最大径28~29.0	胎 胎部
7	B-B6	径28.0 ~29.0	残 6.0		黄灰色、志土灰白色、焼成甘い	平行印跡、内面同心円文並具調整	横 口縁部
8	D-G6		残 4.2		灰白色、彩穴、内面緑青色自然胎	ロクロなどで調整、焼成良、残 幅4.5	口縁部
9	C-E7		残 3.3		暗灰色、精土、焼成良	ロクロなどで調整、体面並行の残幅4.2	口縁部
10	C-D8		残 3.5		暗灰色、精土、焼成良	ロクロなどで体部やや外反、残幅3.5	内、浅味縁~口縁部
11	A-C6		残 1.3	径 7.5	灰白色、精土、焼成良	底面立上り角60°位、空台内縁して広く、有段縁付外側縁地	胎部、ロクロなどで
12	A-E6		残 1.9	径 8.3	暗灰色、砂含、焼成良	底面立上り角70°位、高台ややへんぼり、有段外側縁地	胎部(大振り)、ロクロなどで
13	A-A7		残 1.3	径 6.3	黄灰色、白色骨材含、焼成やや甘い	底面立上り角50°位、高台角状仕上げ、唇付外側縁地	胎部、ロクロなどで
14	B-G6		残 1.2	径 7.7	黄灰色、精土	内面反状ロクロなどで調整、底部り解技法不詳	胎部
15	C-A8	径17.5	残 5.4		灰白色、白色骨材含、焼成良	体部並行的に角径70°位、ロクロなどで調整	胎部(口縁部)
16	C-A10	長径片 3.7	幅 4.0		暗灰色、精土、焼成良	胎部天井部並行縁形、ロクロ水挽	胎部
17	A-C6	長 2.8	幅 2.3		暗灰色、精土、焼成良	胎部天井部並行縁形、ロクロ水挽	胎部
18	C-D7	径10.2	残 2.2		灰白色、精土、焼成良	胎部天井部並行縁形、唇付、つまみは指状、裏に直取り	胎部、内面胎土の加み
19	C-C8	長 3.7	幅 2.8		暗灰色、精土、焼成良	胎部天井部並行縁形、ロクロ調整	胎部
20	A-C6	長 3.5				胎部天井部並行縁形、内面はロクロ調整状態	胎部
21	B-C6	長 2.0	幅 2.5		灰白色、精土、焼成良	胎部並行上反りして、直角に折曲げる、ロクロなどで	胎部かえし形
22	B-F4	長12.5	幅 7.0		灰白色、精土、胎土黄褐色、焼成良	並行印跡、内面青褐色文并具調整手目	横 胎部
23	B-F4	長12.0	幅 6.5		黄褐色、砂含、焼成甘い、志土色黄褐色	体内外共平行印跡、並行調整して縁をなす	横 胎部
24	遺跡16丁	長12.0	幅11.5	厚 1.5	黄褐色、黄化還元浴さらせ、精土	平行印跡カケメ、内面同心円文当具	横 胎部(内面同心円内)
25	C-D7	長 4.0	幅 6.0		灰褐色、精土、焼成良	叩き長米(米)を打面とする平行印跡(格子目)、内面同心円文	横 胎部(P160成辺調整)
26	B-B6	長 6.5	幅 4.5		暗灰色、精土、焼成良、自然胎	平行印跡カケメ、内面同心円当具	横 胎部
27	C-D7	長 3.2	幅 2.5		暗灰色、精土、焼成良	浅い胎形、格子状印文、内面青褐色文当具	浅形、小破片
28	C-D9 (...83号)	長 3.7	幅 2.0		灰褐色、精土、焼成良	細かな格子目印文、内面も同様格子目後同心円当具	横 胎部
29	C-C10	長 2.4	幅 3.0		灰褐色、精土、焼成良、自然胎	浅い平行印跡、内面青褐色文	横 胎部
30	C-D8	長 4.0	幅 7.3		灰褐色、精土、焼成良	細かな格子目文、内面青褐色文当具	胎部
31	D-D8	長 4.3	幅 5.0		灰褐色、精土、焼成良、自然胎	格子状印跡、内面青褐色文、交絡状具痕	胎部
32	C-C11	長 3.9	幅 3.2		灰褐色、精土、焼成良	格子状印跡、内面青褐色文、交絡状具痕	胎部
33	D-F11	長 2.7	幅 3.5		黄灰色、精土、焼成良	格子状印跡、内面青褐色文、交絡状具痕	胎部
34	D-E9	長 4.0	幅 4.2		暗灰色、精土、焼成良	格子状印跡、内面青褐色文、交絡状具痕	胎部
35	B-E6	長 5.0	幅 5.2		暗灰色、精土、焼成良、自然胎	格子状印跡、内面青褐色文文当具具痕	横 胎部
36	B-G3	長 3.7	幅 4.0		灰白色、精土、焼成良、自然胎	平行印跡カケメ、内面青褐色文	横 胎部

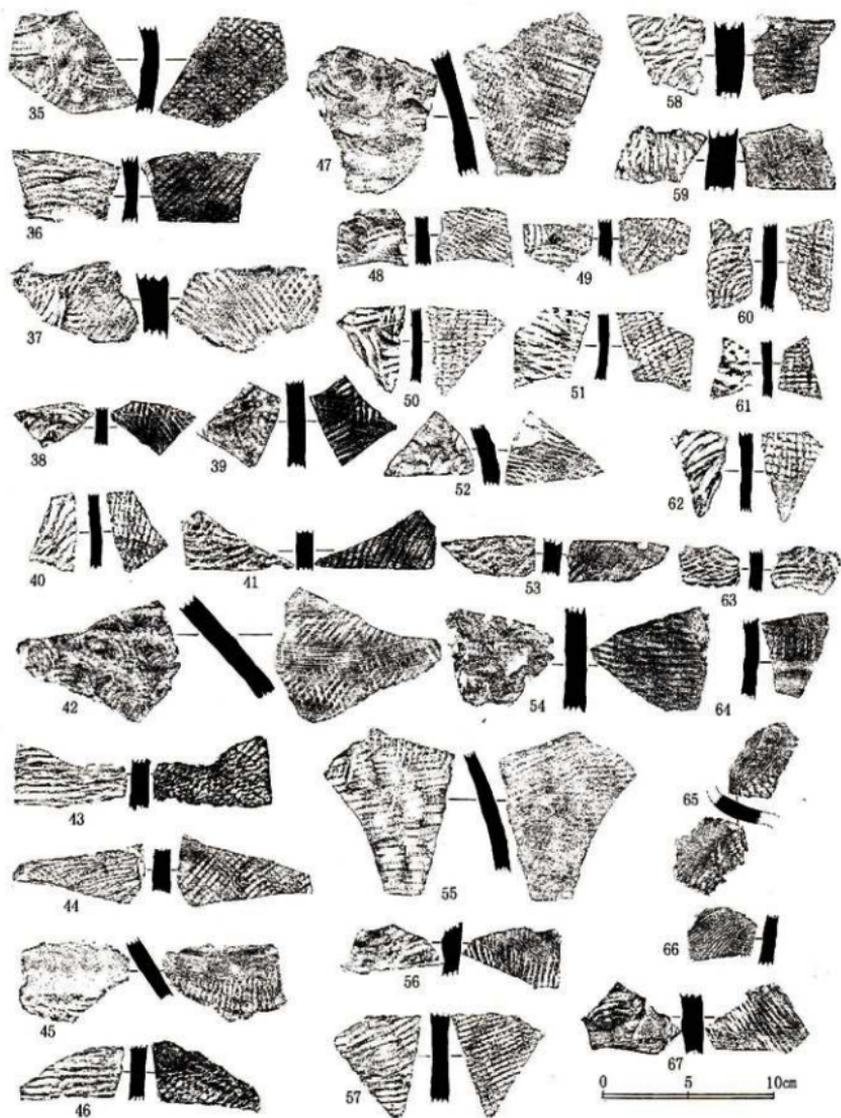
須恵器観察表(2)

No	出土地点	法 量			胎 土 特 色	製 法 そ の 他 特 色	備 考
		口径cm	高さcm	底径cm			
37	B-G 6	長 3.8	幅 4.0	厚 1.5	灰白色、礫土、焼成良	平行印目、内面も平行印目交差状当具	奥 瀬部
38	C-D10	長 2.2	幅 5.0		灰白色、礫土、焼成良	平行印目交差、内面同心円文当具	瀬部
39	C-D 7	長 3.0	幅 4.5		灰白色、礫土、焼成良	平行印目交差後カキメ、内面深い凹の青海波文当具	奥 瀬部
40	D-A 2	長 4.4	幅 3.0		緑灰色、礫土、焼成良	格子状印文、内面円形刻当具	瀬部
41	D-D 7	長 2.2	幅 7.0		灰白色、礫土、焼成良	平行印文、内面青海波文当具	瀬部
42	C-C 8	長 7.2	幅 9.8		黄灰色、礫土、焼成良	凹形印文、下半分交差後カキメ、内面青海波文	奥 瀬部
43	A-E 6	長 3.0	幅 6.7		黄灰色、礫土、焼成良	格子状印跡、内面平行印文当具	瀬部
44	B-F 2	長 2.5	幅 8.0		灰白色、礫土、焼成良	格子状印跡、内面平行印文当具	瀬部
45	A-D 3	3.8	6.8		緑灰色、礫土、焼成良	細狭平行印線部分で調整、内面平行印線深	瀬部
46	C-D 8 (P185の複製)	3.3	6.0		灰白色、礫土、焼成良	細格子状印跡などで消し、内面平行印文当具	瀬部
47	D-F 9	7.5	8.0		灰白色、礫土、焼成良	細格子状印、内面青海波文当具	奥 瀬部
48	D-C 6	2.8	4.0		灰白色、礫土、焼成良	縄文状平行印痕、内面青海波文当具	瀬部
49	C-A10	3.0	4.0		黄灰色、礫土、焼成良	格子状印跡、内面青海波文当具	瀬部
50	C-D 7 (複製印中)	4.3	4.5		緑灰色、礫土、焼成良	格子状印跡、内面円形刻印文当具	瀬部
51	C-D 8 (上3号)	3.3	6.0		灰白色、礫土、焼成良	細格子状印文、内面円形刻印文当具	瀬部
52	C-D10	3.6	5.0		灰白色、礫土、焼成良	細平行印線後カキメ、内面円形刻印文当具	瀬部
53	C-D 8 (P185の複製)	2.0	5.3		灰白色、礫土、焼成良、自然性	平行印線後などで消し、内面青海波文後などで削り	瀬部
54	A-F 5	5.0	7.0		灰白色、礫土、焼成良	平行印跡、内面も同様、寛均痕多し	奥 瀬部
55	C-B 8	7.3	8.0		灰白色、礫土、焼成良	浅い平行印跡、内面細狭平行印文と細平行印の交差	奥 瀬部
56	B-F 4	3.0	5.5		灰白色、礫土、焼成良	細平行印線後カキメ、内面平行印文当具	瀬部
57	C-F 7	5.2	5.0		黄灰色、礫土、焼成良	細平行印線後カキメ、内面太目の平行印線	瀬部
58	D-D10	4.4	4.8	1.7	灰白色、礫土、焼成良	縦深い平行印跡、内面青海波文当具	奥 瀬部
59	B-G 4	3.5	4.7	1.5	灰白色、礫土、焼成良	縦深い平行印跡、内面青海波文当具	奥 瀬部
60	C-D 8 (P185の複製)	4.8	2.8		黄灰色、礫土、焼成良	細格子状印跡、内面青海波文当具	瀬部
61	A-C 6	3.2	2.5		緑灰色、礫土、焼成良	細平行印文は消滅、内面青海波文当具	瀬部
62	C-F 8 (上3号)	3.0	3.5		黄灰色、礫土、焼成良	細格子状印跡、内面深い青海波文当具	瀬部
63	A-D 2	2.5	4.0		灰白色、礫土、焼成良	平行印文、内面青海波文後カキメ	瀬部
64	B-F 9	4.8	4.0		緑灰色、礫土、焼成良	細平行印跡文などで消し、内面平行印文当具	瀬部
65	D-G 7	2.5	5.0		黄灰色-白色母材、焼成良	細格子文後カキメ、内面青海波文後などで削	奥 瀬部
66	C-D 8	2.7	4.0		黄白色、礫土、焼成良	消滅で調整、内面縦目刻線	瀬部
67	A-D 2	3.5	6.0	1.3	緑灰色、礫土、焼成良	細平行印線後カキメ、内面灰色胎土、青海波文	奥 瀬部



真試插16T

第18圖 須惠器 (1)



第19圖 須惠器 (2)

(3) 木製品・柱根 (第20図、第8表)

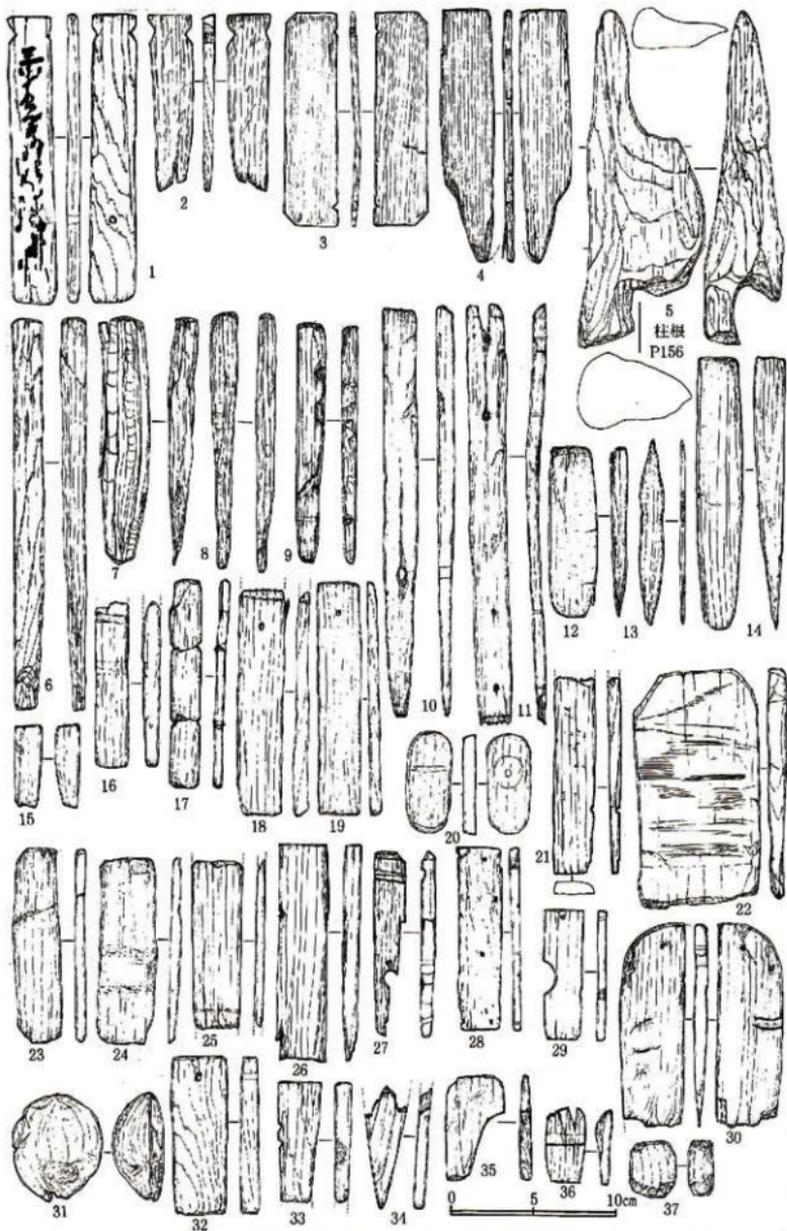
調査区から検出された木製品は多種多様であり、大量である。第20図に図化したものは古代の木簡(1・2)と柱根(5)の3点以外は近現代の遺物と思われる。半杖具、杭杖具、荷札状や牆の一部、特殊な秤(13)、イタヤカエデ材の桶屋の拵持具(22)、桐材の雪下駄の裏蓋(30)、物指用具と思われる(17)ものなどをまとめた。

木簡1は杉材の板目を使用したもので形体分類(水沢幸一「古代の荷札木簡について」『新潟考古学談話会会報』第9号 1992)によれば1類A1型(奈良国立文化財研究所分類形式032に該当)となるが、さらに下方に釘穴痕が確認され、荷造に下方を挟み込むのではなく釘で打ち付けた梱包方法がとられたものと理解される。木簡2は下方が三角状に尖らせた型と思われる。明瞭なタイプではないが、形体分類(上記による)から1類のB1(033)に該当する。

1の墨書は判読不能、2は文字の確認ができない。5は柱穴156号から検出した櫓材である。唯一掘立柱の遺物で、保存処理を奈良市文興寺文化財研究所保存科学センターに依頼した。残された柱の形状は不思議な形で検出されたが、それ以上の資料は得られなかった。

第8表 木製品・柱根等観察表

No.	出土地点	法 量			素材形状	技法その他の特徴	備 考
		長さcm	幅cm	厚さcm			
1	B区D3	17.3	2.8	0.8	杉、荷札木簡	板目材の上部左右を切り込み、他方の端部斜めに去る。器用な削り込み	墨書判読不能
2	B区E4	10.6	2.6	0.7	杉、荷札木簡	板目材の上部左右を切り込み、他方の端部斜めに去る。器用な削り込み	墨書の有無も不詳
3	C区A10	13.0	3.1	0.3	杉、木簡状	板目材無端端切り、他方の端部二箇所斜めに切込む	墨書の有無も不詳
4	B区E3	18.2	3.0	0.5	杉、木簡状	一方を鉋で削り尖らせる。上端磨丸	用途不詳
5	C区C7 (P106)	20.3	7.0	4.8	榿、柱根	上端部は磨丸して尖り、根元にはφ3.5cmの穴	保存処理済(奈良国議寺)
6	D区D7	23.5	1.8	1.5	杉、杭杖	板目材先端細く削る。端部磨丸、断面不整形	用途不詳
7	D区I7	16.0	2.9	1.6	榿、腰杖	端部磨丸、先端部は三角形状に尖る	用途不詳
8	B区C2	15.8	1.7	1.1	杉、杭杖	端部磨丸、先端部削り、断面不整形	用途不詳
9	D区E7	14.3	1.8	0.9	杉、杭杖	端部磨丸、先端三角形状磨丸、上下2箇所穴中道まで	用途不詳
10	B区A5	24.5	2.0	1.0	杉、半杖	端部磨丸、先端磨丸、穴1ヶ所、コバが磨丸し使用済	半杖使用磨丸
11	A区A5	25.2	2.3	0.8	杉、半杖	4ヶ所に小穴、上下2次の間隔4.5、内第2部1~2.3を割る	両面を磨丸らしい使用物
12	B区D5	10.2	2.9	1.0	榿、腰杖	端部磨丸、先端部の内形方部	拵具の小道具か
13	D区B7	11.1	1.5	0.4	杉、目とおし杖	両端が尖って、中段がややくびれている	拵具の棒であろうか
14	D区D8	16.6	2.8	1.8	榿、腰杖	よく使い込まれた様子、磨丸(火工?) 端部磨丸	表面磨丸か鈍く光る
15	D区G7	5.0	1.7	1.5	榿、腰杖	両端部磨丸、片方は直平の腰杖	鼠が尿の痕か
16	D区Y9	10.0	2.0	1.2	杉、棒子か	上端穴指、下端部磨丸、上・中段の痕跡	
17	D区E7	12.5	1.8	0.5	杉、半杖	左右2箇所に切り込み、内側4cm、中間1.5cm	断面は全体に丸味
18	D区Z9	13.5	2.8	1.0	杉、荷札状	両端部切断、上方釘穴1ヶ所、下部磨丸	櫓の一部か
19	B区A6	14.0	2.6	0.7	榿木(榿木)、荷札状	一面は磨丸かであるが、土中の影響か	用途不詳
20	D区Z9	6.1	2.8	0.8	杉、素杖	楕円形、断面が丸、裏面にφ1.6cm円形釘穴痕	片面ベッコウ塗彩
21	B区E4	12.0	3.5	0.8	杉、素杖	下方やや曲い、磨丸、1箇所穴、表面磨丸	倒置釘痕
22	D区A7	14.0	7.5	1.2	榿木(榿木)の拵持具か (イタヤカエデか)	両側の山取り、上下部磨丸、両面に釘痕多し	
23	B区B6	11.7	2.8	0.7	杉、荷札状	両端部丸味、上端部釘穴小楕	両正側に磨丸している、用途不詳
24	B区D5	11.2	3.5	0.6	杉、棒子か	中段部の磨丸2ヶ所あり	表面磨丸している、棒子と思われる
25	B区B5	10.2	3.0	0.5	杉、棒子か	両端穴状、内端する材、下端部磨丸	
26	D区Z9	13.0	3.0	1.0	杉、棒子か	下端部に削り跡、筋の磨丸か	
27	B区C5	11.0	2.0	0.8	杉、?	端部削り、両側削、下半分釘穴とφ0.8穴	先端丸味磨丸、用途不詳
28	C区D7	11.0	2.7	0.6	榿木(榿木)	丸い穴4ヶ所、中央に尖角穴1ヶ所	用途不詳
29	A区E4	7.8	2.4	0.5	杉、拵持の一部分	両端部磨丸、一方釘穴、中央磨丸φ2cm円形穴、溝	拵持の面と反面両面磨丸
30	A区E2	12.3	4.0	0.8	榿、雪下駄の裏蓋	約半分を欠損している、円形部に釘穴2ヶ	使用面磨丸
31	B区C6	6.3	3.5	3.2	榿木(榿木)?	半杖状、木簡	?
32	D区G12	9.5	3.4	1.2	杉、荷札状	板目材一方に釘穴、全体に磨丸	用途不詳
33	B区B6	7.3	2.7	1.0	榿	楕形で下端削い、中央2ヶ所斜削加工	一面斜削か黒色化粧材
34	C区C10	7.3	2.4	0.7	杉、棒状	上端穴指で磨丸不詳	木簡の下部か
35	C区C10	6.2	3.6	0.8	杉、棒の脚か	全体に磨丸している1字状、両面磨丸	上端部に拵持痕あり
36	A区A4	4.5	2.4	1.0	榿、拵持の腰杖	断面に楕円と三角形の痕、磨丸	上・中段に2箇所の磨丸
37	B区C3	3.4	2.8	1.6	杉、?	1面は平板、他面が溝状に境目を切る	用途不詳



第20图 木简·柱根·楔状木器·各种木器等类测图

2 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物には土器15点、石器62点の採集に過ぎない。遺構はまったく検出されていないため耕地整理によって遺構が削平されたことも考慮されるが、むしろ第2次大戦の昭和30年代初め頃までの土地改良とは、毎年春早く雪上をソリ運搬による山土など新しい土を田圃に客土することによって土壌の改良と病害虫からの防除を兼ねた作業が年中行事であった。東側段丘上面（清水尻及び延命ヶ原）は縄文遺跡の宝庫である。従って隣接するこの遺跡からの搬入物であると考えられる。

検出した土器片は15点に過ぎない。そのうち口縁部が8点もある。底部が2点、他は体部である。文様の特色から口縁部の工字文や体部の羽状縄文などから縄文後期から晩期に所属し、特に晩期の藤橋式（大洞C1～C2）期の遺物が主体をなす。

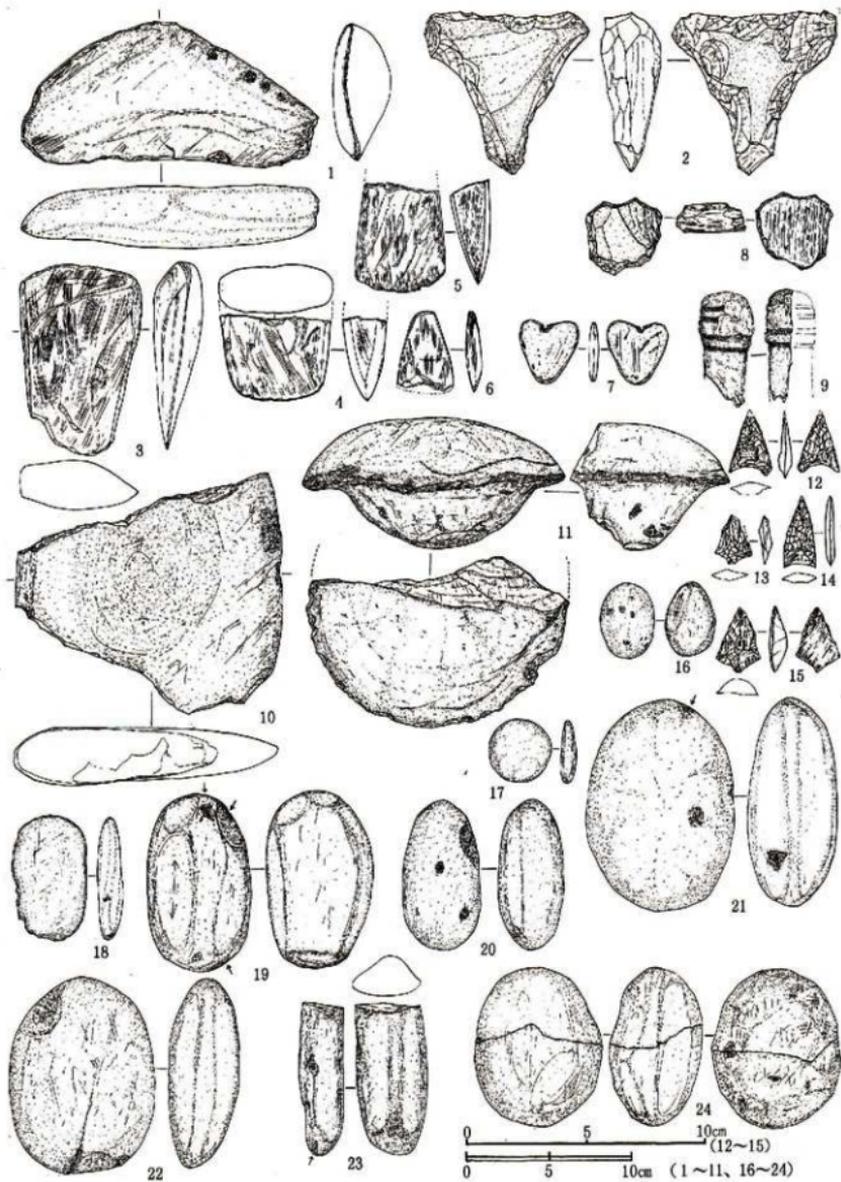
石器は磨製石斧4点、打製石器10点余、石鏃4点、大形石鏃2点、三脚石器1点、円板状石器1点、石皿1点、荒川流域産出の青色粘板岩製石棒残欠1点、各種磨石18点、その他不定形石器各種や錐などである。その他石材や特色については観察表に記載する。特記する石材には樹形安山岩（六口町樹形山産出）が3点検出されている。なお色とりどりの瑪瑙質・チャートの石材が多数採集された。

第9表 縄文土器・石器観察表(1)

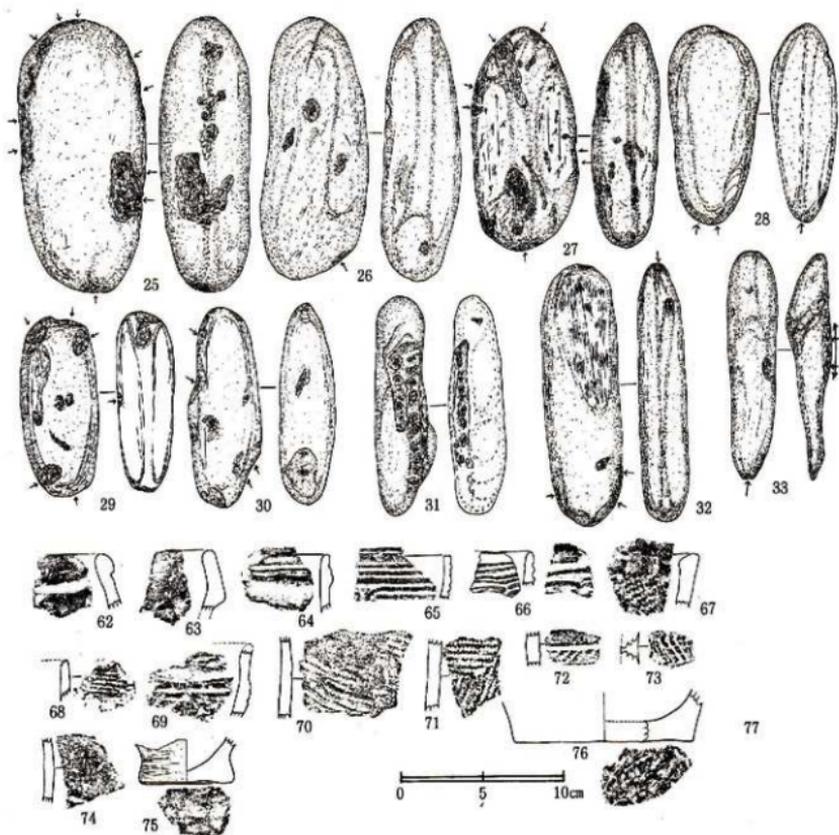
No	出土地点	注 記			器 種	石 質	技 法	そ の 他 特 色	備 考
		長さ	幅	厚さ					
1	A区P6	18.0	8.3	3.5	大形打製石斧	安山岩表面酸化	三角形状、断面漸縮形、刃縁打製、時に長辺方面	背面磨石、両面打削痕	
2	B区T6	9.5	9.8	3.5	三脚石斧	灰白色粘板岩	大横正三角形凸部は暗灰色の自然面を残す、一角を欠損		
3	B区E5	11.3	7.3	3.0	磨製石斧	黄灰色粘板岩	火傷により石材の不明確、凸部と片面厚く対面薄	薄い部分が使用痕	
4	C区Y8 (17号)	85.0	6.5	2.7	磨製石斧	茶褐色石炭安山岩	脱形石斧の方面のみの欠損である、使用痕跡	定式式、7号土器墓室土中検出	
5	B区E3	6.8	5.3	2.5	磨製石斧	緑黄色粘板岩	脱形石斧の基部を欠失、使用痕、刃こぼれ	定式式	
6	B区T6	4.7	3.3	0.9	磨製石斧	黄灰色粘板岩	刃部中程を入り欠損、内刃部8分通り生きている	両面打削り丁寧、石材心薄緑色か	
7	D区Y9	3.7	3.6	0.8	ハート型石鏃	灰白色粘板岩	ハート型の凸部に縦り孔、中穴ではない	用途不詳	
8	?	4.4	4.3	1.8	円板状石器	黄褐色粘板岩	不規則形、断面カットも不定式	片面は強化自然面	
9	B区E3	6.8	3.2	1.8	石 鏃	緑 泥 片 岩	丸先部4尖の輪郭薄、背縁部磨き丁寧車入り	関東系石材輸入品欠損	
10	C区P9	13.6	12.5	3.3	石 鏃	灰 色	火傷酸化よく磨られた感、断面一方薄	磨削痕、内縁大きく欠損	
11	D区E10	9.5	9.0	7.7	?	黄灰色角閃輝緑岩	部分欠損、厚部厚さ4cm、要型線打製	用途不詳	
12	D区A8	2.4	1.8	0.9	石 鏃	黄 緑 黄 泥 岩	小形無蓋A型2に類似される、整形良	無蓋凹基型	
13	B区G1	2.0	1.5	0.5	石 鏃	白 色 凝 灰 質	小形有蓋A型2に類する、欠損品	有蓋凸基型	
14	A区C6	3.0	1.4	0.4	石 鏃	白 色 粘 板 岩	小形無蓋B型2に類する、細かな縦工	無蓋凹基型、均整品	
15	B区K2	2.7	1.7	0.6	石 鏃	灰 白 色 粘 板 岩	用材断面凸部、背部に自然面を残す有蓋凸基型	A型2に類す	
16	B区C3	4.4	4.1	3.0	磨 石	石 炭 安 山 岩	扁平面よく磨かれている、打製なし	小型磨石磨石	
17	地点不詳	3.7	3.6	1.0	磨 石	泥 砂 岩	自然面	小型扁平凸面磨石	
18	D区D19	7.5	4.5	1.5	磨 石	花 崗 岩	河原砂の側面磨削打製	扁平磨石形	
19	B区E5	10.8	8.2	6.3	磨 石	石 炭 安 山 岩	扁平 面がよく磨かれている、両面に打製、火傷		
20	B区B4	9.0	1.7	0.9	磨 石	砂 岩	火傷赤褐色、扁平面に認められる	磨石 磨石	
21	B区E6	12.5	8.8	5.2	磨 石	灰 白 色 凝 灰 岩	火傷酸化、数ヶ所に打製、磨削不詳	扁平磨石磨石	
22	B区F8	11.8	8.5	4.4	磨 石	花 崗 岩	火傷酸化、赤褐色、両面に磨削打製か	扁平磨石磨石	
23	B区A6	9.5	4.3	2.6	磨 石	石 炭 安 山 岩	断面三角形、横状半欠先部打削打製		
24	C区D8	9.6	7.8	5.6	磨 石	花 崗 岩	火傷一部成で黒色化、石炭が目立つ、磨石多発例	磨削磨削打製多く、磨り不詳	
25	C区H7	16.7	7.4	5.5	磨 石	花 崗 岩	風化で荒れがひどい、縦線打削断面磨削形		
26	B区D8	15.4	6.3	4.7	磨 石	花 崗 岩	火傷凸部、灰白色赤褐色、表面打削断面磨削形		
27	B区E5	13.4	6.4	4.0	磨 石	凝 灰 質	断面不整形、三至四角形、両面に打製	磨石磨石	
28	B区B6	12.0	5.4	4.0	磨 石	黄 灰 色 粘 板 岩	火傷により磨削不詳、一方やや細く打製	磨石磨石	
29	C区K19	11.0	4.7	3.2	磨 石	凝 灰 質	火傷両面に打製、面小凹あり	磨石磨石	
30	C区C8	12.1	4.3	3.3	磨 石	灰 白 色 粘 板 岩	強化された磨削打削に欠損部打製	磨石磨石	
31	C区A9	13.3	9.3	3.7	磨 石	花 崗 岩	河原砂打削面を引いて打製	磨石磨石	
32	B区A6	16.0	5.6	3.0	磨 石	花 崗 岩	面に磨削断面と両面に打削打製	磨石磨石	
33	B区E6	14.0	3.0	2.7	磨 石	赤褐色チャート	一方が大きく磨削に磨削、先端部と側縁打製	磨石磨石	
34	A区E2	12.2	4.3	2.4	打 製 石 棒	珪 藻 類 粘 土	中穴くぼり、片面自然、大きな割線加工、先端部使用減少		
35	B区A6	9.7	5.7	5.8	種 器	緑 色 ナ ー ト	片面自然面を残す断面を高く磨削し方面の細かな磨削加工		

縄文土器・石器観察表(2)

No	出土地点	法量 or			器種	材質	技法その他の特色	備考
		長さ	幅	厚さ				
36	D区A7	12.5	8.9	2.8	種器	灰白色粘板岩	片断自然面を残し断面大きく斬断、刃部切離	大型種器欠損
37	完了後遺残	9.0	6.5	2.2	打製石斧	黄灰色粘板岩	一面に自然面を残す、鋭い刃部切離、基部欠損	黄褐色石斧
38	H区B5	5.6	3.6	1.9	打製石斧	赤褐色チャート	基部欠損、先端部打痕あり、自然石	薄形石斧
39	B区F5	7.1	5.9	2.6	打製石斧	黄褐色粘板岩	基部欠損、鋭い刃部の打製石斧	
40	?	3.6	2.6	0.9	種器	黄灰色粘板岩	十字形、内面に細かな打痕跡、先端欠損	
41	D区Z6	7.2	4.9	2.0	種石	灰白色粘板岩	両面に自然面を残す、両側縁の加工、先端打痕	断面に加工痕なし
42	D区A1	5.6	4.5	0.7	種器	白色粘板岩	平張な石材の板状割離、両縁に細かな割離加工	
43	H区A4	5.6	5.3	2.9	打製石斧	黄褐色粘板岩	片面に自然面を残す、基部平直自然打痕あり	六日町野山産出燧石
44	D区B8	10.2	4.7	1.7	種器	黄緑色粘板岩	黄褐色自然石転用刃部大きく欠損	
45	D区E10	6.9	5.1	1.6	打製石斧	黄灰色粘板岩	片面に自然面を残す、基部欠損	薄形打製石斧
46	C区E10 (上2号)	6.6	8.0	1.6	不定形石斧	黄褐色チャート	両面に自然面を残す、刃部不鮮明、基部長さ不詳	
47	C区E9	8.1	7.2	3.0	石斧?	灰白色凝灰岩	火傷により石状のみ、断面で保形不鮮明に輪郭	石山か燧石か
48	B区E6	4.7	6.0	1.8	種器	黄褐色粘板岩	基部切離あり、大きな割離加工	六日町野山産出燧石
49	D区F11	5.0	7.7	2.1	種器	黄褐色粘板岩	基部に片面に自然面を残す、刃部切離あり	
50	C区D8	5.5	6.4	1.9	種器	黄褐色チャート	断面した基部切離と両面に自然面を残す	
51	B区Z5	5.9	7.4	1.7	種器	黄褐色チャート	片断大割りの一枚割離、断面に大きな加工	新形金剛に使用痕
52	C区E8	6.8	4.9	1.5	種器	黄褐色チャート	片断及び断面に自然面を残す、先端部加工	
53	A区A5	4.0	7.3	1.8	種器	黄褐色チャート	片断残存に自然面を残す、両縁部に刃部切離	刃部は使用痕
54	A区E4	5.9	6.2	1.3	種器	黄褐色粘板岩	内面に自然面を残す、二割離あり	
55	H区F1	4.5	4.0	0.7	種器	黄褐色粘板岩	大きく磨き、両縁部の細かな加工	一方の欠損部形状不詳
56	D区C11	8.4	5.4	1.8	種器	黄褐色チャート	凸面に自然面、反面も大割りで割離のみの物加工	基部は欠損か
57	B区D5	4.0	7.6	1.0	種器	黄褐色粘板岩	黄褐色一枚割離、反面から割離、刃部使用痕	六日町野山産出燧石
58	A区C6	3.5	4.8	1.0	種器	黄褐色チャート	本目次の層理、絶状のタイプ欠損品	
59	D区Z6	8.0	2.0	1.0	通し用片か	黄褐色チャート	薄直した自然石転用片断割離、内面欠損あり	(物送り用片か)
60	C区F8	6.9	3.0	1.8	大型石鏡	黄褐色チャート	片断自然面をもち、両縁部を呈し、両角部、一筆欠損	A区? 大型有蓋
61	A区A3	5.4	5.0	1.0	大型石鏡	灰白色粘板岩	片断凸状で自然面を残す、両縁部欠損	A区? 大型有蓋
62	B区F1	残高 3.4			部笠口鏡	黄褐色粘土砂質土、口内内縁丸く納める、返しに一筆化縁線に付す		
63	B区D2	3.6			口鏡	黄褐色粘土砂質土、縁部で、口縁内縁丸く納める、全体不詳		
64	B区E2	2.5			口鏡	灰白色粘土、形は合心、口縁外反り縁部共に縁部を構成する、内側磨き、縁部磨き		
65	B区E2	2.6			口鏡	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、上平文、口縁部1本の溝、外縁部打痕、内縁部コゴ		
66	C区G8	2.0			口鏡	3次焼成のためか、炭化土器、光澤下平文のへら磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
67	C区C11	3.2			口鏡	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
68	B区D4	2.0			口鏡	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
69	B区A5	4.0			口鏡	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
70	B区D3	0.5			体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
71	C区E3	4.0			体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
72	C区A7	2.0			体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
73	D区A9	1.8	厚さ 1.1		体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
74	B区D2	2.8			体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
75	B区E2	残高 2.8	底厚 5.7		体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
76	B区D6	残高 3.0	底厚 11.0		体部	黄褐色粘土砂質土、厚さ約1.5cm、口縁磨き、縁部磨き、内面磨きでアバタ、縁部磨き		
77	C区G9 (114号)	4.5	2.5	0.5	黄褐色チャート	黄褐色チャート、一筆磨き、両縁部磨き、2次表子0.6~0.8、裏子0.3~0.4%の微孔、やや粗めの不鮮明形、薄直状の形状を示す。ペンダントか。		

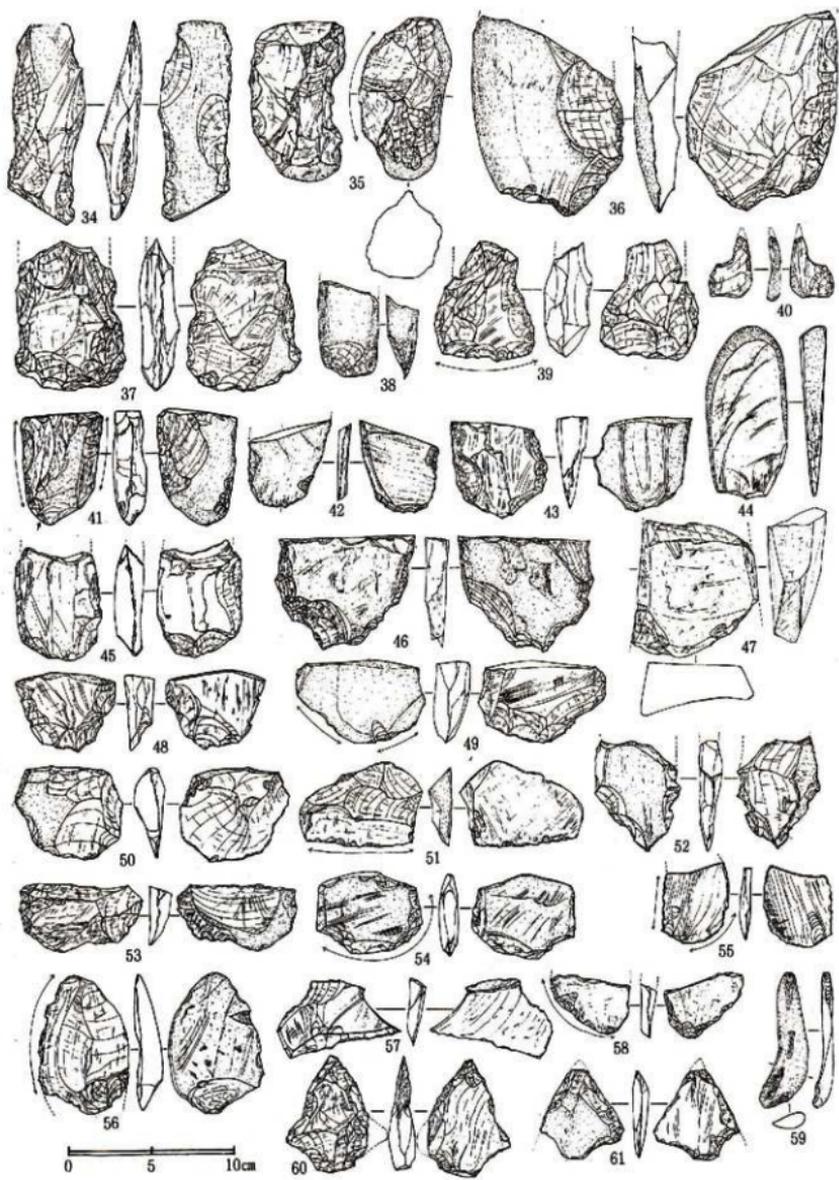


第21圖 縄文時代石器(1)



山小屋の風景（上栗地内）

第22図 縄文時代石器・土器(2)



第23圖 繩文時代石器(3)

3 近世土葬墓群・遺構外の遺物

第4章3節の(2)項で述べてきた近世以降大正初年まで、墓地であった該遺跡からは69号(79基)の墓墳群を調査し、その遺構について示した。そこで明らかにしたことは①桶棺墓、②薬棺墓、③火葬骨のある遺構、④土壌であった。ここでは埋葬された桶・箱・樽・甕等施設と副葬された遺物、および遺構外から検出された陶磁器類、木器類、金属器等について概述する。

(1) 桶棺

桶棺の素材はすべて杉材である。柾目が大半であるが、板目を使用したものもあった。良材を使用したものも多かったが、ハヤオケ(早桶)と称されるように使用材は四分板(約1.2cm)で厚挽きになると三分板になる。竹籠の結桶である。結桶の木口縫合に竹釘で綴じてあるものも確認されたが、これらはかなり丁寧な作りであるといえる。すでに遺構の所で説述したが、全墓坑数の65%が結桶棺である。桶子の長さの長短や大小について号数があって死者の体格に応じてお棺は購入したという(中橋権次談)。

『古事類苑』禮式部二(神宮司庁裁版、明治33年発行、吉川弘文館刊行、普及版昭和54年)の「葬禮一」では「……棺ニハ臥棺アリ、座棺アリ、桶棺アリ、貴人は大抵臥棺ニシテ、其他ハ多く座棺桶棺ナリ、清和天皇ハ、座棺ヲ用キ(元慶4年 880)、後柏原天皇ハ、桶棺ヲ用キ(大永6年 1526)……」と記し、棺の外には柳(外箱)があり、また別に龕(モコシ)があって棺を納める小屋であると説明している。しかし座棺も桶棺も土坑内に埋葬する時の姿勢についての記述はない。考古学では「屈葬・伸展葬」の葬法が上げられ、伸展葬でも「仰臥位埋葬」を大半としながらも「側臥位、俯臥位」も種にみられる。縄文後期から弥生時代にはほとんどが仰臥伸展葬である。

桶棺に墨で○印をつけた棺(2・41・51・62・67・69号棺)がある。これは死者の入棺位の正面を示す印であり、葬家が印すものであるという。埋葬の時に死者が「北枕、西向き」に位置する(釈迦の涅槃像に倣うもの)ように右脇を下にした横臥屈葬とするものである。このような横臥埋葬の事例は近世墓では(座棺・桶棺)ほとんど知られていない。東京都池之端七軒町で発掘調査された墓地域(平成6・7年同調査団)では総墓数591基中390基が桶棺(66%)、方形座棺41基(6.9%)、長方形寝棺はわずか10基(1.7%)その他である(季刊考古学53号、小俣悟・里見雅仁、1995)。同報告によれば寛永4年(1627)に創建された曹洞宗慶安寺の境内墓所であったものであろうと予測している。桶棺の横臥埋葬はみられない。

埋葬施設の類型

- I類 桶棺 { Aタイプ ○印
(横臥埋葬) { Bタイプ 無印
- II類 長方形箱棺(横臥埋葬)
- III類 樽棺 { Aタイプ 竪位埋葬(26・35・66号墓)
{ Bタイプ 横位埋葬(柿洗塗り18・21・60B号墓)
- IV類 甕棺 { Aタイプ 甕
{ Bタイプ 莫盛椽(52B号墓)
{ Cタイプ 網代編状(竹ヒゴ縁)(40号墓)
{ Dタイプ 竹籠状(37・52A号墓)
- V類 火葬骨のある墓坑

なお、新潟県南魚沼郡湯沢町の両山谷と称する旧大字土樽村地区のみが方形座棺の横臥埋葬の土葬墓制であった（昭和30年町村合併まで）。なお、かつて桶棺が使用されており、稀有の同事例であった。湯沢町両山地区は多くが曹洞宗瑞祥庵の檀家である。

桶棺でも堅位の埋葬墓が3基（26・35・66号墓）と樽の横臥埋葬の18・21・60号Bの3基がある。これらの内堅位埋葬の3基は桶子が厚く、柿波の塗布が確認され、いわゆるハヤオケではなく、日用品の棺桶への流用であったことが理解される。この場合は北枕西面位体であったかどうかは確認できない。

(2). 甕棺

甕棺として検出したものは17基（30・37・40・42～44・46B・47・52A～52C・53・60A・60C・61B・61C・63B号墓 28.3%）である。桶棺との重層では桶棺が上層に埋葬されていることから甕棺が古式であると判断される。甕棺のものと一括したが、素材不詳であるが篋状を呈する40号墓は緑どりに篋状のものが遺存していた。60A号墓は舟形状に潰れた笠の竹骨だけが埋葬墓の上に被せた状況で検出されたもの、52B号墓の裏側に奠座状の遺物であることが観察された。しかし埋葬の実態が確認できる状況は十分ではない。桶と違ってその方向も定かではない。大人か小人かの区別も確かではない。ただ桶棺よりも下層に検出された事例が古式であろうと推定されることである。

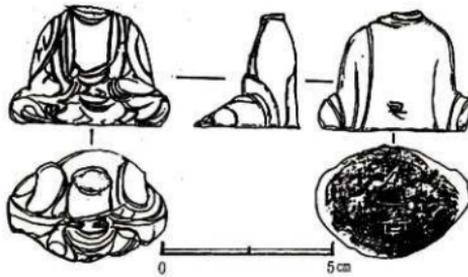
(3). 副葬品（第26～31図）

棺内副葬品と埋葬後の覆土中ないし、盛土上での追善供養のための供献具とに分類されるが、後者は陶磁器類にほとんど限定されるであろう。まず発掘調査中「三点セット」と呼称した副葬品がある。①碗、桶棺中に副葬された碗は48基51点を検出した。これは墓坑全数の60.8%に当る。②六道銭の検出である。圧倒的に寛永通宝であり、6枚を副葬するものが大半で36件（45.6%）186枚があげられる。特に注目されたのが39号墓からは「明治16年発券の半銭」のコインが検出された。これは明治16年（1883）以降に土葬埋葬されたことが明らかである。③数珠の副葬は11件（20%）に過ぎないが、直径0.8～1.0cm程の扁平タイプ木製珠を主体とするものが総計530粒余を検出した。

数珠は最高142個を検出した62号墓、17B号墓の131個、59号墓からはガラス玉、青玉などを含む53個、41号墓の75個などが多く、40個、50個や1個のみの検出例もある。数珠玉は念珠とも称し、基本は木椶子を買った108個とするが、1080珠、54珠、27珠の四種である。また42、21珠の説もあるという。また108珠の半数54珠は菩薩の位、次には四分の一の27珠は小乗の二十七賢聖を示すとの仏教説がある。あまりに細粒の数珠玉は多くを見逃がしてしまったとも思われる。

次に目立った副葬品に櫛があげられる。生前身につけていたもの、嗜好品であったものを副葬することは現在もなお行われている習俗である。女性の櫛、男性の煙草道具である。不思議なことに煙管は17点を図化（第28図）したが、桶棺内から検出されたものは1点もない。女性の櫛は11点が棺内から検出された（12・20・21・50・52A・56・59・60B・61A・61C・69号墓）。第10表で示したように上湾長方形（利久型）の横櫛のみであり、上湾の円形の強い20・56号墓に副葬された2点を除けば皆同じタイプである。素材は黄楊であろう。江戸中期以降の作出と思われる。いわゆる信濃の藪原宿で生産された「お六櫛」であろう。

第24図中、123号墓から検出した頭を欠失した塑像がある。衣紋は胸を大きく開き、手は上品上生に組む座像は「阿弥陀如来座像」である。高さ3.4、最大幅4.5、厚さ3.3cmを測る。黒色漆仕上げで丁寧な作品である。背面には「」の文字が刻まれている逆位か、記号か不詳である。台座裏面には拓影で示したように一見「豊」字であろうか、強いタッチで線刻されている。また文字は「農一」とも読めそうだ。23号墓は調査墓域の大概中央に位置している。



↑23号墓に副葬された阿彌陀如来座像（頭欠損）

(A). 陶磁器（第27図・第11表）

腕・六道銭・数珠の三点セットが、棺内^の副葬品として埋葬されたのに対し、ここで取り上げる陶磁器類は主として墓塚外、すなわち墓の盛土上において供献具として使用され、地表面で本来確認できる遺物であった。しかし相継ぐ土地整備工事など土木事業に伴って埋没ないし散乱して今回検出されたものと理解される。従って土葬墓に伴なうものとして登録された陶磁器は11点（21.6%）に過ぎない。しかも41号墓及びその南に接する場所に集中して6点、10号墓2点その他各1点という片寄った検出であった。それ以外は遺構（墓塚等）に伴なわない出土であり、散乱状況であった。

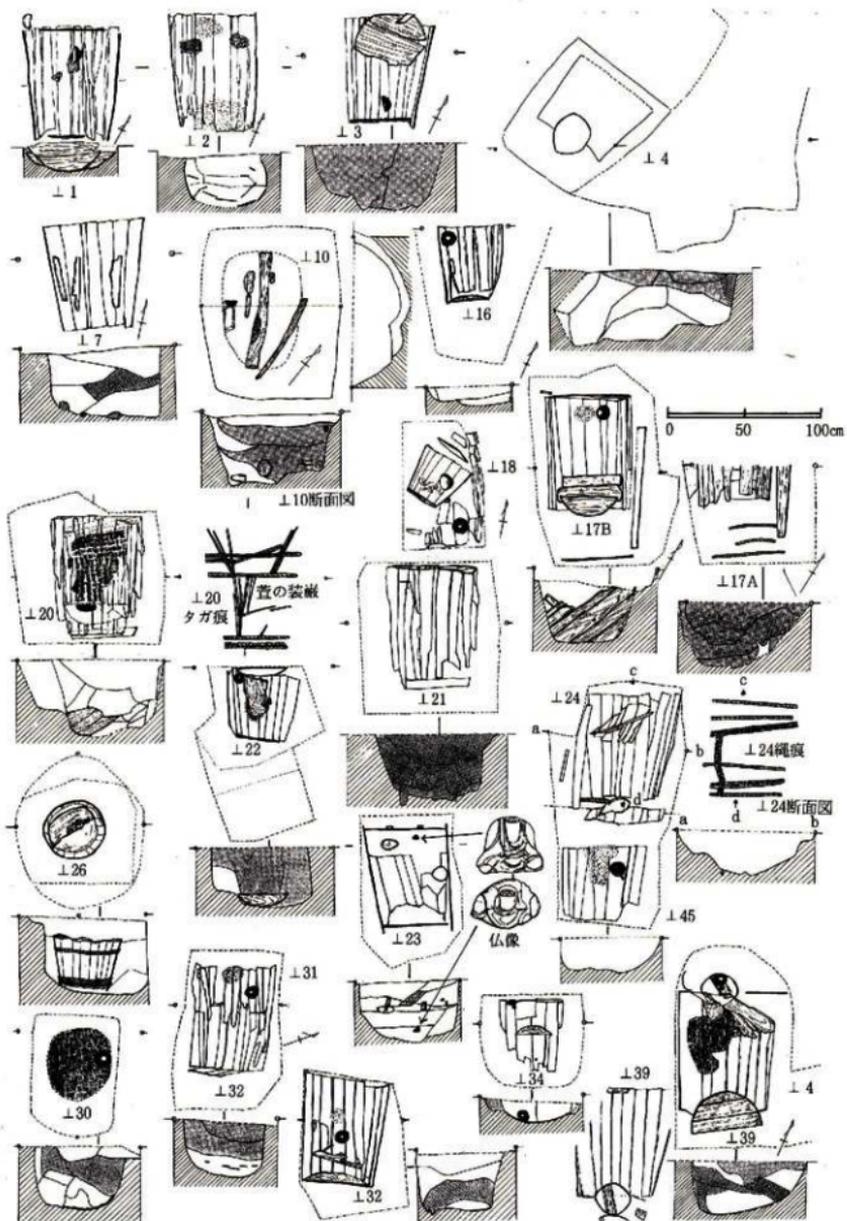
大半が飯茶碗であるが、皿（5～7）、徳利（長頸タイプ）と思われる（10・11・22～23）もの。線香立（48）やタンコロ（51）など墓前に対する供献具に限定されている。

(B). 木器・金属器（第28図、第12表）、木器及び木片の出土遺物は遺構内、遺構外合わせて大量に検出したが、土葬墓に関連すると思われる遺物について報告する。木器で図化したものは曲物ないし小型桶の蓋ないし鏡板を10件あげた。しかし、明らかに土葬墓内から検出されたのは12（↑41）、14（↑39）、39（↑63）の3件である。遺構外から相当数にのぼる桶子（大小）が検出されているので、この蓋ないし鏡板に組込まれる遺物であったものと思われる。

12は41号墓、茶碗を6点も検出した土葬墓に伴った底め込み式の加工が確認される。そしてその形状（大きさ）は39（63号墓）と大概同一規模の容器であった。すなわち5寸5分から5寸8分前後の大きさである。このことは遺構外検出の3・8も同一規模の桶であったことが理解される。すなわち水汲用の小型手桶に該当する大きさになる。次に4～7及び16は、最小が2寸3分、最大が3寸の小な底板である。一応柄杓の底板を考慮したい。葬祭ないし、盆・彼岸などにおける水杓の遺物であろう。ただし5・6の痕跡は板中央部にみられる三角形ないし、円形の穴の存在は観察表で記述した如く、提灯の底板とみるべきか。

14（39号墓の副葬品）は曲物の鏡板で、中央に穴がみられるように縫合して修復利用していることが分かる。形態は楕円形で、地元ではメンジウと呼称する「曲げワッパ」である。死者に対して愛用していたものか、ご馳走を副葬したものであろう。37（17号墓副葬品）は長さ2センチを測る大きな柿の種である。1・2は各々先端部と手元部が折れた箸である。おそらく墓前供養に供せられたものであったと思われる。9～11、13は膳の部材と思われる。墓前供献具ないし、葬祭後小川ないし沼沢地形であったB区へ遺棄（水に納める行為）された遺物であったかも知れない。

15（B区G1グリット検出）は鳥形の遺物で、^{タカ}籠（棺）蓋の四隅に装嵌される祭祀具である。死者の魂を「いち早く彼岸に届けてくれる」ものだともいう。普通火葬ならば燃してしまうもの、土葬の場合でも他の



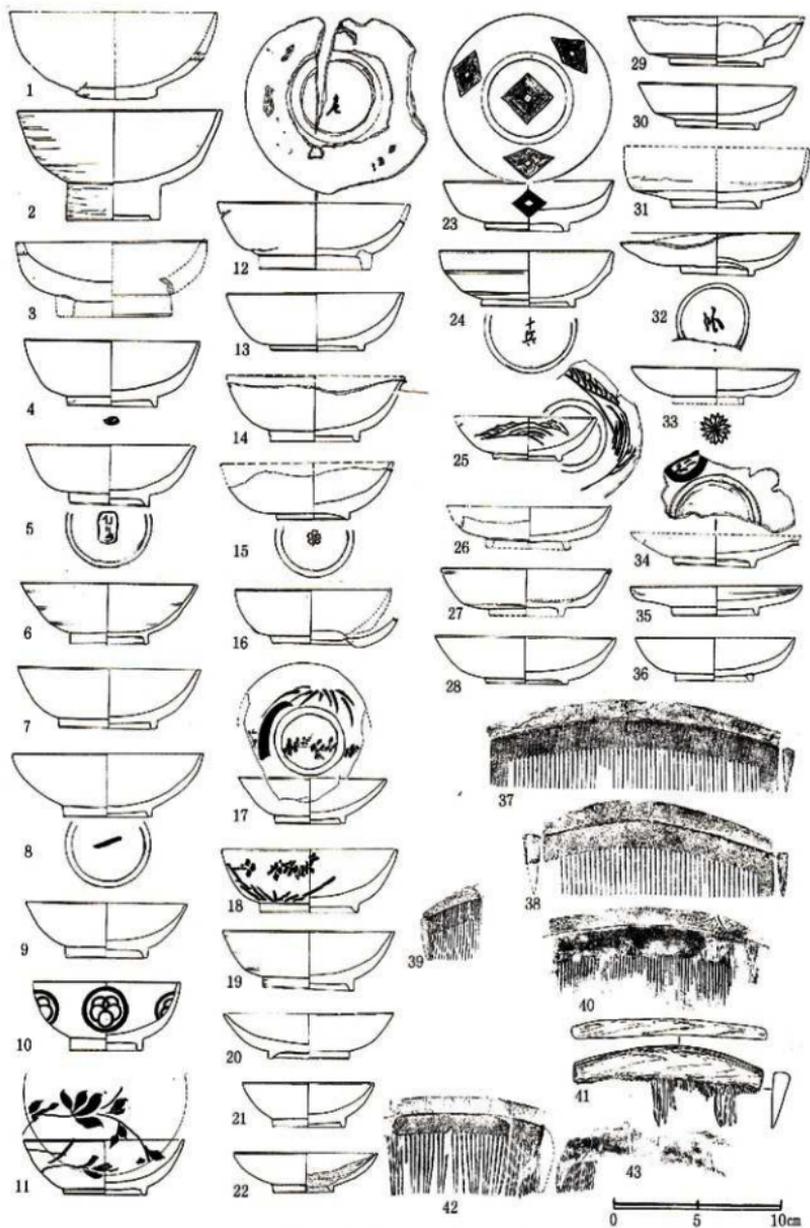
第24圖 土葬墓平面・断面図(1)



第25图 土葬墓平面~断面图(2)

第10表 副製品 漆器・櫛の観察表 (第26図)

No	出土地点	法 尺			副産特色	技法 その他特色	備 考
		口徑cm	耐高cm	底径cm			
1	D区D7	推12.3	推5.2	4.7	腰丸椀、平坐台	内黒地、外面割漆、高台部底面に朱色残	中世前期 残存3分1
2	上43	12.3	6.5	5.7	腰丸椀、高い高台	内外共に朱塗り、山笠痕跡(16C末~16C)	24の外側二重扉彫痕
3	D区A9	11.5	残3.5	底径7.0	腰丸椀、高台欠損跡	内外共に朱塗り、平椀	器厚1.3cm 残存3分1
4	上56	10.5	3.9	5.3	腰丸椀、高台断面三角形	内外共に黒塗り、高台内「」か「一」か	小豆色朱で印あり
5	上30	10.1	3.5	4.8	腰丸椀、高台断面三角形	内外共に朱塗り、高台内黒塗	高台内欠傷「左衛門」
6	上1	10.5	3.6	4.6	腰丸椀、高目の高台薄手	内外共に朱塗り、口縁部黒塗り	
7	上61A	10.6	3.5	5.7	腰丸椀	内外共に朱塗り	
8	上50	11.3	3.7	5.2	腰丸椀、高台低位	内外共に朱塗り、高台内に「」字あり	「一」字は所有者印か
9	上59	9.8	3.2	4.9	腰丸椀、高目の高台	内外共に朱塗り、高台内のみ黒塗り	
10	上66	8.8	4.0	4.4	腰丸椀、高目の高台	内朱外黒塗り、丸に萬の三ツ紋系	17C後半~末の作出
11	上65	9.6	3.1	5.0	腰丸椀、口縁部薄手	内朱外黒塗り、草草紋、高台が目立たない	18C後半の作出
12	上64	推11.5	推4.0	推6.8	腰丸椀、高台欠損	内外共に朱塗り、割れ・欠損大	高台内「庄」字or「塚」字
13	上46	10.6	3.5	5.5	腰丸椀、低高台	内外共に朱塗り	
14	上32	10.6	3.5	5.3	腰丸椀	内朱外黒塗り	口縁部割れ
15	上18中	10.5	3.3	4.3	腰丸椀	内朱外黒塗り、高台内に金粉桜花紋	小形破損に納められた椀
16	上31	10.3	2.5	4.5	一文字腰椀、平高台	内朱共に朱塗り、木地は黄食し漆跡のみ	
17	上67	8.8	推2.7	推4.2	腰丸椀、高台欠損	内朱外黒塗り、高台内裏、外面に竹輪跡	19C前半
18	上68	10.5	3.7	5.9	腰丸椀、低高台	内外共に小豆色朱塗り	
19	上54	10.4	3.5	5.4	腰丸椀、高目の高台	内外共に朱塗り	
20	上41	10.2	2.6	推5.0	腰丸椀	内外共に黒塗り	残存3分2
21	上21	7.9	2.6	4.4	腰丸椀、低高台	内朱外黒塗り	
22	上62B	8.6	2.5	3.6	腰丸椀、蓋	内外共に朱塗り	古部に裏付物の2重底保存見残
23	上67	10.1	推3.0	推5.0	腰丸椀、高台欠損	内朱外黒塗り、高台内に三ツ紋(釘板紋)	腰椀系平椀18C前半
24	上43	10.4	3.2	5.6	一文字腰椀蓋	内外共に朱塗り、高台内黒塗で「十長」文字あり	2. 大椀の内側に重ねて割漆
25	上55	8.2	2.5	4.2	腰丸椀	内朱外黒塗り、全面に桜輪紋縁線紋	19C前半
26	上17	推9.8	推2.5	推5.0	腰丸椀、腰張系	内外共に黒塗り、高台欠損	
27	上18外	10.2	推2.9	推4.5	一文字腰椀、低高台?	内外共に朱塗り、割れ高台欠損	
28	上16	11.0	2.7	4.9	腰丸椀、低高台	内外共に朱塗り、身は厚手、半椀	
29	上3	10.6	3.0	5.6	一文字腰椀、高台より高い	内外共に黒塗り、平椀	口縁部割れ欠損
30	上69	9.5	2.6	4.9	一文字腰椀、高い腰張	内外共に黒塗り、内面補修塗り直し	17C後半
31	上24	最大径10.3	残1.5	5.2	一文字腰椀、腰張平椀	内外共に黒塗り、横上半部分欠失	
32	上61	9.8	2.5	4.4	腰丸椀蓋、割れ変形	内外共に朱塗り、高台内に「弥」字が地塗手書	
33	上60C	10.1	推2.1	推5.4	腰丸椀蓋、高台欠損	内外共に朱塗り、高台内菊花紋 黒線描	17C後半
34	上20	推10.0	推1.8	5.0	腰丸椀蓋	内朱外黒塗り、家紋か小豆色朱書	破損残存3分1
35	B区A7	10.3	1.7	5.2	平椀蓋	内外共に朱塗り	二つ割れ、縁欠け
36	上39	9.5	2.5	推4.6	腰丸椀、高台欠損	内外共に朱塗り	
37	上69	長17.0	幅4.5	厚み1.2	上高長方形(利久型)	横櫛、長さ5寸6分の横櫛	素材ツケ
38	上56	残13.8	4.8	1.0	上高長方形(利久型)	横櫛、長さ5寸の横櫛	素材ツケ
39	B区D4	残3.5	3.5	1.0	上高長方形(利久型)	横櫛、残存一部分のみ	
40	上60B	残11.7	4.8	1.2	上高長方形(利久型)	横櫛、残長3寸8分横櫛	腐食して全体形不明瞭
41	上20	残11.0	5.0	1.0	上高長方形(利久型)	横櫛、残長3寸8分横櫛	腐食して全体形不明瞭
42	上59	残9.2	4.7	1.0	上高長方形(利久型)	横櫛、残存2分1寸か	
43	上50	残10.0	3.0	1.0	上高長方形(利久型)	横櫛、腐食して原形維持不確に近い	



第26圖 墓域内その他出土漆器・櫛

第11表 陶磁器観察表

No	出土地点	法 量			特 色	No	出土地点	法 量			特 色
		口径cm	器高cm	底径cm				口径cm	器高cm	底径cm	
1	.41	11.0	6.0	5.5	赤ダマリにも花紋1つ、肥田18C後 口縁内側、高台上より部位焼痕	27	B区D3	?	径4.0	?	縁染付、履反タイプ
2	.41	12.1	6.5	5.1		28	C区F9	?	径4.8	?	平花紋
3	.41	10.8	6.3	4.5	横筋2条線文、内口縁、立上り2条線	29	B区Z5	?	径2.5	?	縁染付
4	縁式	径 11.0	径4.5	?	3と同品、履反タイプ	30	D区E7	最大7.2	径3.0	3.8	底部のみ厚み入
5	.10	9.2	2.7	4.2	口縁内・立上り各3条線	31	.28	最大10.1	径1.5	6.2	底か
6	A区E5	最大6.0	径3.1	4.5	底中央青緑色地、胴20条線	32	A区A3	最大10.6	径3.0	4.5	古緑色地
7	D区E7	最大6.5	径3.4	4.5	茶褐色緑色地、底部のみ	33	A区D1	最大9.8	径3.8	4.7	濃藍色化文帯付
8	A区E6	最大6.1	径2.0	4.3	両台内、藍色地文、内外灰白色	34	D区F4	最大8.5	径1.9	4.7	赤褐色地割
9	A区C5	最大7.2	径1.5	3.5	茶褐色、粘土	35	D区E10	最大4.3	径2.3	4.7	底部のみ
10	C区F1	最大8.0	径2.5	5.3	赤褐色、灰文模	36	B区B6	最大8.5	径2.0	4.8	彫琢断端目積位
11	B区D3	最大9.5	径2.2	5.8	暗茶褐色、内壁暗緑色	37	.14	径 11.5	径3.7	?	
12	.41	12.0	6.0	4.7	二条線、縁子模様赤濁内 肥田18C	38	D区G4	?	径3.0	?	赤褐色地、腹口縁
13	C区G9	10.7	5.8	4.3	二条線、縁子模様 肥田18C	39	C区B8	?	径5.8	?	黄緑地、蓋か
14	.41	9.5	5.5	3.6	文様彫刻した横線立上り条線 肥田	40	?	最大6.0	径2.7	4.9	3・4に同じ文様か?
15	C区F7	6.9	5.3	3.6	菊太線、細波線の渦巻赤濁 肥田	41	B区A2	最大9.5	径7.5	4.8	アノシ給染付
16	B区湖池辺	最大7.8	径3.5	4.0	朝雲花松線、内外1条線	42	C区G9	最大8.5	径3.8	3.8	大蓋か
17	C区F17	最大7.5	径3.5	3.8	灰白色土、無文	43	縁式T	?	径5.0	?	縁染付、折枝梅、菊切爪、履反タイプ
18	C区G9	最大9.8	径4.0	3.8	灰白共曇灰緑地片	44	B区D2	?	径3.2	?	底
19	D区D5	最大8.7	径3.0	3.7	灰白・厚子	45	A区E6	?	径3.0	?	縁染付
20	.10	最大10.5	径3.5	4.7	縁染付	46	A区E3	最大8.2	径2.6	5.3	縁染付
21	.46	最大9.8	径2.8	5.3	内外共にど模様	47	A区E6	最大8.9	径3.0	5.0	高瀬小蓋状、腰蓋角
22	C区C11	最大12.8	径5.0	8.5	長条底底面内壁黒褐色	48	C区G9	最大10.5	径4.6	8.0	両方灰色灰黒～緑青土
23	B区D5	最大13.4	径4.5	7.8	厚子、并直底割	49	B区C8	?	径4.0	?	内外共に赤褐色特種口縁
24	D区D8	?	径3.2	9.0	横線立上り部位、茶褐色	50	B区D4	?	径3.3	?	内外共に赤褐色特種位線形線文
25	C区G8	11.0	6.1	4.4	花線模	51	C区	?	径3.5	4.2	白紙めめ地、タンコロ(ヒョウソク) 抽出欠損
26	.41	径 9.6	径4.6	?	竹葉藍色染付						

飾りものや旗などと共に焼き棄るものがあるが、水場と思われるB区で検出されたのは、膳・手桶などと共に「水に納める」ものであったのだろうか。極めて貴重な出土品である。胴部に丸い小孔のあるのは、吊して飾るのが他にあったと考えられる。

18は金製甕で、耳掻き部は欠損しているが鶴亀を線刻したものである。江戸時代享保期(1716～)以降に流行したものとされている。

19～22、30はキセルの雁首部である。火皿が欠損している21・22、は19・20と共に横割合せであるのに対し、30は羅字部が六角形を呈し、鋳造式である。タイプとして19が古く、20・22がこれに次ぎ、21は18世紀末と思われる。19は東京大学本郷構内地点出土例に従えばⅡ期(17世紀後半期)4類に比定されるものと思われる。23～29・31～33はキセルの吸口部であり、大小さまざまなタイプが検出された。銅製横割合せ式と真鍮製の鋳造式の二種、大長と小細の二種に分けられる。古いタイプの24・26・28などは17世紀末のものと思われる。なお29・32などは小型のキセルであり、女物と思われる。24・27には羅字の残存部が確認され、25には金の刻印がある。甕が女性の副葬品であるのに対し、キセルは主として男性の副葬品であることは現在でも習俗として伝承されてきた事象であるが、土葬墓に伴って検出されたものが1点もない。

34は角釘であるが、棺桶に釘が確認されていないため、その意味する所は不明である。35(10号墓)は曲尺を切断したもので、2寸1分の長さである。大工さんであった人への副葬品であったのだろうか。モノサシの意味で把握すると、子供の死後に学問の出来る子への再生を願ったものかも知れない。

36は厚刃で大変使い込まれた鎌である。目釘部が彎状に曲げられたタイプは、昭和10年代(20世紀前半まで)にもみられたが、副葬品であるかどうかは不明である。土葬墓の盛土上で呪術的な意味(魔物除け)の

葬具の可能性も考慮される。38(21号墓副葬の六道銭)は寛永通宝6枚の腐食して固着したものである。銭貨図・表は後に述べるが、1件だけここに上げた。なお凶化されていないがC-A10グリッドから銅製の指抜きが検出された女性埋葬墓の副葬品であろう。(φ1.8 幅1.1 厚0.1cm)

C). 砥石・硯・播鉢(第29図、第13表)、砥石は1~14・19~21の17点である。荒砥は砂岩質の石材であるが、仕上げ砥は泥岩、粘板岩製であり、淡海川産出の凝灰岩も確認される。2・3・14は木製の砥石台に嵌め込みにして刃物を研ぐ用具として使われる。この種の砥石は一般家庭でも所持しているものである。

15は石盤(大正時代まで使用された石製ノート)であろうか。16~18は硯の破片である。特に16は作りも石材も古いタイプの民間所有の硯である。

22~37は播鉢の破片であるが、江戸期に比定出来るものは35(出土地点不詳)の1点のみで、他は19世紀後半~末期のものであろう。しかも土葬墓に伴って検出されたものは27(14号墓)、34(6号墓)の2点である。しかし、これもいわゆる棺内の副葬品ではない。

第28・29図で取り上げた遺物の大半が土葬墓内副葬品以外のもの、特に遺構外検出の遺物が圧倒的に多い。単に塵捨場と理解するには砥石・播鉢・桶類、ひいては簪やキセルなど数量的にも特殊性を意味するものと思われる。従って土葬墓及び送葬儀礼に関連した遺物と考えるのが妥当である。

第12表 木器・金属器観察表

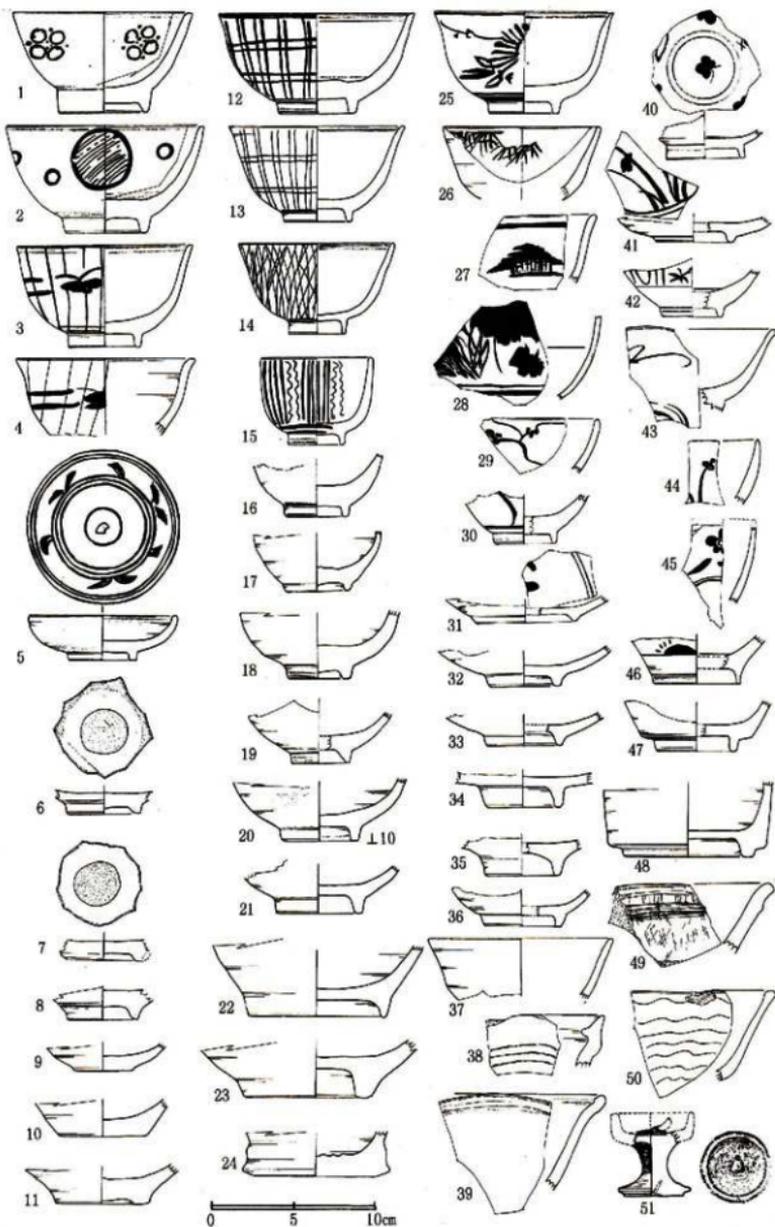
No.	出土地点	品 数 cm			特 色	No.	出土地点	法 量 cm			特 色
		長さ	幅	厚さ				長さ	幅	厚さ	
1	B区D3	残11.5	0.7	0.7	南天材の箸、先端欠損、女性用か	22	D区G5	残4.3	1.0	磨面	割製火皿欠欠、儀用合せ
2	A区B1	残1.3	0.6	0.5	南天材の箸、手元部分欠損、黒色化	23	D区Z9	6.8	0.8	円筒	銅製儀用合せ、吸口部薄層削身
3	D区F9	残8.0	残5.0	1.0	スギ材竹釘跡、メソジュウの跡か残4分1	24	A区C6	8.7	1.1	円筒	銅製儀用合せ、吸口部タテ穴状
4	A区A6	8.8	2.4	0.8	スギ材円形筒縁制御り残2分1	25	B区E2	8.0	1.2	円筒	高脚型か、金割印
5	C区D10	7.6	残3.7	0.4	スギ材釘頭の板、輪縁、中央破損残2分1	26	D区F7	9.6	1.1	円筒	高脚型、長い吸口
6	D区B7	7.7	残3.0	0.5	スギ材釘頭の板、ゆへ溝円形残2分1						
7	B区E3	8.2	残3.2	0.4	スギ材釘頭の板か	27	C区E4	6.2	1.2	吸口0.8	真鍮製、ウオ残跡あり
8	D区D10	残16.3	残A.0	1.0	スギ材メソジュウ(曲物)の縁残残2分1	28	D区A7	6.6	1.0	円筒	銅製、儀用合せ、扉内溝深く付着
9	A区A3	8.4	残3.8	0.5	スギ材一部取り離れ穴裏面か	29	B区D2	3.4	0.72	ウオ部切附か	銅製、儀用合せ、小型女性物か
10	B区A5	13.6	1.5	0.8	スギ材障子付材か	30	?	5.5	1.2	銅六角	火皿1.0、脚盤造り、火皿度合か、V-6 1740~50
11	A区E2	残7.2	1.8	0.5	スギ材、竹釘跡造り、障子品か	31	B区G2	5.2	磨れ平1.6		銅製、儀用合せ、一枚に磨れ、19C中葉
12	A区D2	残16.9	残3.7	1.0	榎材木口箱ガキ式1.0がみり輪の裏面						
13	A区D3	10.6	残3.5	0.5	スギ材表裏、裏面塗層部品か						
14	上層	20.0	8.2	0.5	メソジュウ(ワッパ・虫地)の扉縁結合してある。						
15	B区G1	13.2	3.0	0.4	スギ材小楕圓天蓋端部の凸形	32	B区D2	5.2	0.8	吸口0.2	銅製、儀用合せ、小型女性物か
16	A区A3	8.7	8.5	0.9	スギ材小楕圓端部縁メソ取り	33	B区D6	残5.2	1.1	円筒	鉄に銀メッキ、両面鏡面2重ウオ付結
17	上層上	56.0	2.0	0.5	杉材刀形銅製品	34	B区F1	5.8	0.5	0.4	真鍮製銅長方形
18	D区E9	18.6	2.2	0.15	金製飾りには龍と亀の毛彫がみられる。耳縁欠損	35	上層	6.3	0.42	0.15	鍍金銅製品、真鍮製血尺片
19	A区D5	6.1	1.9	火皿1.3	銅製、儀用合せ、火皿が入りウオ残跡あり、17C中葉~	36	B区A5	残10.6	刀部3.5	柄部0.2	銅製長さ5.0、目釘用鍍金型切挿
20	B区G1	5.0	1.0	火皿1.2	高脚型、儀用合せ式両面儀用合せ	37	上層	2.0	0.8	0.5	銅製銅製品縁の種
21	C区B11	残3.6	1.2	厚0.1	銅製火皿欠欠、儀用合せ	38	上層	3.0	2.5	1.0	寛永通宝6枚腐食接合状況
						39	上層	16.3	16.8	0.8	スギ材扁舟曲物(メソジュウ)の縁板

第13表 砥石・硯・摺鉢観察表

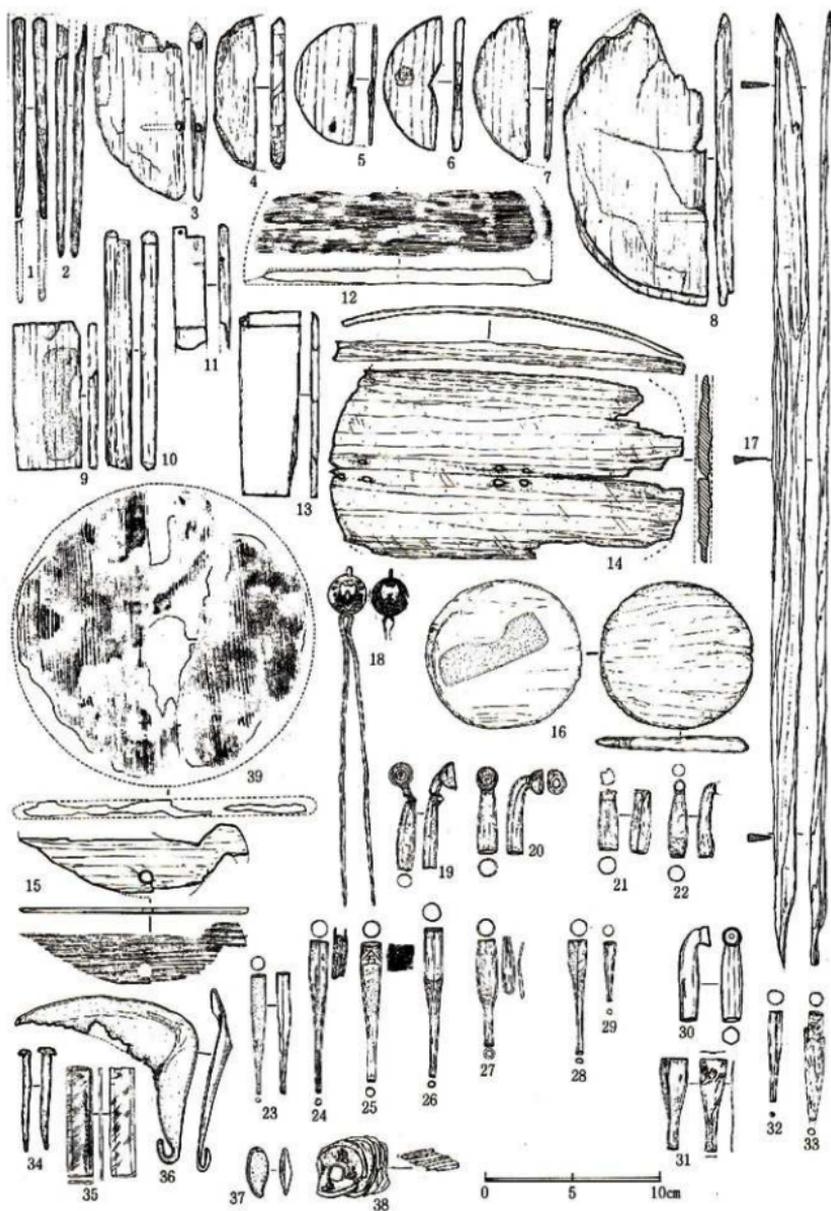
No	出土地点	法 量 cm			特 色	No	出土地点	法 量 cm			特 色
		長さ	幅	厚さ				長さ	幅	厚さ	
1	B区D4	13.0	3.1	2.7	薄い朱白色、仕上げ、使用磨耗、切山磨痕	23	D区G12	残高 5.0	5.0	断面 0.8	灰褐色、摺鉢
2	C区G9	残10.9	5.3	3.8	高褐色仕上げ砥石2分1、人工磨砥切出磨痕						
3	D区G11	残10.4	5.9	1.0	細灰色仕上げ砥石2分1、裏面凹磨痕	23	B区E5	残高 6.2	4.5	断面 0.5	高褐色、摺鉢
4	A区E4	残 9.1	2.8	1.6	暗灰色仕上げ砥石プロテクト鋼鉄両端欠損						
5	C区E10	残 7.5	2.2	0.8	暗灰色黄鉄(細砂鉄)、使い込まれた砥	24	B区F11	残高 4.5	5.0	0.9	暗茶褐色、摺鉢
6	C区C11	残 6.0	4.2	3.6	青灰色仕上げ砥折損、帯形磨痕						
7	C区G8	残 4.5	3.8	2.0	灰白色仕上げ、折損、切山ノミ、切山磨痕	25	B区D5	残 3.0	4.0	1.0	高褐色、摺鉢断面
8	J61C	残 4.8	3.8	1.8	暗灰色中砥、両端欠損	26	A区A1	残 5.9	4.5	1.0	黄褐色、摺鉢断面
9	D区G10	残 4.5	3.0	1.6	朱白色黄鉄砥3分1、片減使用痕	27	J14	残 8.5	8.5	0.9	摺鉢口縁部
10	C区D7	残 6.4	2.5	2.3	朱白色仕上げ、磨耗、折損	28	A区A3	残 4.0	4.5	0.9	黄褐色、摺鉢、縁目細い
11	D区B7	残 4.5	2.7	2.0	黄白色仕上げ、両端折損	29	B区A6	残 4.2	3.0	0.6	灰褐色、摺鉢、縁目細い
12	A区A6	残 4.5	残3.7	?	小豆色仕上げ砥、硯の一端角が残存	30	C区F9	残 4.5	2.5	0.6	灰褐色、摺鉢、小型
13	無録22丁	残 4.3	5.0	3.0	黄白色仕上げ、残小片	31	地点不詳	残 3.2	4.0	0.7	紅褐色、摺鉢、枕立上り部
14	C区F10	残 3.4	3.8	0.5	茶褐色仕上げ、整形フェラゲ	32	B区B6	残 3.3	5.0	0.7	黄褐色、摺鉢、外側削毛月状
15	C区F9	5.1	4.5	0.4	黒色黄鉄両端磨損、端部切磨痕、石硯ノミ	33	地点不詳	残 5.0	7.0	0.9	摺鉢口縁部深不明
16	A区E2	4.3	2.0	2.0	緑色をまじった青灰色粘板岩砥石破片	34	- 6	残 6.0	14.0	0.7	摺鉢口縁部、目目1深
17	D区B7	5.2	2.1	1.1	無録J6断面厚1.0の砥石破片	35	地点不詳	最大径 18.0	残高 4.0	断面径 11.0	黄褐色摺鉢底面赤切り技法、小型磨 貝肌
18	A区C6	残 1.9	1.8	1.0	黒色泥色、硯の破片小、磨片痕、ノミ磨あり手作						
19	C区E12	残 5.0	1.9	1.3	砂岩、黄鉄多量、折損、磨耗小片	36	C区G3	最大径 5.0	残高 5.0	断面径 16.0	黄灰色摺鉢底面大型
20	A区F6	残 3.3	1.3	1.1	暗灰色中砥両端折損、整形磨痕						
21	B区G5	残 4.2	1.9	1.8	灰白色中砥、折損、整形ノミ痕	37	B区R1	最大径 14.2	残高 2.0	断面径 11.6	黄褐色砂粒質、摺鉢底面小型



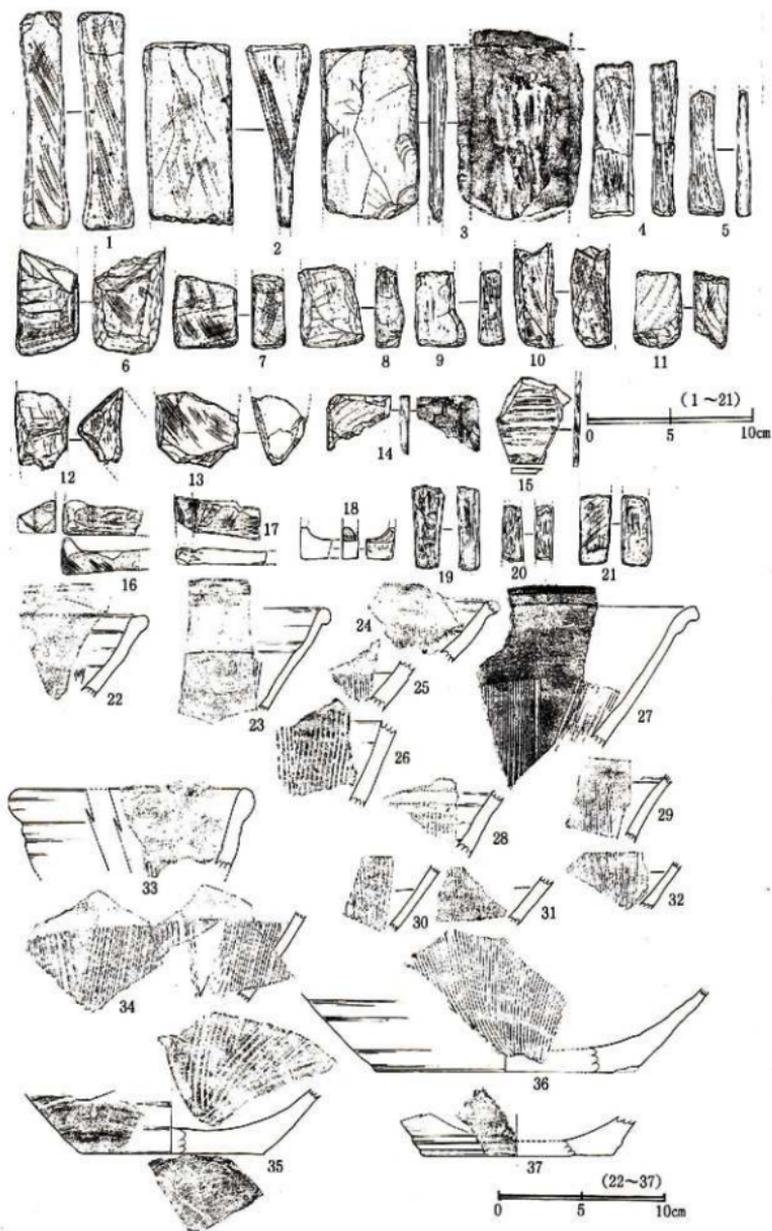
39号墓検出のメンジュウ



第27圖 墓壙內及匕遺構外出土陶磁器類大圖



第28圖 土葬墓副葬品等木器・金属器その他実測図



第29圖 砥石・硯・描鉢実測図

D. 土人形 (第30図)、23号墓の副葬品に人形らしい「豊」字らしい刻印のある阿弥陀如来座像 (首欠損) については先述したが、遺構外ではあるが墓域に近接して検出された馬と人面の2件がある。

馬 (C区A9) (残長4.9、高さ3.4、幅2.5cm) の土製品は尻部、前脚前部から首を欠失している。鞍部中央に径0.3、深さ1.5cmの小孔があり、騎乗者・物があったものと思われる。アブミは大きく皮鞍の感じである。胎土は赤褐色で砂質性でやや粗い。焼成は堅い。製作技法は型抜き作法と思われる。

人面 (C区A11) (長さ2.7、幅2.5、厚さ1.4cm) 土製品は、黄褐色胎土に石英粒、黒雲母が含まれた精土、焼成はやや甘い。顔面だけの土人形は大人振った顔つきで、伏目がちで瞑想状にみられる。型押し作出によるものと思われる。裏面の窪みは人差指の押圧痕が二度にわたって押し込んでいることが観察される。

人形が副葬品として使用されたものと理解される。呪術的、信仰的な意味よりも玩具としての意味と思われる。人面土人形は着せ付人形の面であろうか、江戸期の面模・芥子面・面打などは異なるものと思う。いずれにしても18世紀前～中葉期頃の遺物と思われる。



第30図 土人形 (馬・人面)

E. 数珠。土葬墓に副葬された木製数珠の検出件数は11件 (±3 (28顆)・±17B (93顆)・±31 (10顆余)・±40 (11顆)・±41 (76顆)・±45 (13顆)・±46 (43顆)・±59 (46顆水晶青玉・ガラス玉あり)・±60B (4顆)・±62 (141顆・紐検出)・±66 (51顆) 号墓) 13.9%、516点余顆を検出した。

62号墓は最多の141顆を採集し、二連の房を付けた糸の一部が検出された。59号墓は46顆の検出であったがガラス玉6顆 (内1顆は空色、1顆は兩垂れ型、さらに1顆は靱玉 (径1cm) で中央に小孔を穿ち、佛像を内蔵したものと思われるが損失している。なお45号墓の数珠には緑色ガラス玉 (径0.5cm) が検出された。

数珠の素材は木製品である。樹種の同定はできないが、径0.7~1.0cm、厚み0.5cm前後を測る。木質の輪伐り材の柁目を縦遣いしているため、出土した数珠玉は乾燥と共に割れてしまう危険性があった。そのため点数を考慮しながらも一括品として保存処理を依頼した。

数珠は「念珠」とも称されるが、佛・菩薩を礼拝し、念誦の記数に用いられる法具であり、教本によっても各説がみられるが108の木種子 (ムクロジの実) を貫ねて念誦の記数に使用する法具だとする。従って108顆、または54 (108の2分1)・27 (108の4分1)・14顆の数種がある。素材には鉄・赤銅・真珠・珊瑚・木種子・蓮子・因陀囉法叉・烏嚩嚩囉法叉・水精・菩提子などがあるという。

小国谷では、5ヶ寺のうちどこかの寺の坊さんが受成の時に数珠を買ってきたといい、また普光寺参詣のお土産物が数珠（白木の数珠）であったという。しかし、木彫のものは減多になく、梅の実のものが多かった（中橋権次談）という。しかし検出された数珠玉は小粒で木彫品である。被葬者の合掌した手に掛けて埋葬したとされる小粒の数珠は埋葬用のもので、念珠としては記数に不便である。坊さんは「水晶、ガラスの数珠は使うな、土に還らないから」と諭したという。

(F). 六道銭 副葬品の六道銭は土葬墓（60基中）36件（60%）186枚、遺構外18件25枚を検出した。36件中6枚を副葬したものは23件であり、他の場合も6枚宛が副葬されたものと思われる。確認できた銭種別では、寛文四文銭（1769年初鋳造）、1枚、文久永寶（宝）銭（1863年初鋳造）3枚、なお鉄寛永銭は元文4年（1739）以降の鋳造である。明治10年（1877）一銭銅貨1枚、明治16年（1883）半銭1枚、他はすべて寛永通寶（古寛永29枚、他新寛永通寶）であった。民俗学的慣習としては「穴開き銭」と称して昭和時代でも六道銭や上棟式の撒銭（カラコ撒き）に使われてきた事実からすると、土葬墓の時代判断の資料にはむづかしい。

明治10年・16年の銅貨が2件、39号墓と遺構外で検出されている。従ってこの場合の39号墓は、明治16年以降の土葬墓であることが判明した。六道銭とお椀の副葬割合が多いことに特徴がみられる。

第14表 土葬墓副葬銭他グリット出土銭貨一覧表

No	出土地点	枚数	特 徴	No	出土地点	枚数	特 徴
1	-3	1	新3	29	±62	6	新6（背文、元2）
2	-13	2	焼けてガラスで2枚塊拓影1枚	30	-63A	6	新6
3	-16	6	古1、新3、不明2（割れ）	31	-63B	6	古2、新4（背文、文1、佐1）
4	±17A	5	古1、新1、不明2、1枚不剥離	32	±64	6	古2、新4
5	±18B	5	古2、新3（背文-）	33	±65	6	古1、新4、不明1（背文、足）
6	-20	6	古2、新4（背文、文1・元1）	34	±66	4	古1、新2、拓影不能1
7	-21	6	拓影なし（第20図参照）	35	±69	5	新4、寛永四文銭1（11歳）
8	-24	6	古1、新4、不明1	36	出土坑不明	2	新2
9	-31	6	塊状取上り腐食不明	37	A区F6	1	新1（背文、元）
10	-34	6	腐食塊状拓影・計測不能	38	B区B6	1	新1
11	-39	2	寛永銭1、明治16年（1883）半銭1枚	39	H区C6	1	新1
12	-41	6	新3（背文足）、文久永寶（1863）2、宝1（11歳）	40	B区D2	1	新1（背文、元）
13	-42	6	古1、新5	41	B区D6	1	新1（背文、元）
14	-44	6	新6（背文、文2）	42	H区F2	1	古1
15	-50	6	新5、不明1（背文、文1・足1）	43	B区F6	1	新1
16	-51	6	新2、不明4（鉄銭2枚）	44	B区G2	2	新2
17	±52A	6	古4（1636）、新2（背文、文2）	45	H区G3	1	新1
18	±52C	5	拓影なし	46	C区C9	1	明治10年（1877）一銭銅貨
19	±54	5	腐食塊り拓影不能	47	C区C10	2	新2（拓影跡で汚れ）
20	±55	6	古1、新4、割れ1（背文元）	48	C区D6	1	古1
21	±56	6	古3、新2、不明1	49	C区D7	1	新1
22	±57	6	新2、不明4（背文、文2）	50	C区E8	6	古1、新3（鉄銭2枚拓影不能）
23	±58	2	古1、不明1（割銭）	51	C区F7	1	新1
24	±59	6	古1、新5（背文、文2）	52	C区G10	1	古1
25	±60A	7	拓影なし	53	D区F1	1	新1
26	-60B	4	新3、不明1（背文、文）	54	D区Z7	1	古1
27	-61A	6	腐食拓影なし				
28	-61C	1	拓影なし				(注) 新……新寛永 古……古寛永

このことから浦田遺跡における土葬墓は、太郎丸新田野田ムラ成立（元禄5年村絵図にあり）の江戸中期以降の造営墓から、明治政府の墓地に関する政策（ハカヨセ）が行われた明治32、3年頃まで埋葬された墓地であったと思われる。



3号器

ϕ 2.34×0.12厚

16号

2.41×0.13

16号

2.50×0.14

16号

2.26×0.12

17号

2.43×1.10

17号

2.24×1.40

18号

2.24×1.40



13号

2.30×1.50



2.34×0.12



2.26×0.08



2.42×1.20



2.22×1.40



2.28×1.20



2.34×1.20



18号

2.33×1.10 (-)



2.54×0.12 (X)



2.42×0.14



2.24×0.10



2.34×0.10



2.43×0.10



2.43×0.10



18号

2.34×1.00



20号

2.48×0.12



20号

2.25×0.12



20号

2.16×0.12 (元)



24号

2.43×0.12



24号

2.36×0.10



31号

2.40×0.12

第31圖 出土錢貨 (土葬墓副葬品・他) (I)

出土錢貨 (土葬墓副葬品・他) (2)



51号

2.36×1.00

51号

2.25×0.10

51号

2.44×1.20

51号

2.44×1.20



51号A

2.52×0.12

52号A

2.48×0.12

52号A

2.48×0.12



52号

2.36×0.12

52号

2.31×1.20

52号

2.36×0.12



52号A

2.44×0.12

52号

2.48×0.14

52号

2.48×0.14



53号

2.55×0.13

57号

2.44×0.14

裏のみ

裏のみ

55号

2.30×0.10 (元)

55号

2.50×1.20

57号

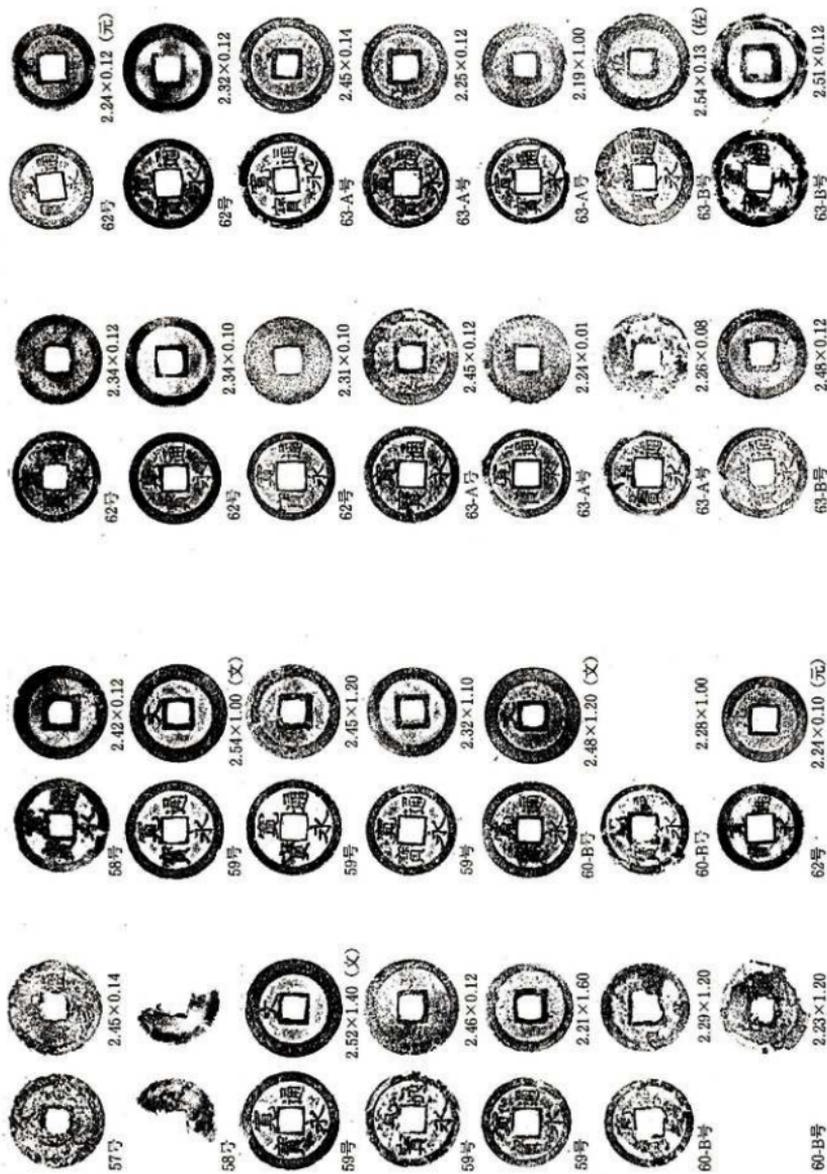
2.52×0.12 (元)

57号

2.52×0.12 (元)

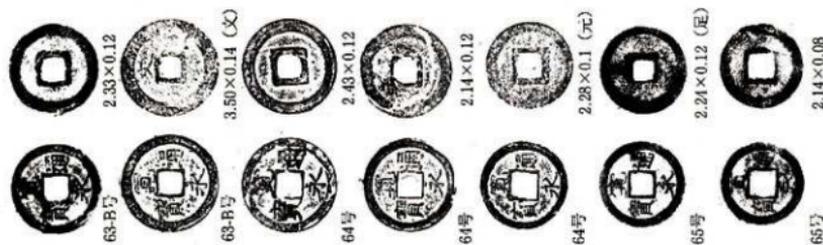
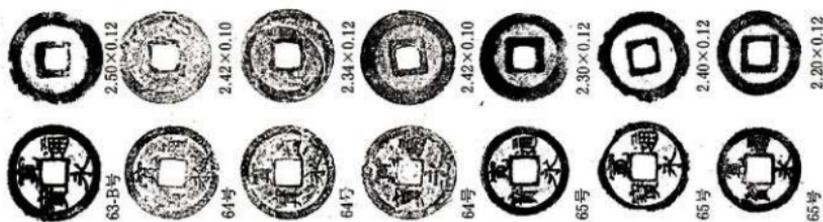
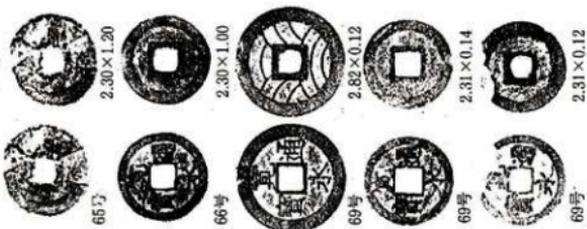
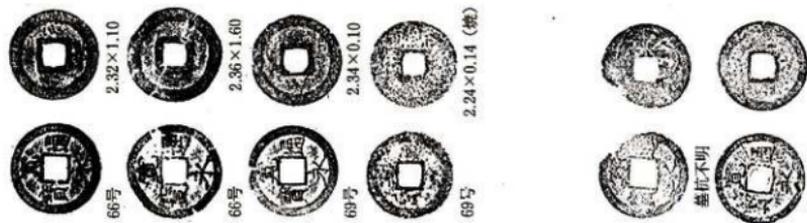
第31圖 山土銭貨 (土茅高岡所品・他) (5)

山土銭貨 (土茅高岡所品・他) (6)



出土钱币 (上举高铜铸品·他) (8)

第31图 出土钱币 (上举高铜铸品·他) (7)



出土钱货 (土葬墓铜铸品·他) (8)

第31图 出土钱货 (土葬墓铜铸品·他) (9)

4 出土遺物の科学的分析

※バリノ・サーヴェイ社に依頼した科学的分析資料は次の8件(10種)である。

1. 17A号墓 副葬品漆器碗の中の土分析(植物-供物-分析・同定)
2. 39号墓 桶棺中被葬者頭部に位置する乳白色物体の分析・同定
3. 43号墓 副葬品漆器碗の中の土分析(植物-供物-分析・同定)
4. 50号墓 2に同じ
5. 59号墓 (a). 2に同じ、(b)棺内の詰物の植物分析・同定
6. 61号墓 (a). 棺内の泥に白色紐状物質の分析・同定 (b). 副葬品植物種子の同定
7. 62号墓 副葬品植物種子同定
8. B区D5グリット出土の遺物の分析・同定

以上の科学的分析・同定をお願いした。以下その報告書を掲載する。

[1]. 遺物の自然科学的分析調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

浦田遺跡、現在は水田域であるが、明治23年の更正図では発掘調査区の南西隅は墓域であったことが判る。今回の発掘調査の結果、平安時代の掘立柱建物や須恵器・土師器などの遺物、明治～大正時代までの土葬墓、縄文時代晩期の土器や石器などが検出されている。今回は調査区南西隅で検出された明治～大正時代までの土葬墓から検出された種実や白色物質、植物の組織片などの種類を特定することにより、当時の埋葬の状況および供物に関する資料を得る。分析方法としては、種実に関しては種実同定、植物組織片に関しては灰像分析を実施する。乳白色物質に関しては、当初骨片の可能性を考えていたが、双眼実体鏡で観察した結果、繊維状の組織が絡み合っているのが認められ、植物質であることが確認された。そこで、本試料についてはX線回折分析を行う予定であったが、灰像分析に手法を変更した。

①試料

試料は合計10点である。試料の詳細ならびに分析手法に関しては結果とともに表1に示す。

②方法

(1). 灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離して単体となるが、組織片の状態で残留する場合もある。組織片の出現は、その母植物の葉や茎などがその場所に存在したことを示すものであり、燃料材や住居構築材を検討する際に有効な情報を提供する(例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993)。今回も、組織片の産状に着目する。

試料を肉眼観察したところ、5点とも分解が進んでいたことから、一部をカバーガラスに採取し、400倍の生物顕微鏡下で観察した。

(2). 種実同定

土壌に関しては、数%の水酸化ナトリウム水溶液を加えて放置し、土壌を泥化させた。そのあと篩に入れて水洗し、種実遺体を集めた。その他の試料と合わせて双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種

類を同定する。

(3). 結 果

同定結果を表1に示す。墓59号(試料番号5b)では2形態の植物遺体が見られたが、いずれも栽培植物のイネ属の葉部に形成されるイネ属短細胞列が認められる。一方、墓61号(試料番号6a)でも同様にイネ属短細胞列が認められる。他の3試料(試料番号2、4、5a)は、植物質であることは間違いないが、植物珪酸体は認められず、種類の特定は難しい。

一方種実に関しては、墓62号(試料番号7)がカキに、墓17A号(試料番号1)はイネ(粳)に同定された。他の試料に関しては、保存が悪く、種類の特定は困難であった。カキ(Diospyros kaki Thunb.)は種子が検出された。大きさは2cm程度。半月形で一端に「へそ」がある。種皮は堅くてやや厚く、表面はざらつく。イネ(Oryza sativa L.)は穎が検出された。大きさは7mm程度で、楕円形、褐色で柔らかい。表面には微細な突起が配列する。

表1 自然科学分析結果

試料番号	試料名	試料の質	分析手法	同定結果	備 考
1	墓17A号	土壌	種実同定(水洗選別)	イネ(穎)	土壌表面に粉が付着
2	墓39号	乳白色物質	灰像分析	不明植物片	植物繊維質
3	墓43号	土壌	種実同定(水洗選別)	不能	
4	墓50号	乳白色物質	灰像分析	不明植物片	植物繊維質
5a	墓59号	乳白色物質	灰像分析	不明植物片	植物繊維質
5b	墓59号	葉状物質	灰像分析	イネ	葉状組織片
6a	墓61号	植物組織片	灰像分析	イネ	葉状組織片
6b	墓61号	種実	種実同定	カキ	
7	墓62号	種実	種実同定	不能	
8	B-D5グリッド出土物	種実	種実同定	不能	

(4). 考 察

検出された種実(イネ・カキ)は、いずれも栽培植物であり、供物として土葬の際に埋納されたものと考えられる。なお、栽培植物の供物の事例として東京都法光寺跡の近世以降の墓でトウガンやメロン類などが検出されている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1995)。

墓59号内の植物体はイネに同定されたことから、詰め物として稲葉が利用されたと思われる。また、墓61号の植物遺体も稲葉であったと思われる。特に墓61号から検出された白色の細い紐状の植物遺体は、稲属の葉部が細く撚り合わせたようになっており、藁縄の一部と考えられる。

なお、墓39号、墓59号、墓61号から検出された物質は、植物繊維が認められることから、何らかの植物の一部であることは明らかであるが、種類の特定は難しい。

引用文献

バリノ・サーヴェイ株式会社(1993)自然科学分析からみた人々の生活(1)。慶應義塾藤沢校

地理域文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p347-370, 慶應義塾。

バリノ・サーヴェイ株式会社(1995)新宿区法光寺跡種子同定。「東京都新宿区 法光寺跡-N T T電話線地下埋蔵工事荒木線No.3マンホール改修工事に伴う緊急発掘調査報告書」, P.11, 日本電信電話株式会社・新宿区法光寺調査団。

奈土葬墓(56・64号墓)から検出された被葬者の歯について年齢、性別等についての医学的分析を日本歯科大学新潟短大高橋正志教授に依頼した。その結果について次のような報告を得たので掲載する。

(2) . 土葬墓(56・64号墓)出土の歯について

高橋正志(日本歯科大学新潟短大教授)

出土したすべての歯は、薄く褐色に着色しており、土葬されたヒトの歯である。

(1). 出土部位

- a) 56号墓: 下顎右側側切歯の歯冠のみ(咬耗により切縁で象牙質が少し露出している。少し小さい。写真1)。

下顎右側犬歯の歯冠のみ(咬耗により尖頭頂部で象牙質がわずかに露出している。少し小さい。写真2)。

上顎左側第1小臼歯の歯冠のみ(咬耗により頬側咬頭頂部で象牙質がわずかに露出している。少し小さい。写真3)。

上顎右側第1大臼歯の歯冠のエナメル質のみ(各咬頭のエナメル質が、厚さの約半分まで咬耗している。少し小さい。写真4)。

4歯の咬耗度に矛盾がないので、1個体分の歯と思われる。

- b) 64号墓: 下顎左側第1小臼歯の歯冠のエナメル質のみ(咬耗により頬側咬頭頂部で象牙質がかなり広く露出している。普通の大きさ。写真5)。

下顎左側第2小臼歯の歯冠のみ(咬耗により頬側咬頭頂部で象牙質が少し露出している。少し小さい。写真6)。

下顎左側第1大臼歯の歯冠の舌側半分のみ(舌側咬頭の咬頭頂部の頬側のエナメル質がわずかに咬耗している。少し小さい。写真7)。

3歯の咬耗度に矛盾がないので、1個体分の歯と思われる。

(2). 年齢の推定

- a) 56号墓: 上顎左側第1小臼歯の頬側咬頭頂部で象牙質がわずかに露出し、上顎右側第1大臼歯の各咬頭のエナメル質が厚さの約半分まで咬耗している点から、年齢は30~40歳と推定される。

- b) 64号墓: 下顎左側第1小臼歯の頬側咬頭頂部で象牙質がかなり広く露出している点から、年齢は50~60歳と推定される。

(3). 性別の推定

- a) 56号墓: 4歯とも標準形よりも少し小さい点から、どちらかといえば女性の可能性が高いと思われる。

- b) 64号墓: 1歯が普通の大きさで、2歯が標準形よりも少し小さい点から、どちらかといえば女性の可能性が高いと思われる。

※出土木製遺物の保存処理について土葬副葬品である漆器碗14点、数珠玉11件476顆、木簡4点、柱材1点について保存処理を依頼した。各々の属性に適合した保存処理仕様と保存取り扱いについて報告を頂いた。次に保存処理仕様書を掲載する。

[3] . 出土木製品保存処理報告書

勸元興寺文化財研究所保存科学センター

(1) PEG (ポリエチレングリコール) 含浸法 (資料No.2-1~2-11,4)

PEGは分子量によって性状が異なる。当研究所で用いるPEG4000の平均分子量は3,000~3,700で、常温で白色で比重1.2のロウ状固体である。融点は約55℃で水によくとける。

特徴 ①長い歴史と多くの処理実績を持ち、汎用性のある処理法である。

②遺物中の水を徐々にPEGと入れ替えるために遺物を低濃度から高濃度のPEG水溶液に順に浸漬するので、長い含浸処理期間を要する。

③PEGを含漬すると遺物表面の色調が暗くなるが、表面処理によって落ち着いた木質感を得ることができる。

④処理後遺物は重くなる(処理前の約2割増)。

⑤処理後、湿度の影響を受けやすい。

(2) アルコール・キシレン・樹脂法 (資料No.1.5)

乾燥にともなう割れや収縮は水の表面張力(20℃で約73dyne/cm)によるものであるから、水を表面張力の低いキシレン(20℃で約28dyne/cm)に置き換えて乾燥させれば割れや収縮を抑えることができる。しかし、水とキシレンを直接置き換えることはできないので、まず水とキシレンの両者と相溶するエチルアルコールを遺物中の水と置き換え、その後キシレンとエチルアルコールを置き換える。

特徴 ①特に曲物側板のような薄くて靱性や可撓性が必要な遺物に適する。木簡表面の墨書が鮮明に見える。

②処理の全工程を室温以下で行うことができる。

③処理後比較的明るい色調になる

④処理後の遺物は軽くなる(処理前の半分以下)。

⑤水溶性の樹脂を使用しないので、処理後、湿度の影響を受けにくい。

⑥引火性の溶剤を用いるので、消防法の基準を満たす施設が必要である。

(3) 凍結乾燥法 (資料No.3-1~3-14)

水浸遺物は乾燥時に水に表面張力が作用することによって割れや収縮が生じやすい。凍結乾燥法は遺物中の水分を凍結し、凍結状態の水を直接水蒸気として除去する(昇華)ため、遺物の形状を保ったまま乾燥させることができる。

木製品の保存処理では、処理後の遺物に強度を与えるため凍結乾燥の前に予めPEG(ポリエチレングリコール) #4000を含浸しておく。

特徴 ①特に塗染り製品に適した処理法である。厚い遺物には適さない。

②処理の全工程を室温以下で行う。処理期間が短い。

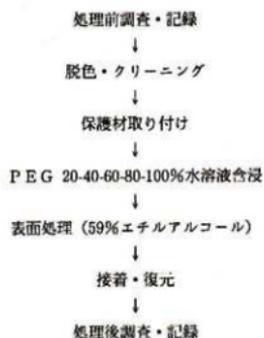
③処理後比較的明るい色調になる。

④処理後遺物は軽くなる(処理前の半分以下の重量)。

⑤遺物表面に細かい亀裂が生じることがある。

⑥処理装置の維持管理コストが高価である。

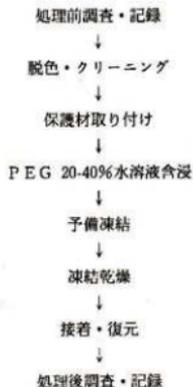
(1) PEG含浸法の工程



(2) アルコール・キシレン・樹脂法の工程



(3) 凍結乾燥法の工程



保存処理後の木製品の取り扱いについて

1. 温度について 1) 高温を避ける。2) 直射日光を避ける。3) 展示には紫外線カットのライトを使用し、熱線による一時的、局部的照射を避ける。
2. 湿度について 1) 高湿を避ける。2) 水を使用する場所や、水漬け遺物と同じ場所での保管は避ける。
3. その他 1) ほこりが付着しないようにし、万一付着した場合にはすみやかに柔らかいもので除去する。2) 水分、水滴の付着を避ける。3) 返却時に保護材を付けているものは、脆弱なものが多く、今後の取り扱いには十分な注意を必要とする。4) 取り扱い時には、不必要な力がかからないようにする。5) 遺物を素手で取り扱わないようにする。



漆器保存処理の打合せ 元興寺(奈良生駒)文化財保存科学センターにて

第6章 まとめ

1 平安時代の遺構・遺物について

遺構の広がりにはA区・C区7～10グリットA～D列の範囲で確認された。しかしA区では土地改良工事に伴って遺構面の大半が削平され、ピット群の確認が困難であった。A区6列のA～Dグリットでは、やや有効なピット群が遺存していたが、基盤層の青粘土が基本土質（沖積層）であり、特徴の把握は極めて困難であった。

柱穴列の建物構造を検討するについても困難であった。ピット群の集中度、および遺物の検出度数などから総合的に掘立柱建造物の存在を想定して、A区C・Dの1・2グリット、A区B～Dの4～6グリットに集中するピット群に規模、柱廻りは不明であるが、なんらかの建造物が想定される。

C区B～Dの7～9グリットに主軸を北西方向とする六本柱の掘立柱建物跡の確認が得られた。しかし先記のとおり、青粘土層内の湧水とこの調査時の降雨によって柱穴の細部にわたる観察が不能であった。にもかかわらず大形柱穴内の柱痕跡には添柱の存在を観察した。粘土層の柔かい地点での根固め工法の特徴をどのような性格の建造物と理解するか。一般的な民屋に比定することは不可能である。特殊な意味を持った祭祀的な性格の建物が考慮される。

SD3（水路跡）はC区F8グリットから南東側に斜行し、A10グリットでL状に曲がる遺構は墓地下に所在した水路遺構である。U字溝底部に堆積した砂は、綺麗な砂で汚れや塵はみられなかった。遺物はなんら確認できるものはなかったが、古代の水路跡と推考される。SK1から4を除く6までのC区A・B8～10に偏在する大形ピットは一切の遺物もなく、特に1～3号のプラン方形の性格が不明である。

なお「県試T10」のA区E5・6地点は土が崩れ、青粘土がない大きな窪地状に黒色土が埋っていた。降雨と調査時間の不足でこの地点は未確認に終わった。しかも側辺が崩落して危険でもあった。

遺物のうち「木簡」については荷札型の検出であるが、文字の解読が不能でもある。したがって内容も時代判定についてもこれを比定資料として位置付けることはできなかった。

土師器 土師器では完形を図化できる資料は僅少である。環のタイプは底部立上の角度のはっきりした体部は直線的に漏斗状に開くもの、立上り角度が緩く、体部が湾曲しながら開くものと口縁部が端反するタイプが含まれる。底部のみの遺存量は多い。この特徴の最大はほとんどが糸切技法によるロクロ切離しが行われたものばかりである。須恵器の底部は4点に過ぎない。これは筒切り後の調整痕が伺われる。口縁部径、底部径の測定値の比率から把握される「底径指数」を計算した。最大（完形でなく推定）56.1、最少33.8cmの両端を除いた10点の平均底径指数は45.2である。

須恵器に底径指数を計算できる資料が皆無であるが、土師器で考慮すると底径指数はかなり小さいことが確認できる。糸切技法が筒切技法の須恵器環の切離技法に採用されるようになるのは、8世紀半ば（天平年間）頃に各地に広まった（北野博司『上越市史研究』1998）。そして8世紀後半から環類は小形化し、底径が小さくなるとしている。該調査による検出土師器の底径は小さいものが圧倒的である。

須恵器環蓋の小片は6点ある。蓋の頂部上面が約水平に整形され、角度をもって蓋の傾斜を作り出している。しかも蓋の頂部は胎土の厚みが比較的大きいことが認められる。天井部外面はロクロ撫で調整の波条文がみられる。このことは環製作技法が、回転糸切技法によって筒による仕上調整されたものと思われる。回転糸切技法の最盛時代の9世紀中葉から10世紀前葉ないし、中葉頃の土師・須恵器を包蔵した浦田遺跡と思

われる。

小国町では土師・須恵器を包蔵する遺跡は、今次調査の浦田遺跡（南側隣接する野田東遺跡を含む）の他には「御館遺跡」（発掘調査 昭和59年奥田直栄）と「桜ヶ丘遺跡」戦後昭和35年頃、耕地整理事業に当って採集された須恵器など（北原勲所蔵）がある。また本調査に当って新たに確認された「原小屋居平遺跡」（湯本昭男所蔵）の4遺跡3ヶ所がある。「御館遺跡」は中世代御館遺跡と平安時代の掘立柱建物遺構4棟他が確認されている。遺構からは竈切技法による須恵器坏3点、回転糸切技法による坏14点の図版がある。底径指数を計算すると須恵器1点は62.0、土師器3点は44.3、37.7、40.0である。これら土師・須恵の土器編年は、「今池遺跡」（坂井秀弥、1984）編年のVI～VII期（9世紀後半～10世紀）に相当する（荒川正明・大河内勉、1985）。と報告している。

また耕地整理事業によって採集された遺物の一部（第33図）を掲載した（北原勲所蔵）。該遺物（「桜ヶ丘遺跡」）はほとんどが中世陶質土器であるが、数点の須恵器を含んでいる。小破片であり点数も少ないために詳細は不明である。これに対し「原小屋居平遺跡」（第34図）は点数も比較的多く、長頸甕、坏底部、坏蓋など特徴的な部位が採集されており、その胎土、技法の土器編年は9世紀前葉（今池編年IV期に比定）に当てられる。「原小屋居平遺跡」と「浦田遺跡」は約6キロメートルの間隔の位置にある。いずれも遺物以外、充分な遺構の確認も得られないために、淡海川谷合下位段丘面にどのような人々の活動が展開されたのかを知るには、さらなる資料の検討を待つ必要がある。

2 縄文時代の遺物について

小国町における縄文時代の遺跡は11遺跡に過ぎない（遺跡一覧表）。遺跡総数66件のうち12%という包蔵率は稀薄である。昭和41年土地改良工事に当って一部発掘調査が行われた「延命寺ヶ原遺跡」がある（中村孝三郎他、1969）。

出土遺物は縄文前期諸磯式期（鍋屋町1式）、中期前葉～中葉期（瓜形文・撚糸文～大木系中期後葉）の遺物。縄文後期の三十稲場式～三仏牛式の磨滑縄文土器。さらに晩期（大洞C₁～C₂形式比定、藤橋式I・II期）の遺物が本調査における全量の過半量を占めている、としている。

さて「浦田遺跡」は、上記「延命寺ヶ原遺跡」の西に隣接する段丘崖下100m前後の近距離の範囲に位置している。遺構の確認はなかった。採集した遺物は77点中土器はわずかに16点（20%）に過ぎなかった。石器は磨石関係が18点（30%）、石鏃3点、大小磨製石斧4点、三脚石器1、巨大スクレーパー1点、石皿1点、稀少な関東から持込まれた網蓋母三波川式の緑泥片岩製の石棒の頭部のみ欠損品1点がある。中央山脈を越えて関東地方との交流が証明された。

土器は細片ばかりで、その特徴の全容を理解するには困難であるが、中期の土器片、後～晩期（工字文系浅鉢型土器）の土器片と思われる。開田工事、耕上の客土搬入などによって他所から持ち込まれたものと考えられる。

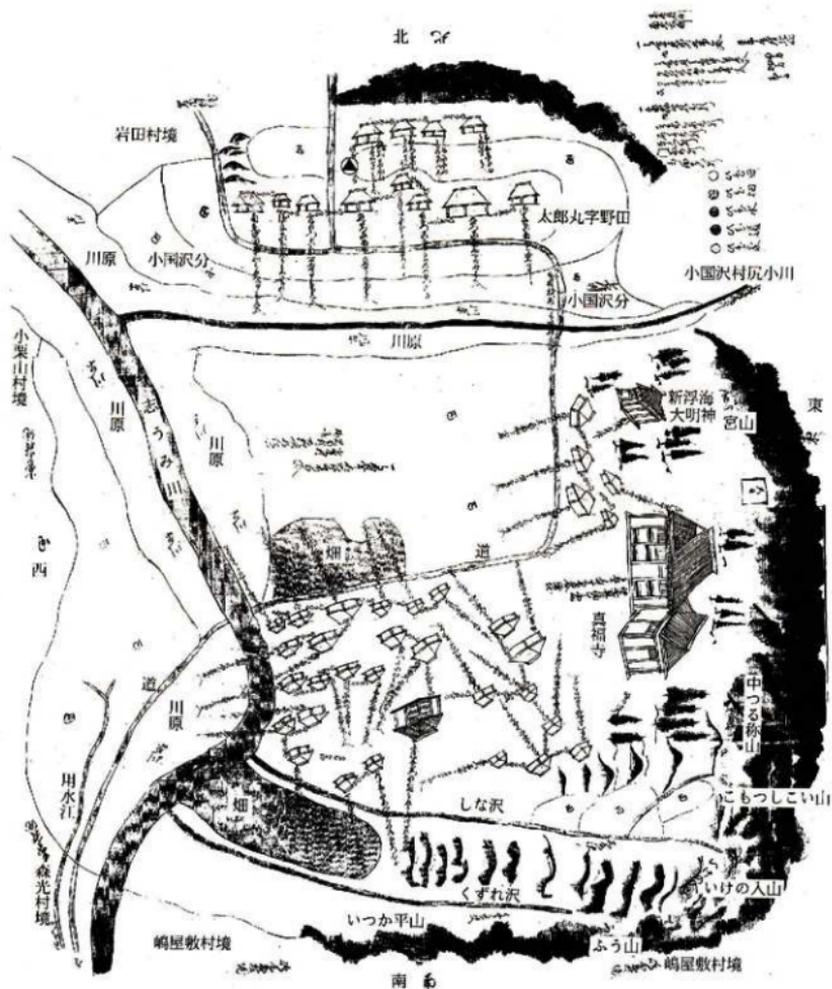
3 近世土葬墓について

発掘された土葬墓について、古老からの土葬習俗を聞き取り調査をすることはできなかった。明治新政府の火葬令や、墓地改正に関する新潟県令の通達や墓地改葬届けなど、地元における資料も確認できなかった。

明治45年生（1912）の湯本千代（千谷沢）は、大正10年に石組の火葬場を記憶している。小国沢小松家文書（小松正淑提供）によれば、明治45年死亡（行年69歳）に当って記録された「香資野菜外受納及経費其他

覚帳」によると、5口日に「灰寄納付」と記録され、火葬されたことが分かる。ちなみにこの葬送に当り、「太郎丸の桶屋から早桶代1円15銭」、納骨箱は23銭の記録がある。さらに大正3年(1914)、2歳の幼児が亡くなった時の「附込帳」では「御経歌佛」の葬送で、「土葬」にしている。一般的に子供の場合は略葬であるが、「可愛そうだから」火葬にしない風が広く行われた習俗であった。

慶応3年(1867)『丁卯、肥後林日鑑』琢宗禅師の記録の中に11月11日庚申の日「(前略)朝後葬送(中略)、申刻収骨茶田場に行く(後略)」と日記に記している。夕方4時頃火葬場に行ったという。太郎丸では慶応



第32図 江戸時代太郎丸村絵図(元禄5年、中島家資料)

3年に火葬であることが知られる。しかし、町村合併の昭和30年（1955）以前には、淡海川左岸の村々では土葬が広く行われていた。棺は箱棺であり挫棺であり、縦埋葬であった。

以上のことから「浦田遺跡」における桶棺の横臥埋葬例は、稀例と思われる。同例が南魚沼郡湯沢町の岡山谷（旧土樽村）にみられた埋葬の習俗である。これとの関連については分らない。『古事類苑』禮式部二によれば、「龕を停止して桶箱になすべく」制度を定めた「長曾我部元親式目」掟は慶長2年（1597）にするよう儉約令が発せられている。なお桶棺中に被葬者の頭に当る部分に検出された乳白色物質は、バリノ・サーヴェイ社の灰像分析によっても「植物繊維質」としながらも、植物種同定は不詳とした。

乳白色物質について、民俗学事例から考察すると、死者に対して仏弟子となるためにオコウズリをする。その頭に真綿を被せる風習である。『古事類苑』の「早懸略記」中に「……綿を真冬トモ澤山に入レテ、身の痛ヌ様……、中の詰メ物ハ、祭主ノ意次第ニスベシ、綿スリヌカニテモ可然、棺ニ前後上下左右印スベシ……」とある。桶棺中から焼粉殻、糞などが出てきた。これらは遺体が動かないように詰められたのは昨今も行なわれたことである。したがって、死者の首まわりに詰められた真綿ではないかと推量される。

野田の人々に忘れられた墓地であるが、野田の先祖達の霊であることは間違いない。元禄5年（1692）の太郎丸絵図には、野田に12軒の家が描かれている。天和3年（1683）「太郎丸村御検地水帳」によれば（『小国町史、史料編』）、同村新田（野田）の住人は庄屋九左衛門を筆頭に9戸の高持百姓の他に欠落百姓1軒、退転百姓1軒が空家になっている。11軒の集落であった。また文化12年（1815）に記録された「御香代帳」から野田村の戸数は9軒である。しかし明治9年（1876）には12軒に復活している。元禄村絵図では、庄屋九左衛門の名子が3軒、自らも退転してしまう五郎右衛門の名子が1軒である。こうした出入りが墓地を守らなくなった家の退転と明治30年代の政府主導による共同墓地造成と墓寄せが県下全域で実施されている。野田集落では共同墓地への移転後も、大正3年まで墓地地籍のまま「浦田遺跡」は経過したものと思われる。



カクレ穴（太郎丸字上の山）